

環東中国海における 二つの周辺文化に関する研究

— 沖縄と済州の「間地方」人類学の試み —

平成 10～12 年度科学研究費補助金
基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書
課題番号 10044011

平成 13 年 3 月

研究代表者 津 波 高 志

(琉球大学法文学部教授)

濟州島における祖先祭祀の分割

—中山村と海村の二つの事例報告—

津 波 高 志

1. はじめに

韓国では祖先祭祀といわずとも、祭祀（チェーサ）だけで祖先祭祀を意味する。題目に誤解を避けるため、わざわざそのように用いたのであるが、本論では韓国の祖先祭祀に関する問題を扱うので、以下韓国式に倣って、単に祭祀と記すこととしたい。

韓国では祭祀を分割する慣行、すなわち長男による祭祀の単独継承ではなく、長男以外の兄弟をも含め祭祀を分割継承する慣行の存在が、1970年代以降、全羅道や濟州島あるいは慶尚道や江原道などから報告されている⁽¹⁾。竹田によれば、「なかんずく濟州島では、それが特定の家門・村落を越えてきわめて広汎に、あたかも全島挙げての慣行かと思われるほど普遍的である」(竹田 1990: 56 頁)⁽²⁾。本稿では濟州島における二つの村、すなわち経済的基盤の異なる中山村と海村における祭祀分割の事例を今年と去年の調査に基づいて報告したい。すなわち、本年度調査を行った涯月邑納邑里（中山村）、去年調査を行った牛島面朝日里（海村）の報告である。

さて、韓国でその慣行が注目される主な理由は、儒式祭祀の受容と関連してのことである。大雑把な言い方をすれば、儒式の祭祀に関して長子奉祀の成立する時期は両班層では18世紀後半以降のことであり、常民層においてはそれよりさらに遅れる。今日における祭祀の分割慣行はその成立する以前における子女輪回奉祀の伝統を汲むものではなかろうかとするのである（たとえば、崔在錫 1983）。その点に関して、濟州島での研究を踏まえつつ、竹田は次のように述べている。

均分相続と即応しつつ伝承されている濟州島の分割祭祀は、形態の上では崔在錫の指摘した17世紀中葉までの両班層の状況と対比してよいものではなかろうか。しかし

州島には現在子女輪回奉祀の伝承は見られず、もっぱら男子の間にのみ分割・輪回され、しかも祭主としての祭祀権はなお長男子（宗孫）が掌握しつづけるならわしで、儒式色彩をかなり濃くしている。この島において、祭祀の分割そのものが決して新しい成立ではなかろうとは推測されても、現行の方式がはたして儒式祭祀の普及以前にまで遡りうるものなのかどうか、なお後学に待ちたい（竹田 1990：83-84 頁）。

一面では崔在錫の指摘に賛意を表しながら、もう一面では慎重さも要求する竹田の姿勢は、一見矛盾するようであるが、必ずしもそうではない。「経済的条件に深く関係する民俗には慎重な検討が要請されよう。もう少し地域的分布を求めて事例を増やした上で、比較検討を試み、この種の慣行を支えてきた地域性を析出してみたいものである」とする意図が基本にあるからである（竹田 1990：82-83 頁）。

従来の諸成果を整理・検討し、竹田のその慎重さも指摘しながら、済州島における祭祀分割に関して独自の見解を披瀝したのが李昌基の研究である。特に、祭祀分割の地域的分布と歴史的な検討は注目に値する。まず、地域的な分布に関しては自身の調査に基づいて、次のように述べている。社会的慣行として行われている祭祀分割は、北済州郡朝天面咸德里から済州市と涯月、翰林を経て、慕瑟浦に至る島の西北地域に広く分布している。それらの地域のなかでも特に済州市の西側から涯月、翰林に至る地域に祭祀分割の慣行が集中的に分布しているように見え、もっとも典型的な形態もこの地域で発見されている。一方、北済州郡旧左邑から南済州郡城山邑、表善面、南元邑、西帰浦市を経て、安徳面の一部村落に至る済州島東南地域では長男奉祀が一般的である（李昌基 1991：297-298 頁）。

また、祭祀分割の歴史に関しては次のように述べている。済州島に現存する祭祀分割は朝鮮時代の輪回奉祀を継承したもの、および長男奉祀を施行してきたが、近代になって新たに祭祀を分割するようになったものと大きく分けることができるであろう。前者の数が非常に少ないとは言っても、祭祀分割の典型的な様相を見せてくれているし、新たに祭祀を分割する事例がそれらを準拠にしているという点において、済州島の祭祀様式の原型と見ることが出来るのではないかと思われる（李昌基 1991：310 頁）。

要するに、李昌基は祭祀を分割する慣行の分布に関しては、済州島全域ではなく、西北地域に限られるとし、その歴史に関しては朝鮮時代に遡りうるものと最近の変化によるものとに分けられるとしたのである。そして、特定村落の事例でもって済州島全体に一般化することの危険性も説いている（李昌基 1991：299 頁）。

本稿の調査地である涯月面納邑里は李昌基の指摘によれば、済州島の分割祭祀のもっとも典型的な形態が発見される地域に入っている。そこにおいて祭祀を分割するようになっ

た理由がきわめて明確な、近代になって変化した事例を一つ扱ってみたい。李昌基によれば、牛島面朝日里は祭祀分割を行わない地域に入っている。しかし、実際には海村における海女の経済力が現に分割祭祀を生成しつつある。これら二つの事例を報告し、済州島における祭祀分割に関する研究の方向性について若干考えてみたい。

2. 納邑里の祭祀分割

涯月面納邑里は非常に歴史の古い中山村で、設村年代は660年以前と推測されるようである（涯月邑 1997: 279 頁）。古くから儒教教育が盛んで、朝鮮王国時代は科擧の合格者を輩出し、今日でも多くの知識人を世に送り出している。自他共に認める「文村」である。孝道村として、道庁から表彰されたこともある。

現在、おおよそ460世帯、1500人の規模で、当然集落としてはきわめて大きい方である。ほとんどが農業に従事しており、主な換金作物は蜜柑である。村の共有財産を活用して、レストランを経営するほどの「富村」でもある。

村の人々の姓だけでも40種ちかくある（涯月邑 1997: 303 頁）。その中で、もっとも大きい一族は金海金氏であるとされている。今回は、その金海金氏のうちの一つの堂内の例を報告したい。それを話者のイニシャルをとって、金 IC 氏堂内と呼んでおきたい（以下、「図. 金 IC 氏堂内の祭祀分割」を参照のこと）。

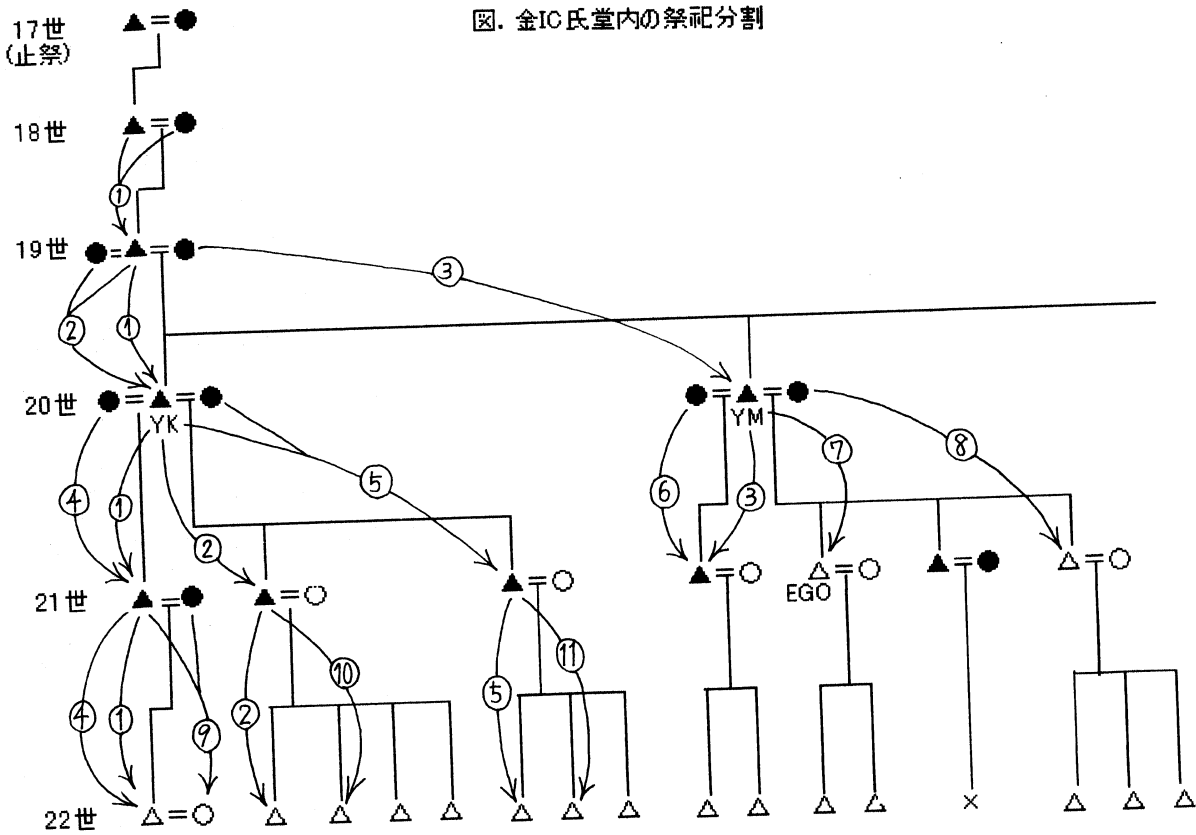
私の聞き取り調査に3日間応じてくれた話者、金 IC 氏を図では EGO と表示した。まず、その話者について簡単に記そう。年齢は75歳で、男性である。小学校まで地元で出て、日本に渡った。勉学に励み、高等学校まで進学したが、2年生のときに大東亜戦争が始まり、結局1年生だけ終了したかたちで、韓国に戻ってきた。韓国では25年間小学校の教師を務め、退職後は納邑で婦人と共に農業、もっぱら蜜柑栽培に勤しんでいる。話者によれば、「農業は悠々自適で楽しい」。

金 IC 氏の堂内では、2年前に17世を止祭にした。それは話者と話者の伯父 YK の長男の長男、すなわちその堂内における22世の宗家宗孫とで相談して決めた。宗家宗孫が話者の家に来て、止祭の話を持ちかけたのである。話者によれば、祭祀の際の祭官は70歳を越えると、「普通は恥ずかしいので止める」。話者の世代（21世）は弟と二人残っているが、そろそろ年齢的に祭官を退く潮時だと思い、17世を止祭にしたのである。

ちなみに、ここでいう17世とは、金海金氏の147派のなかの1公派の、さらに1支派の始祖から数えての17世である。決して、金海金氏全体の始祖から数えて、17世という

ことではない。

図. 金IC氏堂内の祭祀分割



さて、忌祭祀に限定して、金 IC 氏堂内における高祖以下の祭祀分割の様相を図に示してみた。その図だけを見ると、祭祀の分割は古くからの慣行のように思える。しかし、話者によれば、それが始まったのは父親 YM の世代以降のことで、そう古くから行われてきたわけではない。

父親から何度も聞かされた話であるが、75 歳の話者が 2 歳か 3 歳の頃、父の兄 YK が死亡した。死亡する少し前に、いよいよ危ないと、その息子が父 YM を呼びに来た。その枕元で、これまでのように長男にだけ祭祀を継がせ、財産（土地）を譲ると、次男以下の兄弟たちは乞食になるしかない。これからは次男以下にも祭祀を分け、財産を分けてはどうかと提案したら、それが受け入れられた。父 YM は、伯父 YK の死後、その長男を連れて役所に行き土地の登記を行った。

図では省略したが、父親 YM は 3 人兄弟である。ただし、末の弟は系統が違う。そのため、彼に土地は分けてあげても、祭祀は分割しなかった。結局、祭祀の分割は図のように、父が祖母の祭祀だけを分けて受け持つことになった。その他は、従前どおりクンチッ

プ（大家＝宗家）が継承することになった。

父親の代に行われた祭祀と財産の分割は、一見僅かな違いのようであるが、それ以前には無かった大きな変化をもたらした。伯父の死亡以前は、祭祀と言えば、伯父の家でやるものであり、祭祀のための土地すなわち祭月田もすべて伯父の家に相続されていたからである。そして、それ以降は祭祀も祭月田も、また一般的な耕作地も、すべて分けて継承・相続させることになったのである。その結果が図のとおりなのである。

その図はあくまでも忌祭祀（忌祭）に限定されている。名節祭祀（茶礼）はそれに要する負担の軽減のため同じ先祖でも、たとえば旧正は誰かが行い、秋夕はまた別の誰かが行うという具合に、祭祀を交代制で営んでいる。その内容はきわめて複雑なので、ここでは言及しないこととし、忌祭祀の分割に限って、次の2点に注意しておきたい。

一つは、祭祀分割とはいっても、子女すべてではなく、男子のみが分割にあずかり、かつ長男と次男以下の者とはやはり何らかの区別が設けられている点である。たとえば、高祖の祭祀はきちんと宗家宗孫に受け継がれている。また、祭祀を分割し始めたYKを中心に見ると、その長男、次男、三男に対して、世代深度の深い祖先の祭祀から順に振り分けている。また、祀られる者に配偶者が二人いる場合は、先妻を長男に後妻を次男にという具合である。さらに、話者の父親を中心に見てもそれらはまったく同じである。それらからすると、分割とはいってもやはり長男が重視され優待されていることを意味するのではなかろうか。

もう一つは、この金 IC 氏堂内で行われた祭祀の分割が納邑で最初に行われた祭祀分割である、と話者が聞いている点である。話者はあくまでも父親から聞いた話として、それ以前には納邑に祭祀分割はなく、それを例にして他の村人も同様に行うようになったと主張するのである。

余りにも衝撃的な話なので、納邑では比較的大きな豊基秦氏と晋州姜氏から一例ずつ堂内の祭祀分割について、系譜関係を確認しながら、調べてみた。いずれもその開始時期はそう古くはなく、長く見積もってもせいぜい80数年ほど前のことである。理由は金 IC 氏堂内と同じように、弟たちも生活ができるように分けたとするものと、祭月田がなくなったら、自然に分けるようになったとするもの二とおりがある。

ただし、いずれにおいても金 IC 氏堂内から祭祀分割が始まったとする話は聞けない。しかし、時期的にはほぼ一致しているので、金 IC 氏の話の退ける理由もない。理解の仕方として言えば、そういう主張や話がなされるほど、比較的最近始まったということであろう。系譜関係を調べずに、大雑把にその開始時期を尋ねても、日帝時代以前には遡らないただろうとする点でほとんど一致している。

3. 朝日里の祭祀分割

濟州の村々は立地条件や生業形態などを基準にして、よく海村、中山村、山村に分類される。現在の大きな社会変化を考慮すれば、その分類を杓子定期的に用いることには危険性もないわけではない。が、この報告では濟州村落の類型論を展開することが目的ではなく、またその分類は今でも有効性を失っていない面もあるので、取りあえずそれに沿って分けてみると、既に述べたように今年の調査地の納邑は中山村であり、一昨年南濟州郡安徳面徳修里も中山村である。また、私が個人的に調査地としている南濟州郡城山邑水山2里も同じく中山村である。

それらに対して、昨年度の調査地である北濟州郡牛島面朝日里は海女の活躍する有名な海村である。今回の報告では、既述のとおり、海村における海女の経済力が現に祭祀分割を生成しつつある様相に限って扱うこととしたい。

ところで、牛島面は1986年4月1日、北濟州郡旧左邑演坪里から北濟州郡牛島面に昇格した。昇格前は「1里12自然部落」からなっていたが、昇格時に「4里24班」に編成された。

朝日里は牛島面の四つの行政区（里）の一つで、島の東側に位置する。二つの「自然部落」すなわち飛陽洞と迎日洞からなる。二つの洞で一つの里を構成するようになったのは当然牛島が面に昇格してからである。里には里長、洞には洞長がいる。

ここで扱う事例は朝日里のなかでも迎日洞の資料に限られている。迎日洞という洞名は18年ほど前から用いられている。それ以前は後海洞だった。洞内に悪いこと（特に、海難事故）が続いたので、その原因を詮索するなかで、洞名も悪いということで、改めたのである。

迎日洞はウットンネー（上洞）とアルトンネー（下洞）の二つの集落に分かれている。昔から二つで一つの「部落」をなしていた。班区分はその集落が単位となっている。ウットンネーは第1班、アルトンネーは第2班となっている。番地では251番地以降はウットンネーである。

迎日洞で一番多い姓氏は金海金氏である。ただ、金海金氏は幾つかの派に分かれていて、一緒になにか行事を行うということはない。その次に多い姓氏が光山金氏で、さらにその次が濟州高氏である。その他は1戸か2戸ほどの姓氏である。

半農半漁の典型的な村落である。男性は農業のみ、女性は海女の仕事をこなしながら、

農業も行う。主要換金作物は落花生、ニンニク、大麦（ビールの原料）などである。

女性が海に潜って行う仕事をムルジル（murjir = mur 水 + jir 作業）と言う。季節によって作業の内容は異なる。それを整理すると、以下のようになる。

10月1日から4月末まで・・・ウニ、サザエ、アワビなどの貝類

3月の数日間・・・・・・・・・・ヒジキ

3月から8月・・・・・・・・・・天草（寒天の材料）

3月から9月・・・・・・・・・・カムテ（海草の一種）

天草は寒天の材料で、カムテは農業用の肥料となる。海女の仕事は時期によって、貝類を捕獲する時期と海草を採集する時期に区分される。5月から9月までの海草を採集する時期は、貝類の産卵期なので捕獲しない。農業の忙しい時期とも重なる。海女が深く潜り、貝類を捕獲する時期は農閑期である。一年で収入が最も多い時期である。

海女は33年前までは70人以上いたが、現在は45人にまで減っている。年齢的には75歳までは出来ると見ても、5年後に6人、10年後にはさらに10人減り、その後も次第に減り続けるであろう、とされている。

このように、将来的にはいささか問題もないわけではないが、海女の漁業は現時点では経済的にきわめて重要である。中山村と比較すると、その点ははっきりしている。夫婦間の経済的関係に関してまったく異なる側面を見せているからである。

農業を主要な生業とする中山村では、夫婦とともに働き同財をなす（実質的には夫に牛耳られてしまう）。それに対して、迎日洞では農業はともに行うが、海仕事に関しては全く女性のみ労働である。農業からの収入は男性（夫）の名義で農協に貯金し、漁業からの収入は女性（妻）の名義で漁協に貯金する。つまり、実質的な夫婦別財になるわけである（しかも、妻の経済力がはるかに高く、実質的に家庭経済を牛耳っている）。

夫婦別財の家庭経済は沖縄の糸満とも比較研究が可能であるが、それはおくとして、海女の経済力は祭祀の継承方式にも影響を与えている。祭祀にかかわる長男の負担を少なくする意味で、母親が済州市あたりに住んでいる次男に家を買ってあげ、死亡後には母親のみ次男が祭祀を執り行う事例も出現してきている。つまり、祭祀の分割である。迎日洞で3例ほどあるとのことである。ただし、それは比較的最近のことで、30年以前には遡らないし、世代的には親の代までで、それより先には及ばないとされる。

祭祀の分割そのものは済州の他の地域でもみられるので、海村の特徴とは言えない。しかし、迎日洞においては海女の経済力が最近になってそれを生成しつつある。それが海村

以外では見られない点なのである。そして、注目すべきは海村が豊になるのは 1970 年代以降、海産物が日本に大量に輸出されるようになってからだとされる。それに、80 年代以降の観光産業が拍車をかけているのである。

4. おわりに

既に述べたように、「済州島に現存する祭祀分割は朝鮮時代の輪回奉祀を継承したもの、および長男奉祀を施行してきたが、近代になって新たに祭祀を分割するようになったものに大きく分けることができる」（李昌基 1991 : 310 頁）。つまり、済州島における現行の祭祀分割は、輪回奉祀継承型と長男奉祀変容型に分けることが出来るわけである。それに関しては私もまったく賛成である。

しかし、「前者の数が非常に少ないとは言っても、祭祀分割の典型的な様相を見せてくれているし、新たに祭祀を分割する事例がそれらを準拠枠にしているという点において、済州島の祭祀様式の原型と見ることが出来るのではないかと思われる」（李昌基 1991 : 310 頁）とすることに関しては、すべての長男奉祀変容型が輪回奉祀継承型を準拠枠とし、原型として出現したとの考え方であるとすれば、ここで一歩立ち止まって検討する余地があるであろう。

なぜなら、現行の長男奉祀変容型を韓国内部の伝統だけで説明しているからである。それも一つの枠組みとして念頭においておくべきではあろうが、もう一方ではすべてを内部的な伝統のみに閉じ込めるのではなく、否応なしに押し寄せてくる外部からの大きな影響も考慮する必要があるのではなかろうか。

朝日里における事例は、慣行化された祭祀分割とはいえないかもしれない。しかし、それが現に生成されつつあるのである。それに比べると、納邑里における事例は確かに慣行化されていると見なしうる。が、それにしても時期的にそう古くはない。それらをつき合わせて考えると、前者には海産物に対する需要の増大、後者には日韓併合という外部からの大きな影響があった。そのような影響のもとで、人々が従前の文化によりつつ如何にそれに対処していったのか、そして、そのことによって如何に文化が変容していったのかといった枠組みを準備し、変化の一つの側面として祭祀分割を捉えることも可能なはずである。

それらの外部からの影響まで考慮に入れて長男奉祀変容型を捉えていくのか、それともそれらを排除して内部的な伝統のみにこだわるのか、その差は大きい。今後の方向性とし

て、もう少し事細かに事例を収集し、土地ごとの説明も聞きながら、内的伝統と外的影響の両者から検討する必要がある。

注

- (1) これまでの報告を李昌基は地域別にまとめていて便利である（李昌基 1991）。
- (2) 竹田 1984 「韓国における祖先祭祀の分割について」『民俗学評論』24 は「祖先祭祀の分割—韓国済州島・珍島」と改題されて、竹田 1990 に所収された。本稿では後者の頁によっている。

引用文献

- 崔 在錫 1983 『韓国家族制度史研究』 一志社
- 涯月邑 1997 『邑誌』
- 李 昌基 1991 「済州島の祭祀分割」崔在錫教授停年退任記念論叢『韓国の社会と歴史』
一志社
- 竹田 且 1990 『祖先祭祀と死霊結婚—日韓比較民俗学の試み—』 人文書院

島嶼地域における住民意識と地域開発

— 濟州島牛島を中心として —

大 城 肇

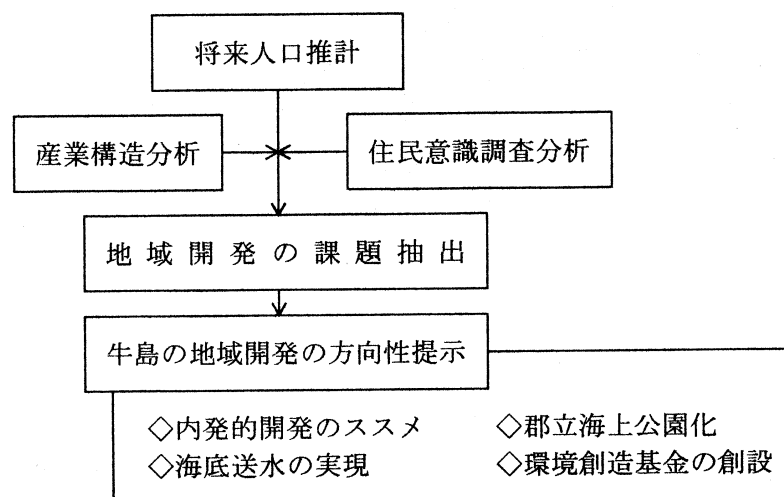
1. はじめに

島嶼地域は、環海性、隔絶性、狭小性によって特徴づけられる。島嶼地域の振興は、経済性の原理にのりにくく、地域開発が後れ、人口の島外流出を招き、コミュニティの存立が危ぶまれるような過疎化現象を引き起こしてきた。

韓国・濟州道北濟州郡牛島は、典型的な島嶼地域であり、一国の中の島嶼地域のさらに島嶼部に位置し、様々な不利性を有している島である。一方において、牛島は貴重な資源を有し、今後の発展の可能性も秘めている。

本稿では、牛島の住民意識と地域開発の実態を調べ、住民主体の地域開発のあり方を探ることをねらいとする。まず、牛島の産業形態等の経済実態を把握するとともに、地域開発の現状を調べ、課題を明らかにする。続いて、地域開発に対する住民意識を調べ、住民主体の地域開発の課題と方向性を具体的に提示することにした。

とりまとめは、いかなる作業フローにしたがって行う。



2. 牛島の概況

(1) 歴史的・地理的概況

濟州道北濟州郡牛島面は、300年以上の歴史をもつ島嶼地域である。韓國島嶼白書等によると、1679年に国営牧場が設営され、馬や牛を管理・飼育する監牧者が入島したのが牛島の歴史の始まりのようである。その後、1844年に金氏一行が入島して村が形成されるようになり、1900年にヨンピョンと命名された。

時代が下って、日帝時代の1932年1月12日、漁獲物の販売手数料等を通じた商人の搾取に激怒した数百人の海女らが、全国にも類例のない大々的な抗日運動を展開した。それを記念した牛島海女抗日運動記念碑が、1995年12月9日、港の入り口に建立された。牛島は、1986年4月1日に面へ昇格して牛島面と改称され、今日に至っている。

牛島は、北緯33度30分、東経120度57分に位置し、面積は6.012km²であり、17.0kmの海岸線を有している。牛島の南北最長幅は3.8km、東西最長幅は2.5kmである。島は黒潮に囲まれ、年平均気温は15.4度、年平均降水量は1,890mmと温帯海洋性のモンスーン気候である。水産資源に恵まれ、沿岸ではサザエ、トコブシ、ヒジキ、天草等の定着性の高付加価値産品が海女の潜水業を支え、近海ではするめイカを中心に大衆魚等の資源が豊富に生息している。

牛島の総面積601.2haのうち71.5% (430.0ha) は畑地であり、15.0% (90.0ha) は林野が占めている。地形は、東南東部が丘陵になっていて、比較的平坦な島である。土地の利用度は高く、農産物はピーナツ、ニンニク、ジャガイモ、麦などの商品作物に特化している。

牛島は、自然景観について優れた資源をもつ島である。牛島には牛島八景と呼ばれる名所があり、釣りや海水浴場などとともに、観光資源となっている。牛島八景とは、晝間明月、夜航漁帆、天津觀山、地頭青莎、前浦望島、後海石壁、東岸鯨窟、西濱白沙のことである。

牛島面は、西光里、天津里、朝日里、五逢里の4つの里から構成されている。そのうち面積の広いのは朝日里(209.2ha)、天津里(155.0ha)、五逢里(126.7ha)、西光里(110.3ha)の順であり、戸数と人口の多いのは五逢里(200戸、595人)、朝日里(159戸、474人)、西光里(148戸、422人)、天津里(131戸、386人)である(1999年5月1日現在)。

また、牛島面には上牛目洞、下牛目洞、中央洞、東天津洞、西天津洞、迎日洞、飛陽洞、錢屹洞、三陽洞、周興洞、上古水洞、下古水洞の12の洞があつて、集落を形成している。落ち着いた佇まいの集落景観は優れたものがある。洞と洞を結ぶ道路は、大部分が道幅の狭いセメント

舗装道路であるが、中央洞と東天津洞を結ぶ線は唯一のアスファルト舗装道路である。入り込み観光客の増大に対して、道路整備が進まない状況にある。

(2)人口特性

牛島面の総人口（住民登録人口）は、1999年12月31日現在、1,805人であり、5年前の1994年（2,113人）に比べ、14.6%（308人）の減少となった。年平均3.1%づつ減少したことになる。1985年に3,326人であった牛島の総人口は、年々減少傾向を示し、14年後の1999年には54.3%水準まで減少した。

この人口減少傾向は、今後も続く見込みであり、1994年と1999年のデータをもとにコーホート要因法による予測推計では、2004年には1,566人、2009年には1,376人、そして2010年には1,342人と、85年の半分以下（40.3%水準）に達する見通しである。

近年、人口減少率は逡減しつつあるものの、依然として2.5%前後の年平均減少率で推移する見込みである。地域振興や産業振興によって、人口減少傾向にどう歯止めをかけるかが、牛島の直面している大きな課題である。

人口動態の特徴を、1994年のデータをもとに検討しよう。1994年の総人口（2,113人）は、1993年の2,192人に比べ79人（3.6%）の減少であった。94年中の出生数は33人、死亡数は16人であり、17人の自然増であった。一方、転入数は113人、転出数は209人であり、96人の社会減を示した。結局、自然増の5.6倍も上回る社会減によって、79人（＝17人－96人）の人口減となったのである。つまり、牛島の場合、大幅な社会減が人口減少の主因であり、いかにして人口の島外流出をくい止めるか、換言すれば島内に雇用の場をいかにして創出し、人口のUターンやIターンを促すかが課題となる。

牛島面の人口構造を北濟州郡や濟州道のそれらと比べると、以下のような特徴がみられる。

- ①女性の構成比（53.4%；1999年）が道（50.4%）や郡（49.9%）よりも高い。
- ②年少人口と生産年齢人口が減少し、高齢人口が増加しており、道や郡に比べ年少人口比率（14.4%）が小さく、高齢人口比率（17.2%）が高くなっている。
- ③年齢階層別では、15～24歳層と50歳以上の層において、牛島の構成比が高くなっている。
- ④高齢化が進行しており、2009年には老年人口指数（＝65歳以上／15～64歳）が50.4%、高齢化指数（＝65歳以上／0～14歳）は251.2%に達する見通しである。
- ⑤牛島の世帯数は、1993年の622世帯（2,192人）から1998年の638世帯（1,877人）へ、5年間で16世帯の増加がみられた。1世帯あたりの人口は、93年の3.52人から98年

の 2.94 人へ減少している。郡内では人口減少のもっとも著しい地域であるが、世帯減を伴わない人口減の形態を示している。

表1 人口構造の比較

単位：人、%

	牛島面				北濟州郡		濟州道	
	1994年		1999年		1999年		1999年	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
総人口	2,113	100.0	1,805	100.0	100,808	100.0	538,744	100.0
男	989	46.8	842	46.6	50,469	50.1	267,338	49.6
女	1,124	53.2	963	53.4	50,339	49.9	271,406	50.4
年少人口	376	17.8	260	14.4	18,785	18.6	118,522	22.0
0~4	103	4.9	84	4.7	7,004	6.9	41,945	7.8
5~9	103	4.9	88	4.9	6,541	6.5	42,072	7.8
10~14	170	8.0	88	4.9	5,240	5.2	34,505	6.4
生産年齢人口	1,496	70.8	1,234	68.4	69,823	69.3	379,100	70.4
15~19	277	13.1	154	8.5	7,744	7.7	44,565	8.3
20~24	288	13.6	211	11.7	8,968	8.9	45,519	8.4
25~29	164	7.8	156	8.6	10,130	10.0	52,428	9.7
30~34	108	5.1	92	5.1	8,638	8.6	49,686	9.2
35~39	84	4.0	96	5.3	7,434	7.4	47,392	8.8
40~45	85	4.0	95	5.3	6,458	6.4	40,816	7.6
45~49	107	5.1	87	4.8	4,644	4.6	27,591	5.1
50~54	117	5.5	109	6.0	4,977	4.9	25,896	4.8
55~59	138	6.5	106	5.9	5,311	5.3	24,021	4.5
60~64	128	6.1	128	7.1	5,519	5.5	21,186	3.9
高齢人口	241	11.4	311	17.2	12,200	12.1	41,122	7.6
65~69	90	4.3	120	6.6	4,694	4.7	16,239	3.0
70~74	58	2.7	85	4.7	2,657	2.6	9,170	1.7
75~	93	4.4	106	5.9	4,849	4.8	15,713	2.9

資料：濟州道「1999年度住民登録人口統計報告書」（1999年12月31日現在）。
木浦大学臨海地域開発研究所『韓國島嶼白書』参益印刷社、1996年6月。

表2 将来人口推計（牛島面）

	1994年 住民登録人口	1999年 住民登録人口	2004年 推計人口	2009年 推計人口
総人口(人)	2,113	1,805	1,566	1,376
年平均伸率(%)	-8.0	-3.1	-2.8	-2.6
男子計(人)	989	842	718	625
女子計(人)	1,124	963	847	751
0~14歳(人)a	376	260	208	162
15~64歳(人)b	1,496	1,234	971	807
65歳以上(人)c	241	311	386	407
人口構成比(%)				
男子計	46.8	46.6	45.8	45.4
女子計	53.2	53.4	54.1	54.6
0~14歳a	17.8	14.4	13.3	11.8
15~64歳b	70.8	68.4	62.0	58.6
65歳以上c	11.4	17.2	24.6	29.6
年少人口指数 a/b	25.1	21.1	21.4	20.1
老年人口指数 c/b	16.1	25.2	39.8	50.4
従属人口指数 (a+c)/b	125.1	121.1	121.4	120.1
老齡化指数 c/a	64.1	119.6	185.6	251.2

資料：表1に同じ。

表3 将来人口推計（北濟州郡）

	1985年 住民登録人口	1990年 住民登録人口	1995年 住民登録人口	2000年 推計人口	2005年 推計人口	2010年 推計人口
総人口(人)	114,118	108,801	88,726	78,668	69,772	61,831
年平均伸率(%)	-1.4	-0.9	-4.0	-2.4	-2.4	-2.4
男子計(人)	55,203	53,345	43,167	38,227	33,946	30,021
女子計(人)	58,915	55,456	45,559	40,441	35,826	31,809
0～14歳(人)a	34,167	24,962	17,929	14,544	12,899	10,539
15～64歳(人)b	70,657	73,729	59,791	51,437	42,997	37,199
65歳以上(人)c	9,294	10,110	11,006	12,686	13,875	14,094
人口構成比(%)						
男子計	48.4	49.0	48.7	48.6	48.7	48.6
女子計	51.6	51.0	51.3	51.4	51.3	51.4
0～14歳a	29.9	22.9	20.2	18.5	18.5	17.0
15～64歳b	61.9	67.8	67.4	65.4	61.6	60.2
65歳以上c	8.1	9.3	12.4	16.1	19.9	22.8
年少人口指数 a/b	48.4	33.9	30.0	28.3	30.0	28.3
老年人口指数 c/b	13.2	13.7	18.4	24.7	32.3	37.9
従属人口指数 (a+c)/b	148.4	133.9	130.0	128.3	130.0	128.3
老齡化指数 c/a	27.2	40.5	61.4	87.2	107.6	133.7

資料：北濟州郡『統計年鑑』各該当年版。

3. 牛島の産業特性

(1) 就業構造

牛島の経済は、「農業＋漁業＋観光関連サービス業」から成る複合産業形態の島嶼経済である。北濟州郡の「第39回統計年報1999」によると、牛島の産業別従事者（工員、職工、従業員）は以下の通りである（1998年）。なお、この統計には農業や漁業等の自営業主は含まれていない。最も多いのが観光関連のホテル・レストラン業であり、全体の42.3%を占めている。次いで、卸・小売業、公務・軍・社会保障関係となっている。

全産業	482人 (100.0%)
漁業	10人 (2.1%)
電気・ガス・水道	2人 (0.4%)
建設業	7人 (1.5%)
卸・小売業	98人 (20.3%)
ホテル・レストラン業	204人 (42.3%)
運輸・通信業	35人 (7.3%)
金融・保険業	12人 (2.4%)
公務・軍・社会保障関係	50人 (10.4%)

教育	29人 (6.0%)
保健・ソーシャルワーク	6人 (1.2%)
その他・個人・社会サービス業	29人 (6.0%)

産業従事者の平均年齢は高く、後継者不足が懸念されるが、住民はそれほど危機感をもっていない。

(2) 農業

牛島の農業は、畑作に特化しており、畜産が若干営まれている。牛島の農作物は以下のような作目であるが(1998年)、土地の利用度は高く、落花生、ニンニク、ジャガイモ、大麦などの商品作物に特化している。中でも、落花生は北済州郡の全量を生産している。作付け面積では、大麦が198haと広大である。大麦とニンニクは夏作、サツマイモ、ジャガイモ、落花生は冬作であり、いずれも島外出荷を行っている。

大麦	198ha	527M/T	落花生	150ha	377M/T
ジャガイモ	102ha	1,244M/T	牛	28戸	215頭
サツマイモ	26ha	532M/T	豚	1戸	510頭
ニンニク	88ha	800M/T	馬	1戸	1頭

自家用の野菜類を栽培しているものの、白菜、キャベツ、タマネギ、人参、キュウリ、トマト、キノコ類、ミカン類等は、島外から移入しているのが現状である。

(3) 漁業

1998年の牛島の漁業従事者数は、387名であった。里別では五逢里が最も多く、137名と全体の35.4を占めている。次いで朝日里の111名(28.7%)、天津里の78名(20.2%)と続き、西光里の61名(15.8%)が最も少なかった。

聞き取り調査によると、漁業従事者のうち、海女は46名ということであった。海女の年齢層は40歳代から70歳代までであるが、平均年齢は60歳代ということであった。海女は高齢化していて、10時30分頃出漁して5～6時間にわたる潜水漁は、肉体的に重労働のようである。潜水服が従来の木綿製からスポンジ製品に代わったことも長時間労働につながっているようであり、潜水病特有の頭痛や聴覚障害をもつ海女が多いとのことであった。

海女は、潜水または潜嫂と称され、作業能力が優れていることもあって、強靱性と勤勉性の象徴とされている。1945年以前は、日本や中国まで出稼ぎに行っていた。漁獲物は、サザエ、アワビ(トコブシ)、ウニ、ナマコ、ワカメ等の高付加価値産物であり、漁業収

人は高いようである。

郡の水産協同組合出張所で把握している牛島の漁業生産額は、1998年について14億1,981万ウォンであった。96年の16.0億ウォンに比べ11.3%の減少となったが、97年の12.0億ウォンに比べると18.3%の増加となり、豊漁と不漁の波がみられる。主要漁獲物は、天草(43.3%)、サザエ(31.5%)、ヒジキ(7.7%)などが中心であり、魚類生産は少ない。魚類は系統外出荷となっている可能性が高い。

天草やヒジキ、トコブシの生産額は減少傾向にあるが、サザエやナマコ等を含むその他の生産額は増加傾向にある。里別では、漁業従事者の多い五逢里の生産額が多かったが、1998年についてはサザエの生産額が大幅に伸びた朝日里が全生産額の41.3%を占めた。

なお、資源保護と海域の汚染防止、潜水漁の安全確保のため、特定地点での釣り(遊漁)は禁止の方向にあるが、釣りへのニーズは高いようである。撒き餌の海域汚染や釣り糸・針・鉛の放棄による海女の活動海域の安全性の問題などをめぐって、島外からの釣り客とのトラブルが生じたりしており、観光の振興との関連で漁業と釣り・遊漁との調整が必要な事項となろう。また、漁業許可を得ない不法漁業による資源管理上の問題も指摘されている。

表4 牛島面の漁業生産

単位：千W

里	年	漁業従事者	サザエ	トコブシ	ヒジキ	天草	その他	合計
天津里	1996		39,727	1,545	37,487	104,748	1,591	185,098
	1997		41,548	6,317	26,585	97,611	1,360	173,421
	1998	78	33,985	3,530	18,122	68,878	47,626	172,141
西光里	1996		42,364	4,176	8,906	133,076	0	188,522
	1997		21,758	2,119	7,222	128,109	4,986	164,194
	1998	61	45,332		3,243	89,338	13,737	151,650
五逢里	1996		88,781	27,489	102,918	565,934	29,006	814,128
	1997		33,477	2,785	56,790	453,024	0	546,076
	1998	137	65,984		51,581	332,930	58,932	509,427
朝日里	1996		50,382	4,123	100,147	247,197	11,594	413,443
	1997		51,117	2,431	52,525	209,209	761	316,043
	1998	111	301,539		37,012	123,644	124,400	586,595
計	1996		221,254	37,333	249,458	1,050,955	42,191	1,601,191
	1997		147,900	13,652	143,122	887,953	7,107	1,199,734
	1998	387	446,840	3,530	109,958	614,790	244,695	1,419,813

資料：北濟州郡水産協同組合出張所の内部資料。

(4) 観光関連業

牛島の観光客は年間約30万人が入域するが、夏場のピーク時の民宿利用を除くと、観光で落ちるカネは少なく、地元での波及効果は小さい。他方、道路整備が十分でなく、レンタカー等を使う観光客の外部不経済が大きく、住民にとっては迷惑的存在になっている。

牛島八景やサンゴ等の海中景観は牛島の誇る観光資源であり、年間入り込み観光客数は30万人と推計されている。夏場は海水浴と島巡り、冬場は島巡り観光が主流である。観光のパターンは、日帰り観光が主流であり、夏場は1～2泊の民泊（民宿での宿泊）がある。訪問頻度は、はじめての訪問が多く、リピーターは多くないようである。団体とグループという形態が多い。

牛島での観光客の支出は、食事費（おやつ代を含む）と土産品費が中心であり、公式の統計はないが、2万ウォン前後である。したがって、島に落ちる観光収入は60億ウォン前後と概算できる。しかし、島の住民にとっては、狭い道路を行き交う観光自動車の騒音やゴミ投棄等の外部不経済の解消が、クリアすべき課題として指摘されている。一周道路等の生活基盤整備が地域振興にとっての課題である。

牛島の宿泊施設は、1998年現在、民宿（民泊）が68軒、旅館が1軒となっている。民宿の1軒あたり部屋数は3.8室であり、最大収容人数は1,300人程度である。経営者は30歳代から70歳代までの層であるが、平均年齢は51.6歳である。里別にみると、海水浴場を備えた西光里27軒（39.7%）と五逢里25軒（36.8%）に多く分布している。食堂・レストランは12軒が立地している。

4. 牛島の住民意識

(1) 使用データの限定事項

以下の分析に用いるデータは、北濟州郡が郡の長期計画である「DIPPER PLAN 21」を策定するにあたって実施した「住民基礎需要調査」（1999年9月）の結果によって得られたデータである。これをベースにして、現地調査の成果をふまえて分析し、牛島面の地域開発に係る課題を抽出することにする。

「住民基礎需要調査」は、21世紀の北濟州郡の邑、面の発展戦略を樹立するために、地域住民の意見を反映させようとして実施された調査であり、ボトム・アップの地域開発を指向した計画手法として高く評価できる。調査は、北濟州郡の7つの邑と面の住民1,634人を対象にして、個別面接による方法によって実施された。主要な調査内容は、住民生活の実態及び満足度、邑・面の発展に対する評価、商圈、貯蓄動機、将来の展望、地域産業振興の方向などである。同調査は、1998年3月28日から4月23日にわたって実施された。

牛島面に関するDIPPER PLAN 21策定のための「住民基礎需要調査」の属性と調査項

目は、以下のとおりである。

牛島面の調査サンプル数= 97名

年 齢		性 別		学 歴	
20代	24名	男性	77名	無学	8名
30代	18	女性	20	小学校卒	17
40代	21			中学校卒	13
50代以上	34			高等学校卒	44
				大学卒以上	15
職 業 別				月 収 入 別	
事務管理職	2名	主婦	2	50万W以下	
生産技術職	2	学生	3	50 - 100万W	
販売業	18	公務員	10	100 - 150万W	
みかん業	1	無職	4	150 - 200万W	
農業	37			200 - 300万W	
水産業	13			300万W以上	

〈調査項目〉

1.地域の生活条件についての満足度	13.子どもの進学問題
2.生活条件の不満足分野	14.将来人口の展望
3.邑・面の発展状態	15.人口減の理由
4.邑・面に必要な施設	16.政策決定への住民意思の反映
5.環境破壊についての考え	17.公務員の親切度
6.引越についての意思	18.家庭の重要な産業
7.引越先の地域	19.産業面の問題点
8.引越をしたい理由	20.転業意思
9.生活用品の入手先	21.子どもに仕事を継承させることについて
10.生活用品の入手先	22.個人的に願うこと
11.収入と貯金の比率	23.濟州道の将来の産業
12.貯金目的	

(2)牛島の住民意識

地域の生活条件についての満足度をみると、郡平均では「まあまあである」という中間

的評価がもっとも多く、42.9%をしめた。これに対し、牛島では「やや不満」と答えた人が43.3%と高く、郡平均の28.4%を大きく上回っている。「とても不満」(11.3%)とする回答も郡平均(3.9%)を上回っており、島嶼地域・済州島のさらに島嶼部である牛島の生活条件が満足いくものでないことが明らかにされている。

生活条件が不満足な分野については、郡平均が①交通(22.8%)、②居住生活(16.6%)、③産業経済(16.4%)の3分野が指摘されているのに対し、牛島では①居住生活(38.6%)、②交通(22.8%)、③教育、文化(ともに8.8%)に比較的高い不満足度が示されている。

具体的には、牛島の居住生活分野では飲料水問題と衛生問題が、交通分野では天候悪化時の旅客船利用や道路舗装、障害者のための交通手段などに関しての不満が高い。教育分野では高校や専門学校の不足、文化の分野では文化事業や文化活動への参加機会の不足や文化施設の未整備等である。

牛島は島嶼であるので、特に海上交通や島内交通に対する不満が高くなっても良さそうであるが、ワースト第2位にランクされている。これは、フェリー(牛島出身者の個人経営、植民地時代から操業)が頻繁に対岸と行き来していることで、住民がそれほど隔絶性を感じていないからであろう。また、観光客の増大による島内の交通問題は、居住環境の悪化と写っているふしがある。

フェリーは、冬場は8時から17時まで、夏場は7時30分から18時30分までほとんどピストン運行(10数分間隔)である。なお、時化るときが多く、運行時間外の急患や急用(結婚式や葬式等)の場合は、5万ウォン程度で備船している。そのようなとき、島での生活が不便であると感じているようである。

民選自治以後、邑や面の発展状態を他の地域と比べて比較するとき、相対的にどのように評価するかという問に対する回答では、牛島の発展は「まあまあだ」が46.4%を占め、続いて「多少発展した」が24.7%と郡平均(21.3%)を上回る評価になった。「とても発展した」(3.1%)を加えると、回答者の4分の3近く(74.2%)が肯定的な評価を下している。

邑・面に必要な施設に関する設問では、郡平均のニーズは交通関係(28.7%)が最も高く、農水産物関係(15.5%)、上・下水道(10.7%)、福祉関係(9.2%)、環境関係(9.1%)と続いている。牛島では、上・下水道(60.8%)が圧倒的に高いニーズとして表明されている。現在、牛島では海水淡水化施設による給水システムをとっているが、給水容量やコスト面で制約があり、水問題の解決が大きな課題の一つとなっている。一方、下水処理施設も整備されてなく、下水による海域汚染も問題になっている。続いて、交通関係(13.4%)、港湾・道路(7.2%)、環境関係(5.2%)となっている。港湾・道路では防波堤の不

足や道路の拡幅・舗装、海岸循環道路の整備の必要性であり、環境関係の中心はゴミ処理、環境汚染、浄化施設等の問題である。

環境破壊に対する考えも、牛島面は他の邑・面に比べ特徴がみられる。地域住民の生活向上を目的に各種開発事業を実施する過程で、環境が破壊されることに対し、「絶対反対」という考えを持っている人は64.9%にもものぼり、郡平均の43.9%を大きく上回っている。逆に、「環境を破壊してもよい」とする考えは、郡平均21.5%に対し、牛島は11.3%にすぎなかった。「環境が優先になる開発は甘受する」(22.7%)を含めると、環境を優先すべきという考えの人は87.6%に達する。

このような環境にセンシティブな考えは、島嶼地域の特徴といえるかも知れない。とりわけ牛島は牛島八景と呼ばれる優れた自然景観・環境資源を有していることから、住民の環境保全に対する意識は高いといえよう。島嶼環境は閉じたエコ・システムであり、環境容量が小さいことから、いったん破壊が進むと、回復が難しい。都市部で失われた豊かな環境が島嶼地域には残されており、今後、このような恵まれた自然環境を活かした観光のあり方も模索されるであろう。

他の地域に引越す意思を持っているかについての設問でも、牛島は他とは違う回答になっている。郡平均では、引越の意思は「ない」が76.5%、「ある」が23.5%であった。これに対し、牛島は「ない」は59.8%と相対的に低くなり、「ある」が40.2%にのぼった。これは、これまでの設問項目とも関連があるが、島嶼の居住環境や所得機会、社会的資本等の諸条件が、本土(本島)や都市部のそれらに比べ劣っていることの結果である、と推察できる。つまり、島嶼地域において定住条件をいかに整備していくかが課題となろう。

引越先の地域についての牛島の住民意識は、「済州市」(70.0%)、「済州島外」(12.5%)、「他の邑・面」(10.0%)等々となっていて、郡平均(それぞれ69.4%、12.9%、7.6%)と大きな差はなかった。

引越したい理由を牛島面についてみると、「教育のため」(35.0%)、「生活の利便さを求めて」(27.5%)、「職場の関係」(25.0%)が三大要因となっている。郡平均もこの順位であるが、ポイント差をみると、牛島が「職場の関係」で9.3%ポイント、「教育のため」で4.2%ポイント高くなっている。

次に、収入に占める貯蓄割合(貯蓄性向または貯蓄率)をみると、郡平均では「5%未満」(39.2%)が最も多く、「30%以上」(16.7%)、「20-30%」(14.6%)と続いている。これに対し、牛島は「5%未満」(38.1%)と「20-30%」(34.0%)に二極化している。

貯蓄目的は、牛島については「子どもの教育のため」(45.4%)、「老後の生活の準備」(30.9%)、「現金の保管」(19.6%)となっていて、「旅行・余暇活動の費用」や「結婚資金」の

ための貯蓄動機は低い。郡平均では「老後の生活の準備」(44.4%)が最も多い理由・動機であるが、牛島では「子どもの教育のため」(45.4%)が郡平均(31.2%)を14.2%ポイントも上回り、特徴的である。

子どもの進学問題についての設問では、「できるだけ進学させる」(42.3%)、「必ず進学させる」(33.0%)が牛島の回答であるが、郡平均と比べると、「必ず進学させる」と回答した割合が8.7%ポイントも上回っていて、牛島の住民の子女の教育に対する意識の高さがうかがえる。

将来の人口動向に関する展望は、郡平均は「多少増える」(41.7%)、「多少減る」(32.3%)、「変化しない」(22.9%)という回答になっているが、牛島は「多少減る」(66.0%)、「多少増える」(15.5%)、「変化しない」(12.4%)となっている。「とても減る」(6.2%)を含めると、将来の人口減少を予想している人は牛島では72.2%いるが、郡では33.5%にすぎない。将来、牛島、北濟州郡ともに人口減少が続くという予測結果を示した表2や表3と照らせ合わせると、牛島の住民の捉え方がより現実的であり、郡全体の捉え方は期待が込められた見通しであるように思われる。

人口減少の要因として指摘されているのは、牛島では「教育問題」(44.6%)、「生活面の不便さ」(32.4%)、「職場問題」(18.9%)であるが、郡平均では「教育問題」(41.0%)、「職場問題」(21.8%)、「生活面の不便さ」(21.6%)となっている。

牛島においては、職場問題、すなわち雇用の場の問題が指摘されているが、牛島の主要産業は「農業」(48.5%)、「漁業」(18.6%)、「サービス業」(19.6%)の3本柱である。

現在の自分の職業・産業と関連して最も難しいと感じる項目は、牛島の場合、「価格の不安定さ」(38.1%)、「生産費の増大」(29.8%)、「基盤施設の不足」(10.7%)、「流通システムの未整備」(10.7%)となっていて、主要産業が農漁業であることと島嶼地域であることに起因する項目が挙がっている。

個人的に願うことについてみると、郡平均が「生活レベルの向上」(24.9%)、「幸せな家庭」(22.6%)、「社会的成功」(18.4%)などが高い割合を示しているのに対し、牛島の場合は、「生活レベルの向上」(24.9%)、「生活環境の改善」(22.7%)、「楽な老後」(15.5%)などが上位にランクされている。

濟州道の将来の産業について訪ねた設問では、郡平均で「レジャー産業」(29.8%)と「海洋産業」(23.5%)を指摘する割合が高く、とりわけ牛島ではこの二つの割合がそれぞれ43.3%、38.1%と高くなっている。これは、経済発展に伴って人々が余暇時代を意識していることと、環海性の島嶼地域という立地条件が影響しているものと思われる。

5. 牛島の地域開発と方向性

(1) 住民意識にみる地域開発の課題

住民意識調査や現地での聞き取り調査等から、牛島の地域開発課題を抽出してみよう。民選自治以降、牛島はまあまあ発展したという肯定的な評価であるが、牛島の生活条件は満足なものではなく、濟州市等の島外へ引越したいと考えている住民が、他の邑・面よりも相対的に高い比率を示している。しかも、将来人口は減少傾向が見通されている。

地域課題の一つは、牛島と濟州島本島との地域格差を解消し、定住条件を整備することである。具体的には、上・下水道、海上交通・島内交通、港湾・道路、教育・文化施設について、牛島住民のニーズを踏まえた条件整備を行っていく必要がある。

二つ目の課題は、雇用開発を行うことである。主産業である農業と漁業の振興を図りつつ、新たな産業としてレジャー産業や海洋関連産業等を育成していく必要がある。雇用の開発は、定住条件の一つでもある。農漁業の振興のためには、価格の安定化対策や生産費の抑制と併せて、基盤施設の整備や農水産加工所の設置等を進める必要がある。

第三の課題は、環境と調和した持続的開発を進めるべきであろう。幸いに、環境保全に対する牛島の住民意識は郡内では最も高い。狭小なエコ・システムを壊すことなく、むしろ貴重な環境と地域特性を生かした癒し系の開発を進めていくことが望まれる。

第四の課題は、地域開発は牛島の住民が主体となって行うことである。牛島の将来に必要な計画を住民自身が策定し、実施にあたっては同郷会や行政と連携して行うことが大切である。この内発的な地域開発方式は、後でみるように、中山間地の納邑里において実践され、地域振興上の成果を得ている。

(2) 地域開発の具体的提案

以上の課題に即して、牛島の地域発展に結びつくような政策提案を行いたい。まず、牛島住民の最大のニーズである上・下水道の整備に関しては、濟州島からの海底送水管施設の整備を提案したい。現在、牛島の生活用水は海水淡水化によってまかなわれているが、淡水化事業の総事業費 28 億ウォンに加え、運転費用が年間約 3 億ウォンを越えている。普通水道の年間事業費が 4,000 万ウォンであるのに比べると、かなり高い。したがって、水道料金は割高となり、島民は節水意識が高く、天水の利用もなされている。海底送水による給水がコスト的には安上がりである。

ちなみに、沖縄県の島嶼地域の海底送水管施設整備事業を概観してみよう。現在、沖縄

県では、竹富町・鳩間島をはじめ 16 島が海底送水管による給水を受けている。給水総人口は 1 万 9,472 人、1 日の給水能力は 4,742m³、海底送水管総延長は 5 万 9,994m、総事業費は 45 億 7,671.4 万円である。

沖縄県のケースを牛島に当てはめてみよう。牛島の場合、対岸まで約 2.8km であるので、平良市・狩俣～池間島のケースを適用する。池間島の場合、事業主体は一部事業組合の宮古島上水道企業団である。送水管延長は 2,903m、総事業費は 1 億 884.2 万円、給水人口は 2,500 人である。1 日の最大給水量は 420m³ である。送水管延長がほぼ同じとみると、約 3 年分の海水淡水化事業の運転費用で総事業費がまかなえる計算になる。現在の淡水化装置は、海底送水の補完として活用すれば、運転費用の大幅な削減ができよう。

次に、観光と島嶼環境を両立させる方策を提案したい。まず、島民が環境と共生できる観光のあり方を検討することが大切である。その一つの方策として、「牛島環境創造基金」（仮称）の創設を提案したい。

①基金創設の趣旨

近年、韓国経済のめざましい発展に伴う国民の余暇選好の隆盛などもあって、濟州島観光とともに、牛島観光は今後ますます人気が高まるものと予想される。しかしながら、濟州市を発着点とする従来型の観光流動パターンが続くかぎり、牛島観光の費用・便益構造は是正されず、観光の地元への経済波及効果は小さいままの状態が続くであろう。牛島においては、現在がそうであるように、観光のもたらす便益・効果よりも費用・犠牲の方が上回り続けることが懸念される。

牛島のもつ自然景観や集落景観を活かしたエコツーリズムやグリーンツーリズム、ブルーツーリズムを通じた「癒し」（アイランド・セラピー）は、国民的な観点からみた牛島のもつ重要な役割である。このような国民的課題にこたえつつ、魅力ある島嶼地域として整備することは、そこに住む住民にとっても有益なことである。単なる観光地として整備するのではなく、島の住民が安心して豊かに暮らせる環境づくりをすることが、観光客にとってもまた魅力あるしまづくりとなる。

島嶼である牛島は、現在、島のもつ素材を生かしたかたちで観光が発展しつつある。隆盛しつつある観光を活用して、住民を主体とした環境と調和・共生したしまづくりをすすめる、かけがえのない牛島の自然環境の保全・涵養を通じた観光のさらなる発展を図るべき財源確保のため、「牛島環境創造基金」（仮称）を創設する。

牛島環境創造基金（仮称）の有効な活用を図ることによって、

〔しまづくり・環境共生型生活空間の創造→観光（エコツーリズム）の持続的発展
→関連産業の発展→島の可能性拡大と持続的発展〕

に貢献することが期待される。

②基金創設の目的

牛島環境創造基金(仮称)は、牛島観光の持続的発展に寄与する環境共生型生活空間の創造=しまづくりを効果的にすすめることを目的とする。本基金の透明性を確保し、有効活用を図るために、第三者からなる監査委員をおく。

③基金造成方法

濟州島から牛島へ船舶を使って渡るすべての旅客を対象とする。ただし、島民は対象外とする。運賃として通常運賃に α 円上乗せした料金を船舶会社が徴集し、 $\Sigma \alpha$ 円を牛島環境創造基金(仮称)の預貯金口座へ振り込む。牛島環境創造基金(仮称)の管理は、別途定める組織がこれを行う。

④基金運用方法

基金創設の目的に沿って、公平かつ効果的に運用することとする。運用は年次運用計画に基づいて行う。運用計画は、地元住民や観光客のニーズを十分に反映し、資金の裏付けのあるものでなければならない。この基金事業は公共事業と補完し整合的であるのが望ましい。当面は、ゴミ収集施設並びにゴミ処分施設及び休憩所(待合所)を整備する。案内板や標識等の設置も随時行う。

⑤基金構想の課題

北濟州郡の条例として「牛島環境創造基金条例」(仮称)を制定する必要がある。その中に、趣旨、目的、組織、基金造成方法、事業範囲、運用方法、その他必要事項を盛り込むようにする。また、それに先立って、牛島を馬羅島のように郡立公園に指定するよう議会に強く働けることが重要である。

最後に、以上の2点以外の条件整備について簡単に触れておこう。まず、島内の一周道路を拡幅・整備する必要がある。また、教育・文化施設や福祉施設の整備も急ぐ必要があろう。

聞き取り調査の中で、牛島の地域開発は、住民の意識が変わらなければダメであるという意見があった。島の住民は、確かに閉鎖的な部分もあるが、一方では極めて開放的であり、ボーダーレスである。牛島の住民の相互扶助と敬老の精神は、癒しの空間の構成要素の一つになろう。伝統を活かしながら、新しい変化をどう受け止め、どのように対応していくか、が牛島の未来発展にとって重要となろう。

6. 結びにかえて

以上において、北濟州郡牛島の住民意識と地域開発の関係についてまとめてきたが、前節で提起したように、地域開発は主人公である地域住民が主体となって進める内発的開発方式がベターである。地域開発はえてして外部の諸力に頼るところがあるが、安易に外発的な開発を進めれば、住民の意に反してさまざまなマイナス面やトラブルが生じることになりかねない。以下では結びにかえて、同じ郡内の涯月邑納邑里の内発的な地域振興の取り組みをまとめることにする。

(1) 納邑里の地理的条件

納邑里は、中山間地の村といわれている。2000年6月30日現在の人口は1,369人(男690人、女679人)であり、世帯数は462戸である。中山間地とは、一般的に、

- a) 概ね標高200～600mに立地していること、
- b) 海に隣接せず、畑作農業に依存していること、
- c) 交通の便が悪く陸の孤島の性格を有していること

の条件を満たす地域のことをいう。これに対し、中山間地といわれる納邑里は、

- A) 概ね標高55～100mに集落が立地している、
- B) 集落は、東方を174mの山、西方を155mの山に挟まれて立地している、
- C) 国道16号線が動脈となっていて、濟州市街地と1時間以内に接続できる

等の条件下にある。したがって、現在の納邑里は厳しい条件下の中山間地域とはいえ、むしろ豊かな中山間地域といえることができる。

(2) 学校救済運動

納邑初等小学校は、1946年9月1日に納邑国民学校としてサジャン畑を敷地として認可され開校した。開校1年3ヶ月後、4・3事件で後者が全焼し、その2ヶ月後の1949年2月28日から1950年5月31日まで閉校した。同年6月1日に1年3ヶ月ぶりに復旧・開校し、1954年4月15日に現在地(涯月邑納邑里1504-2)に移転した。

納邑初等学校の教育の基本方針は、「子供たちの夢が実る開かれた学校」であり、教育の基本目標は「温かい心と健康な体で21世紀の主役になる創意的な子供を育てる」ことである。学校経営の目標は、以下の3点に集約されている。

- ① 自治活動中心の人間性教育を定着させる、
- ② 自己主導的な学習を通じ創意性を育てる、
- ③ 私たちの地方を育む環境・観光教育を忠実に実行する。

同校は、2000年3月1日より2002年2月28日までの間、「自治活動の統合的運営を通じた民主市民意識育成」をテーマとした実験学校として、濟州道教育庁の指定を受けている。

納邑初等学校の現状は、6学級で104人の在籍者を数える（2000年11月1日現在）。男子48人、女子56人である。2000年2月15日に第50回目の卒業式を迎え、卒業生総数も1,884人（男子1,055人、女子829人）に達した。

しかし、現在104人に達した生徒数も1966年には61人まで減少し、分校化の危機に直面していた。児童数が60人を切ると、分校（分教場）となるおそれがあったのである。

そのような状況の中、里民を挙げての学校救済運動が展開された。里が主体となって募金活動を行い、アパート1棟（3階建て15世帯）を建設し、学齢期の児童をもつ家族を呼び寄せるのに成功した。資金は、里共有地の売却代金、同郷会の募金、郡政府の補助金等でまかなった。なお、学校救済運動は同校特有の活動ではなく、1997年以降、他に5例がある。

(3) 孝道示範集落

納邑里は古くから儒教とが苦悶を重視してきた集落である。納邑里は、書堂を建設し、そこを中心に素晴らしい人材を養成してきた伝統的な儒林村であり、ソンビ（学者）の輩出の地として、あるいは年上を公敬して親をよく敬う美風良俗が息づく孝の地として広く知られている。地域の人々はそのことに誇りを持っている。

今日でも孝文化を継承・存続させようという住民の意志は強く、これを積極的に実践することで、他の集落の模範になっており、後代に敬老孝親思想を継承させることに里の住民の高い意識が示されている。

新千年紀を迎えた2000年10月26日に、北濟州郡の孝道示範集落に選定され、地域住民のアイデンティティの確立のシンボリック的存在となっている。

(4) 青年會活動

約100名のメンバーからなる納邑里の青年會は、文字通り里の中心的存在である。全里民のまとめ役であるのをはじめ、婦人會活動との有機的連携や児童生徒の課外活動の指南役として重要な活動を展開し、有益な効果を生みだしてきた。

2000年について主要事業を拾ってみると、サッカー、バレーボール、相撲、綱引き、なわとび等のスポーツ競技大会、植樹（つつじ）、蓮池や養殖場等周辺環境の整備、英語ビデオ上映や綴り方教室等の児童生徒対象の課外授業、登山道の整備やゴミ拾い等の自然

保護キャンペーンの展開等々、多彩な事業を展開している。ほぼ毎月行われている。

参考文献

北濟州郡『21世紀 北濟州郡 邑・面發展戰略』1999年9月。

北濟州郡「住民基礎需要調査」1999年9月。

北濟州郡『第39回統計年鑑1999』1999年12月。

濟州道『1999年度 住民登録人口統計報告書』1999年12月。

木浦大学臨海地域開發研究所『韓國島嶼白書』参益印刷社、1996年6月。

沖繩県福祉保健部薬務衛生課『沖繩県の水道概要平成9年度版』1999年11月。

大城 肇「濟州道の人口動態と人口予測」『琉大アジア研究』第2号、1998年12月。

【補論】濟州道の人口動態と人口予測

韓国濟州道の経済社会分析を行うにあたって、その総合的指標である人口の動態分析と予測推計を行うことは、必要不可欠な作業である。以下では、大城 肇(1998)の内容を再掲する。ただし、表は割愛するので、文中の表番号については大城 肇(1998)を参照されたい。

1. はじめに

濟州道(島)の社会経済分析を行うに当たって、その基礎となる人口動態を分析する。濟州道の人口は、50万人台で定常状態になりつつあるが、今後、人口規模や年齢構造がどのように推移するかについて、2010年までの将来人口の推計を併せて行う。

一連の人口動態・予測分析を通して、濟州道(島)の人口特性に現れた社会経済のマクロ的側面の〔過去－現在－未来〕について概観する。

この研究では、この後、濟州道の産業構造や対外収支、財政構造等を沖縄県との比較で分析する予定である。

2. 濟州道の人口動態

(1) 総人口の推移

1996年の濟州道の総人口は、52万3,736人であり、韓国の人口4,554.5万人の1.15%を占めるにすぎない、1%の社会経済規模である。96年の人口は、57年の25万8,961人に比べ、26万4,778人が増加した。約40年間で濟州道の人口は倍増した(2.02倍)ことになる。しかし、その間の韓国の人口は2.13倍になっているから、全国との比較では、ゆるやかな増加テンポであった。(表1)

20万人台で推移していた濟州道の人口は、1963年に30万人台に乗り、11年後の74年に40万人台に達した。その後、やや増加テンポが緩やかになり、13年後の87年に50万台に乗った。90年～91年に人口減がみられたが、トレンドとしては微増が続いている。

沖縄県の1996年の総人口は128万1,766人であったから、濟州道の人口は沖縄県の約4割水準(40.9%)であり、沖縄県中部圏域(53万3,837人)より1万人ほど少ない地域である。

(2) 性別動向

濟州道人口の男女比をみると、1957年～96年は一貫して女性人口が男性人口を上まわっている。57年に男性44.9%、女性55.1%であった性比が、96年の男性49.4%、女性50.6%まで平衡化されてきている。(表1)

57年～96年の平均では、男性48.3%であるのに対し、女性51.7%である。このような濟州道の性比は、韓国全国のそれとは対照的である。韓国は、60年以降、一貫して男性人口が女性人口を上回り、96年は男性50.4%、女性49.6%であった。57年～96年の平均では、男性50.3%、女性49.7%であり、女性社会とでもいいうる濟州道とは好対照を示している。

(3) 年齢別動向

国勢調査人口について5歳階層別にみると、1985年は10～14歳層が12.5%を占めて最も高く、次いで15～19歳の12.3%、20～24歳の10.7%、5～9歳の10.0%と続く。この構造は、以後の年齢構成の特長をなしている。5年後の90年には15～19歳が11.6%と最も高く、20～24歳の11.4%、25～29歳と10～14歳がともに9.7%と続く。さら

に5年後の95年には、20～24歳が10.4%、25～29歳が9.4%となっている。(表2)

次に、年少人口(0～14歳)、生産年齢人口(15～64歳)、老年人口(65歳以上)についてみてみよう。濟州道の1985年の総人口に占める年少人口の比率は31.6%であったが、90年には25.6%、95年には23.1%とその比率は低落傾向にある。10年間で8.5ポイント低下した。これに対し、生産年齢人口と老年人口の比率は上昇傾向にある。生産年齢人口比率は、85年の63.2%から90年68.6%、95年70.3%と10年間で7.1ポイント高まっている。老年人口比率は、85年5.2%、90年5.8%、95年6.6%と10年間で1.4ポイントの上昇を示した。

次に、年少人口指数(=年少人口÷生産年齢人口)を沖縄県と比較してみると(括弧内の数値は沖縄県)、85年49.9(42.8)→90年37.3(37.8)→95年32.8(28.4)と17.1(14.4)ポイントの低下である。大幅な年少人口指数の低下がみられるが、沖縄県と比べると、相対的に若い人々の多い年少者地域であるといえる。老年人口指数(=老年人口÷生産年齢人口)は、85年8.2(13.5)→90年8.4(15.3)→94(13.2)と10年間で1.2ポイント増(沖縄県は0.3ポイント減)を示しているが、沖縄県より低い値である。従属人口指数(=(年少人口+老年人口)÷生産年齢人口)は、85年58.2(56.3)→90年45.7(53.1)→95年42.2(51.0)となって、沖縄県より低い傾向にある。老齢化指数(=老年人口÷年少人口)は、85年16.5(31.6)→90年22.7(40.3)→95年28.7(52.8)となって、10年間で12.2(沖縄県は21.2)ポイント上昇している。以上のことから、濟州道の人口構造は、沖縄県に比べると若い、着実に高齢化が進展しつつあることがわかる。

(4)人口移動動態

1996年の濟州道の人口移動状況をみると、流入人口は7万8,175人、流出人口は7万9,268人であり、1,093人の流出超過となっている。すなわち、96年は1,093人の社会減であったことがわかる。(表3)

流入人口の内訳をみると、道外からは24.6%に相当する1万9,256人が流入し、移動率は3.7%であった。流入人口の75.4%(5万8,919人)は道内からの移動であり、移動率は11.3%であった。他方、流出人口のうち25.7%(2万349人)は道外への流出人口であり、残りの74.3%(5万8,919人)が道内への移動であった。なお、道内の移動率は、91年以降、10%台で推移している。

95年から96年にかけて、総人口は4,342人増加しているから、1,093人の社会減を考慮すると、5,435人の自然増があったことになる。93年以降、濟州道の総人口は増加傾向にあるが、それは社会減を上回る自然増によってもたらされていることがわかる。

(5) 世帯数の動向

濟州道の1996年の世帯数は、16万1,211世帯であり、57年の5万5,149世帯に比べ2.92倍の増加を示している。その間の人口増加のテンポに比べ、世帯数のそれが急速であることから、1世帯あたりの人員は、57年の4.7人から90年の3.9人、96年の3.2人と核家族化が進んでいる。とりわけ、90年代以降、小家族化のテンポは速い。なお、沖縄県の1世帯あたり人員は、90年3.3人、96年3.1人であった。(表1)

3. 市・郡別人口動態

濟州道の1996年の総人口52万3,736人の約半数(49.9%)は、道庁所在地・済州市に住んでいる。済州市の人口は、1961年の6万8,423人(道内の24.3%)から堅調な増加を続け、70年に10万人台、85年に20万人台に達し、96年は前年比で2.4%増の26万1,100人(道内の49.9%)であった。済州市では、61年から35年間で3.8倍の人口増加がみられた。(表1)

ところで、1961年時点では、南濟州郡の人口(10万9,306人)が道内で最も多く、38.8%を占めていた。次いで、北濟州郡の10万3,789人(構成比36.9%)が多く、済州市は道内で最も人口規模の小さい地域であった。しかし、20年後の81年に西歸浦市が誕生することによって、南濟州郡の人口は半減した。81年以降、濟州道の人口規模は、済州市>北濟州郡>西歸浦市>南濟州郡の順になっている。

81年以降、南濟州郡と北濟州郡では、一貫して人口減少が続いている。西歸浦市も90年の8万8,292人をピークにして減少しつつある。81年から96年までの道内の人口構成比をみると、済州市(37.4%→49.9%)、北濟州郡(25.7%→18.8%)、西歸浦市(16.7%→16.2%)、南濟州郡(20.3%→15.1%)となっている。この十数年間、道内では済州市への人口集中化が進んだことになる。

2市2郡の1995年から96年にかけての人口移動動態をみてみよう。まず、95年から96年にかけて、人口増加がみられた地域は、済州市(6,038人増)と北濟州郡(84人増)である。西歸浦市(386人減)と南濟州郡(686人減)は、人口減少地域である。(表4)

次に、道内の2市2郡とも人口流出が人口流入を上回る社会減を示している。最も社会減が大きいのは西歸浦市(453人減)であり、済州市(402人減)、南濟州郡(191人減)、北濟州郡(47人減)と続く。

その結果、人口の自然動態(=出生数-死亡数)は済州市の6,440人増が最も多く、北

濟州郡(131人増)、西歸浦市(67人増)が自然増加を示している。南濟州郡は、191人の自然減少となっていて、社会減かつ自然減を示している。

人口減が続く南濟州郡の中で、安徳面の人口は、88年の1万1,460人から96年の1万864人へ5.2%(596人)も減少した。郡内では13.7%(96年)の人口構成比であるが、道内では2.1%(96年)を占めるにすぎない。性比は、男性<女性であり、女性の割合は88年の51.6%から96年には50.6%に低下している。96年の1世帯当たり人員は3.3名である。

徳修里の1995年の人口は1,028人であり、男性524人(51.0%)、女性504人(49.0%)であり、男性の割合が高い。88年の1,130人から92年の1,138人へ増加した後、減少傾向が続いている。88年から95年にかけて102人(9.0%)が減少した。徳修里の世帯数は、93年の300世帯をピークにやや減少しているが、88年(282世帯)に比べ95年(298世帯)は16世帯(5.7%)増加している。1世帯当たり人口は、88年の4.0人から95年の3.4人へ減少しているが、道平均(3.2人)よりやや多い。(表1)

南濟州郡の年齢別人口構造をみてみよう。まず、5歳階層別では1990年は20～24歳層が12.7%と最も多く、次いで15～19歳層が12.0%、10～14歳層が9.6%と高くなっている。これら10～24歳層の人口が全体の三分の一以上(34.3%)を占めている。5年後の95年には20～24歳層が11.6%と高く、25～29歳層9.8%、15～19歳層9.3%と続く。15～29歳層で全体の30.7%を占めている。(表5)

南濟州郡の年少人口(0～14歳)の割合は、1990年の23.6%(道平均は25.6%)から95年の20.1%(同23.1%)へ3.5(同2.5)ポイント低下した。道平均に比べ年少人口の割合は小さい。同じく生産年齢人口(15～64歳)の割合は、90年の69.2%(道平均は68.6%)から95年の71.3%(同70.3%)へ2.1(同1.7)ポイント上昇した。道平均に比べ生産年齢人口の割合は大きい。老年人口(65歳以上)の割合は、90年の7.2%(道平均は5.8%)から95年の8.5%(同6.6%)へ1.3(同0.8)ポイント上昇した。道平均に比べ老年人口の割合は大きい。

その結果、90年から95年にかけて南濟州郡の年少人口指数(=年少人口÷生産年齢人口)は34.0から28.1へ、従属人口指数(=(年少人口+老年人口)÷生産年齢人口)は44.5から40.0へ低下し、他方、老年人口指数(=老年人口÷生産年齢人口)と老齡化指数(=老年人口÷年少人口)はそれぞれ10.4→11.9、30.6→42.4へ上昇している。道平均と比べると、南濟州郡の人口構造の特長として、①年少人口指数と従属人口指数は低く、②老年人口指数と老齡化指数が高く、高齡化が進展している、ことを挙げることができる。

4. 濟州道の将来人口推計

将来人口推計は、高齢化水準や財政需要、市場需要等、将来の産業活動や行財政運営にとっての基礎的なデータである。濟州道の将来人口を推計するに当たって、統計資料の制約があるため、ここでは「コーホート変化率法」を用いて推計した。

まず、1985年－1990年－1995年の国調の5歳階層別・男女別人口をベースに「婦人子供比」を用いる方法で2000年と2005年と2010年を推計した。

推計結果によると、2000年の濟州道の総人口は52万6,248人であり、1995年に比べ2.8%(1万4,157人)の増加になる。2005年の総人口は2000年に比べ2.5%増の53万9,371人となり、2010年の総人口は2005年に比べ1.9%増の54万9,782人となることが予測される。(表6)

男女性は、女性の割合が2000年51.6%→2005年51.8%→2010年52.3%と一貫して高くなるが見込まれる。2000年には男性人口25万4,818人に対し女性人口は27万1,430人、2005年には男性25万9,640人に対し女性27万9,731人、2010年には男性26万2,351人に対し女性28万7,431人となることが予測される。

年齢別にみると、2010年には年少人口比率が21.9%へ低下し、老年人口比率が10.5%まで高まる。しかし、年少人口指数は1995年の32.8から2010年の32.4までほぼ横這いである。これに対し、老年人口指数は1995年の9.4から2010年の15.5へ、老齡化指数は同じく28.7から48.0へそれぞれ高まる。21世紀に入って、濟州道の高齡化は進む。ただし、1995年の日本や沖繩の水準に比べると、まだまだ低い数値である。

なお、濟州道の5歳階層別の年齢構成をみると、1985年の5～24歳層が全人口の45.5%を占めて、コーホートの的にはこれらの階層が団塊をなしている。25年後の2010年にはこれらの階層は30～49歳層になり、全人口の31.3%まで比重は落ちるが、やはり全体的には高い割合を占めることが予測される。

ちなみに、「韓国統計年報」(1997年)によると、韓国の将来推計人口は、2000年4,727.5万人、2005年4,912.3万人、2010年5,061.8万人と予測されている。

食器を通して見た濟州道

池田 榮史

1. はじめに

世界中のどんな人間であれ、食物を摂取しなければ生きていけない。言い換えれば、人類の歴史はどのようにして食料を獲得するか、が最大の要因となって営まれてきた。食料の獲得は地質・気候や動植物相など、自然環境に大きく左右される。多様な民族や文化は、これが基となって形成されたとも言える。したがって、人類の歩みを振り返る時、世界各地の食文化について関心を払うことは、決して無駄なことではないと考える。

このような視点に立ち、筆者は常々、自らと異なる他文化をもつ人々の食文化について関心を抱いてきた。中でも、食料素材を調理し、盛り付け、食するための道具、すなわち食器にはとりわけ強い関心を抱いている。何故ならば、食料そのものは消化され、形を止めないのに対して、食器は世界各地の遺跡出土遺物をはじめとして、いろいろな形で現在の我々の眼前に存在するからである。まさに、食器は民族や文化、あるいはその地域性を表わす最良の資料なのである。

本研究においては、韓国濟州島を調査地として選び、3年間にわたって、各地での調査を行った。本稿ではこの中の北濟州郡牛島と涯月邑納邑里での調査を中心に報告し、その内容について検討することとする。

2. 牛島における調査

a. 牛島の概要

濟州道北濟州郡牛島は濟州島の東海岸から約4kmの沖合にある島である。座った牛の姿に似ていることから牛島と名付けられた島で、東西2.5km、南北3.5km、面積6.012km²を計る。島の南端に標高132mの山があり、北部に向かって、なだらかな平坦地が続く。1999年段階の人口は約2,000人ほどで、海女漁を中心とした漁業と農業が基幹産業である。島

の開発は朝鮮王朝代の1842年に本格的移住が行われた以降に進められており、それ以前は17世紀末ころから朝鮮王朝の牧(馬の放牧場)として利用されていたことが知られている。島の遺跡などについての詳細な調査は未だ行われていないため、17世紀以前の歴史については、良く判っていない。しかし、島内を散策すれば、土器や貝殻などが散布する地点もあり、今後の考古学的な調査が望まれるところである。

b. 調査の方法と内容

調査は牛島の一般家庭を訪問し、各家庭で保有するすべての食器・調理具の種類とその数量を確認させていただくことからはじめた。その上で、これらの中で日常的に使用する食器・調理具の種類と数量を教えていただくこととした。また、牛島において、食器や調理具を販売している商店の品揃えの状況を調査するとともに、牛島との比較のため、今回の調査の通訳を勤めてくれた李炳枝さんの済州市内の実家も調査させていただいた。調査に協力していただいた牛島の家庭はすべて女性が海女をしておられる家庭であった。各家庭に保有される調理具や食器には、大まかに次のようなものがある。

[調理具]

鍋(浅鍋)	径30~40cm 深さ15cmほど	3~5個
(平鍋)	径50cm 深さ10cmほど	1~2個
(深鍋)	径50cm 深さ50cmほど	1~2個
(圧力鍋)	径30cm 深さ15cmほど	1個
フライパン	径20~25cmほど	2~3個
ヤカン	内容量(2~4L)	1~2個
万能包丁	刃渡り20~30cm	2~3本
果物ナイフ		1~2本
肉切り用ハサミ		2~3丁
電気炊飯器		
保温用ジャー		

[食器]

碗(飯碗)	径12~16cmほど	5~20枚
(汁碗)	径15~20cmほど	5~20枚
(麺丼)	径25cmほど	5個程度
平皿(小)	径8~10cmほど	10枚前後

(中)	径 12~15cm ほど	10~20 枚
(大)	径 20~25cm ほど	20~40 枚
大皿	径 30~50cm ほど	1~3 枚
硝子コップ		5~10 個
湯呑み茶碗		5~10 個
箸 (ステンレス製)		10~30 膳
スプーン (ステンレス製)		10~30 本

なお、この他に祖先祭のための食器 (祭具) がほとんどの家庭で保管されている。

c. 調理具・食器の用途と組み合わせ

牛島の各家庭で保有される調理具や食器の組み合わせはほぼ似通っており、これは比較のためにお訪ねした済州市内の李家でもほぼ同様であった。また、これらの調理具や食器を取り扱う商店については、牛島内の金物商だけでなく、済州市内の市場やソウル南大門市場でも確認したが、取り扱う商品やその品揃えにほとんど変化がみられない。これらのことからすれば、牛島の各家庭における調理具・食器の組み合わせは、韓国内での一般的な家庭での在り方とそれほど違いはないものと考えられる。

そこでこれらの調理具や食器について、その用途・機能を前提として、料理との関係を見ると、まず調理具の浅鍋と深鍋は基本的に汁物を作るためのものである。いわゆるチゲ類や味噌汁などを作り、チゲ類の場合は食事の際にそのまま食卓へ運ばれることが多いようである。平鍋はチヂミ (平焼き) を作るためのものであり、深鍋は祖先祭など、大量に料理を作るためのものである。圧力鍋はどの家庭にも見られたが、ほとんど使っていない場合が多かった。フライパンは主に魚を焼くのに用いられることが多く、時折揚げ物的な料理にも用いられるようである。ヤカンと言うまでもなく、お湯やお茶を沸かすために使われる。包丁は基本的に万能包丁が用いられており、日本のように魚を捌く出刃包丁や刺身包丁、野菜用の菜切り包丁などのような器種分化がほとんどない。特に牛島の場合は食材として魚介類が多いことや、お訪ねした各家庭とも海女であり、言わば海に関する専門家庭であることからすれば、魚介類のための専用包丁がないことは興味深い。肉切り用ハサミは韓国の家庭にはどこにも見られる。ご飯については電気炊飯器と保温ジャーがどの家庭にもあり、家事を担当する主婦が海女という職業柄、炊飯の回数をなるべく少なくする努力の現れと考えられる。

食器については、碗・皿とも基本的に5~10個単位で同じものを揃えてあり、個人用の銘々器はほとんど認められない。また、碗・皿ともに大きさによって、その用途がほぼ決

まっている。碗については、小さいものから飯碗・汁碗・麵丼があり、平皿の小は醤油やコチジャンなどの調味料、中はキムチ類、大は祖先祭の際に個人向けに料理を盛るのに用いられる。大皿は魚やまとめてつくった料理を盛るためのものであるが、それほど使うことはないようである。硝子コップや湯呑み茶碗はいうまでもなく、飲み物のために用いる。箸やスプーンは韓国の食事には必ずセットとして用いられる。

d. 牛島における調理具・食器の特徴

極めて限られた調査の中で見聞きしたことを基にはあるが、牛島あるいはこれを通して見える韓国の食文化についての私見をまとめておきたい。

まず、調理具については、日常的に用いる煮炊き用調理具の器種分化が少ない。食材との関係もあろうが、長く煮込む料理に適する深鍋や食材の下こしらえに用いられることの多い片手鍋などは、ほとんど見られなかった。これらを扱う商店での聞き取りによれば、韓国では深鍋はほとんどなく、片手鍋はやや高級品の印象があるとのことであった。また、素材の価格からすれば、アルミ製が一番廉価で、ホーロー挽き製、ステンレス製の順に高価となるとのことで、牛島の各家庭ではおもにホーロー挽き製とアルミ製が用いられ、ステンレス製は少なかった。また、日本の家庭では揚げ物用の天ぷら鍋や中華鍋が見られるが、韓国ではほとんど普及していないようである。

食器では、韓国的一般家庭において、個人用として配膳されるのは飯碗・汁碗・箸・スプーンで、調味料やキムチなどは家族の人数にあわせて適当に配され、簡単な食事の場合はほぼこれで事足りるようである。この場合、汁碗には味噌汁が注がれるが、チゲ類が作られると、これを汁碗に盛る。日本の食卓で見られる取り皿の役割を果たすものは基本的にないようである。また、牛島でお訪ねした家庭は比較的高齢で、海女を職業とされることが多かったこともあるが、韓式料理用以外の食材や調味料はほとんど見られなかった。食器を素材の点からみれば、陶器とプラスチックやメラミン樹脂、ステンレスがあり、一般的にはプラスチックやメラミン樹脂製のものが多く使われている。これは価格的に安いことと耐久性が強いことなどの理由による。これらの食器はほとんど装飾性がなく、無地のものが多いことも特徴的である。なお、陶器は来客時に使用することが多く、ステンレス製食器は祖先祭の道具のほとんどがそうである。箸やスプーンをステンレス製にすることについては、塗り箸に対する衛生面での不安や耐久性などが原因のようである。

これらの調理具や食器はかつては牛島内の商店、もしくは対岸の済州島城山浦あたりで調達されていたが、交通機関が発達した今日では済州市内の市場で購入したり、韓半島本土の都市で調達することが増えている。また、調理具や食器を含む済州島におけるいろい

ろな物品の流通は基本的に釜山の商業圏に属しており、一部全羅道からの商品が入っているとのことである。

3. 納邑里における調査

a. 納邑里の概要

北済州郡涯月邑納邑里は済州島の北西部に位置する中山間村落である。済州島の北海岸から約2.5kmほど内陸部へ入った、標高80~60m前後の微高地に立地する。高麗時代頃から開かれたと伝えられ、現在約460世帯ほどからなる。みかん栽培をはじめとする農業が主産業であるが、若年層の農業離れが進み、過疎化の傾向にあることは否めない。村落内のいくつかの世帯を訪ねさせていただいたが、多くは高齢者のみの家族構成であり、若年層は済州市内をはじめとした都市部での仕事に従事しているようである。

現在、済州市内から納邑里までは車で30分ほどの距離であるが、これは近年になって進められた道路整備の賜物であり、かつては海岸部の郭支里集落を経て、各地と往来したらしい。また、4・3事件に際しては、疎開命令の対象となり、村落全体が焼き払われている。したがって、現在の集落は4・3事件後、復興したものである。

b. 甕器（オンギ）について

甕器（オンギ）とは、韓国に広く分布する陶器である。韓国の陶磁器といえば、高麗青磁や朝鮮時代の白磁などが広く知られている。しかし、これらは基本的に高級品であり、日常的には多くの雑器が用いられていた。これらの雑器は生地土を成形した後、器表面に土灰釉や鉄釉などの簡単な釉薬を掛け、焼成したものである。韓国の家庭によく見かけるキムチ甕はその代表ともいべきものであり、甕のほかに壺や鉢、徳利、碗など、多くの製品が存在する。近年ではプラスチックやアルミニウムなど、廉価で割れにくい素材で作られた各種の容器が普及したため、キムチ甕を除いて、一般の家庭ではほとんど用いられなくなっている。

さて、これらの甕器については、先学によるいくつかの研究がある。中でも、伊藤重人氏は韓国珍島の農村で用いられていた甕器について、人類学的な視点から詳細な検討を加えられている。伊藤氏によれば、1992年段階の珍島では、次の10種の甕器があったという。

名称	日本的器種分類	主な用途
・チサン	(大型半胴甕)	穀物貯蔵
・ハガリ	(大型広口壺)	穀物貯蔵、醬類醸造
・コネギ	(広口壺)	穀物貯蔵、醬類醸造
・トングー	(把手付半胴甕)	穀物貯蔵、液体頭上運搬
・パンデング	(鉢)	調理、食料貯蔵
・チョバクチ	(把手付土鍋)	調理
・オガリ	(壺)	穀物貯蔵、調理
・タンジ	(小型壺)	液体貯蔵
・エンベンギ	(細頸壺・徳利)	種保存・液体貯蔵
・シル	(甑)	調理・祭祀

*伊藤重人「韓国農村における土器の使用」『生活技術の人類学』1995年より引用作成

*日本的器種分類名称については、筆者の判断による

これら10種の甕器の主な用途についてはいくつかの類型化され、また各家庭における保管場所もほぼ同じであったという。このことは甕器が珍島農村生活の中で、一定の役割を果たしていたことを示すものである。また、これらの甕器は珍島内で生産されたものもあるが、島内の窯が1960年代には廃絶したため、以後は全羅南道康津郡大口面一帯に分布した甕器窯の製品が広く流通したとのことである。

いずれにせよ、珍島での類例に限ったことではなく、かつて甕器は韓国いたるところの村落で、穀物や飲料水・酒などの貯蔵や運搬、醬類の醸造と貯蔵、家庭での調理など、いろいろな場で用いられてきたことが知られ、物質文化研究の上で極めて重要な存在であると言える。

c. 納邑里における甕器（オンギ）

先述したように、納邑里は済州島西北部の中山間集落である。また、ごく近年まで大きな開発が入ることもなく、過ぎてきた村である。電気や上水道の整備が1960年代に進められたものの、以後、今日まで高齢者世帯が多いこともあり、かつての農村生活文化が比較的良好に残されている。そこで、集落内の世帯10数軒を無作為に選んで訪問し、各世帯における甕器の所有と使用状況について、聞き取り調査を行った。ここでは、その中の2軒について、紹介する。なお、器種名称については、筆者の判断名を附した。

・ユ テビョン氏 (75 才) 宅 奥さんとお母さん (100 才) の 3 人暮らし

屋敷内の畑の隅に器高 70cm ほどの大型半胴甕および大型広口壺が 3 個ほど伏せ置かれた他、井戸の側に使用中のもの 2 個を含む器高 50cm ほどの中型広口壺と鉢 5～6 個があった。使用中の 2 個には塩と味噌が入れられ、蓋形鉢が被せられていた。塩は買った塩を入れて保存し、味噌は毎年旧暦 1 月に作るとのことである。

畑中にあった大型半胴甕および大型広口壺は、かつて穀物を入れて保存していたものと水甕で、井戸の側にあった中型広口壺や鉢は、主に塩辛や漬物を作るのに使ったという。水甕は水道が完備されるまで、家の軒下に置いてあり、女性が村の溜め池から水汲み用の壺で水を運び、移し替えて溜め置いた。また、塩辛はスズメダイやイワシを原料とし、漬物はニンニクや大根の醤油漬けを作ったという。スズメダイやイワシの塩辛は初夏の頃 (5 月頃)、海岸部の郭支里まで行き、米と交換で魚を手に入れて作り、秋から冬にかけて食べた。ニンニクや大根の醤油漬けは春につくり、夏に食べた。

これらの甕器類は 20 年ほど前まで常用していたが、冷蔵庫の普及とともに次第に使わなくなった。現在でも塩辛や漬物は作っているが、家族が食べる 10～15 日分程度を作り、プラスチックなどの容器で冷蔵庫に保存することが多いとのことである。この他に、徳利や鉢など、かつてはいろいろな甕器があったが、次第に使わなくなって散逸した。これらの甕器の大半は済州産であり、畑中の大型半胴甕 1 個のみが陸地産であった。

・金 仁昌氏 (70 才) 宅 奥さんと 2 人暮らし

屋敷内の畑に器高 70cm ほどの大型半胴甕 3 個、大型広口壺 15 個、器高 60cm ほどの酒壺 1 個、器高 30cm ほどの水汲み用壺 1 個、口径 50cm ほどの甑 1 個が無造作に置かれていた他、器高 50cm ほどの中型広口壺 2 個が使用中の状態、庭に据えられていた。大型半胴甕や広口壺の多くはかつて穀物を貯蔵しておいたもので、一部は水甕として用いられた。酒壺は 1900 年代前半に焼酎が入っていたのを買ったもので、牛 1 頭が 8 円の頃、この酒壺に入った焼酎の値段が 20 円であった。酒壺の形は日本の酒壺の写しであり、生産地は済州ではなく、陸地であると考えられる。水汲み用壺は子供用のもので、甑はまつり事の際に、大量の料理を作るのに用いた。中型壺の中には塩と味噌が保存してあり、このようにして保存すると、味が悪くならないとのことである。

穀物保存用の大型半胴甕や大型広口壺の個数は、各家庭の財力を示す象徴であることを伊藤氏が指摘されているが、金氏の話の何う限り、納邑里の場合も同様である。また、かつてはこの他にも壺や鉢などの甕器があったが、日常的に用いなくなるにしたがって、散

逸したとのことである。

この他、数軒を訪ねたが、甕器の所有や使用の状況は、これら2軒とほぼ同様であった。若年世代が集落を離れ、高齢者のみによる少数家族化の進行とともに、冷蔵庫の普及による保存食料の製作システムと保存方法の変化が起こり、さらには経済環境の変化による食料購入の増加などが加わって、各家庭における甕器の役割が失われている。わずかに残った塩や味噌の保存容器として利用されていることさえ、今では珍しくなりつつある。多くの甕器は各家庭の庭先に伏せ置かれて、次第に実用品としての役割を終えようとしているのである。

d. 濟州島の甕器（オング）

聞き取り調査によって、納邑里の甕器には大型半胴甕や大型広口壺、中型半胴甕、中型広口壺、鉢、水汲み用壺、甌、焼酎容器などの器種が見られることが知れた。しかし、納邑里での聞き取りでは、かつてはもっと多くの器種があったとのことであり、これらの中には伊藤氏が珍島で確認された器種と異なるものが含まれている可能性があった。

また、聞き取り調査の過程で、納邑里の甕器は濟州産だけではなく、陸地産のものも散見され、両者は焼き上がりの状況や土質などの違いから明確に区別できることが確認された。このため、濟州産の甕器については、いずれかの集中的なコレクションを当たれば、その器種や器形の変化を把握することが出来る見通しが得られた。そこで、幾人かの収集家をお願いして、それぞれが所有する濟州産の甕器を観察させてもらうこととした。その結果、濟州産の甕器には納邑里で確認された器種だけに止まらず、さらに多くの器種が存在することが知れた。

これら収集家による濟州島の甕器を器種によって分類すると、大きく壺・甕・鉢・瓶・碗・甌・特殊容器に分けられる。各器種の中には器形や法量の違いによって、さらにいくつかに分けることが可能であり、また、これらの名称についてもいくつかの変化が認められる。例えば、壺についてみれば、胴が膨らむ球形の広口壺は名称の上ではハガリという名で統一されるが、法量的には大・中・小の違いがあり、同様に広口ながらやや細めの壺はコグマハガリの名で呼ばれている。水汲み用壺は大きめの大人用をスルホボック、小さめの子供用をスルテハジと呼ぶ。甕はいわゆる広口半胴甕であり、やはり法量的に大・中・小がある。鉢は代表的な広口のものが基本的にチャンテと呼ばれ、これも法量によって大・中・小に分けられる。また、これに耳状の把手が付いたものはギィチャンテと呼ばれる。丸い胴部をもつ壺の上半部を切り落としたような内湾口縁をもつ鉢はタンジと呼ばれ、これに舌状の把手2個を付けたものはチョンジュタンジと呼ばれている。瓶は細頸の

瓶形を基本とし、一般的にスルビヨンと呼ばれる。やはり法量によって、大・中・小の違いがある。この法量の違いを内容量の多寡によって呼び分ける場合には、ハンビヨン（1瓶）・ツウルビヨン（2瓶）とも呼ぶ。また、瓶でも低平な胴部の肩口に注ぎ口を作り付けたものは、チャラビヨン（亀瓶）と呼ばれている。碗の形はサハリ、あるいはクルと呼ばれ、サハリの中で片口を持つものはコサハリとし、クルは食器として用いられる際に入れる食料の違いによって、パックル（飯碗）・クックル（汁碗）などと使い分けられる。甌は珍島と同じくシルである。特殊容器には液体を汲み分ける際に用いる漏斗形のものをパラック、焼酎の蒸留器であるコソリなどがある。これらをまとめると、下記のとおりである。

器種	器形	名称	法量（器高）	個別名称
壺	広口球形壺	ハガリ	大（70cm 前後）	
			中（50cm 前後）	
			小（30cm 前後）	
	広口壺	コグマハガリ	大（70cm 前後）	
			中（50cm 前後）	
			小（30cm 前後）	
水汲み壺		大人用（40cm 前後）	スルホボック	
		子供用（30cm 前後）	スルテハジ	
甕	広口半胴甕		大（70cm 前後）	
			中（55cm 前後）	
			小（40cm 前後）	
鉢	広口鉢	チャンテ	大（口径 55cm 前後）	
			中（口径 40cm 前後）	
			小（口径 30cm 前後）	
	球形内湾鉢	タンジ	（25cm 前後）	
			把手付球形内湾鉢	チョンジュタンジ
瓶	細頸瓶	スルビヨン	大（35cm 前後）	ツウルビヨン
			中（25cm 前後）	チュンビヨン・ハンビヨン
			小（15cm 前後）	チャグンビヨン・ソビヨン
	平瓶	チャラビヨン	（胴径 20cm 前後）	
			サハリ・クル	パックル・クックル
			（口径 20cm 前後）	
碗				

		片口碗	コサハリ
甌	シル	(口径 40cm 前後)	
漏斗	パラック	(口径 20cm 前後)	
蒸留器	コソリ	(高 50cm 前後)	

これらの構成を見ると、同一器種であっても、異なる法量の製品が多く作られており、珍島に比べると多様な用途をもつ特殊な容器も認められることが観取される。

e. 濟州島甕器の特徴

濟州島でみられる甕器について、納邑里における聞き取り調査を手始めとして、濟州島全域に残る資料まで調査の手を広げてしまったが、ここでこれらについて、整理しておきたい。

まず、濟州島には多くの甕器が残されているが、これらの多くは濟州島産のものである。濟州島産であることの判別基準については、短期間の調査であったため、個別実測図や観察表を基にした論証には至っていないが、原料となった土質とこれを焼成した後の焼き上がりの相違、器の成形にみられる技術や器形の微妙な変化などを基にすれば、比較的容易に判断することが可能である。逆に言えば、濟州島甕器はそれほどに個性的であると言える。

濟州島甕器の器種は壺・甕・鉢・瓶・碗・甌などを始めとして、漏斗、蒸留器など、各種の器種が見られる。また、それぞれに法量の異なる製品が作られており、用途に応じた作り分けが盛んであったことも観取される。

濟州島甕器の生産窯については、1998・99 年度の調査において、南濟州郡大静邑九億里に総数 70 基あまりの窯跡があり、ここを中心とした濟州島西部において生産されたことを確認している。なお、濟州島に限らず、韓国の甕器には硬く焼き締めた硬質のものと、やや軟質のものがあることが知られており、軟質のものは甌など調理具を中心とした製品に多い。九億里では硬質甕器と軟質甕器を焼成した窯が異なっており、それぞれにノーラン窯、クン窯と呼ばれていた。今回の調査において、軟質甕器では甌のみを確認したが、実際にはもっと多くの器種があったものと推測される。

さて、これら濟州島甕器の生産は、朝鮮時代後期にいたり、全羅道から陶工が来島して始められたとされている。これについて、詳細に確認するまでにはいたっていないが、濟州島甕器にみられる器形や基本技術の上からは、十分に納得される場所である。しかしながら、前述したように、濟州島甕器には用途に応じた器種とその中の作り分けが極めて進んでいることからすれば、濟州島では韓半島陸地以上に甕器の役割が大きかったことが

考えられる。そこには、濟州島の場合、金属器や磁器、漆器などの調達がさほど簡単ではなく、その用途の多くが甕器に期待されたことを示すものかもしれない。ただし、これらのことについては、濟州島ならびに韓半島陸地における、甕器についての詳細な調査と分析による確認が必要であることは言うまでもない。

4. まとめ

冒頭にも述べたが、食器はその国や地域の特徴を最も端的に感じることでできる食事に関わる物的資料である。その意味で韓国あるいは濟州島の食器は、我々のような異文化に属する人間からすれば、やはり韓式料理を作り、食することを前提とした組み合わせが認められる。そこには日本のように、和食を中心としながらも、西洋料理や中華料理を前提とした食器を、大量に組み合わせて用いるような傾向は認められない。これは韓国、特に調査地であった濟州島の牛島や納邑里の一般家庭においては、西洋料理や中華料理などの影響がほとんど及ばず、韓式料理に対する嗜好が依然として強いためと考えられる。また、一般的な食器に関していえば、韓国では形やデザイン、装飾などに富むものは少なく、基本的に無地を基本とした単純な組み合わせに終始する傾向が強い。大まかにみれば、日本では食器に季節観や世界観を持ち込み、食材や料理の季節性、色調などの組み合わせにこだわりを見せるが、韓国では食器にそのような要素を期待しないようである。

しかしながら、今日の韓国の外食産業をみれば、日帝時代からの日本料理に加えて、次第に西洋料理や中華料理の影響が強くなり、一般家庭での食生活にも大きな影響を与え始めていることが推測される。新しい食材や調味料、それを利用した料理の普及は当然のことながら、これを作り、食するための食器にも影響を与えることは必至で、遠からず韓国の一般家庭の食器にも変化が現れ始めるものと想定される。それは今日の韓国家庭の電気冷蔵庫やガスレンジ、電気やガス炊飯器、電子レンジやオープンなどが普及する速度に比べれば、遅々たるものかもしれないが、確実に進行していくものと考えられる。

なお、今回、食器を調査対象としたのは、韓国における陶磁器生産の歴史との関わりを念頭においてのことであった。韓国を含む東アジアの国々では中国陶磁器の影響を受けて、それぞれの国毎の陶磁器生産の歴史が刻まれる。韓国では高麗青磁や朝鮮王朝代の白磁や染付類、甕器がそうである。このような陶磁器はそれぞれの国の歴史の中で、評価や位置付けがなされ、調度具や食器として、今日まで作り、使い続けられている。しかしながら、これまでの経験の中から見ても、韓国では一般家庭の食器の中に、韓国の伝統的な陶磁器の使用は極めて少ないように思われてならなかった。そこで、一般家庭における食器の調査

を思い立った訳であるが、調査を終えての印象はやはり日常生活において、伝統的陶磁器の使用は少ないように思えてならない。

その中で、唯一、日常雑器であった甕器については、キムチ甕を中心として、今日でもかなり使い続けられていることが認められる。しかしながら、キムチ甕以外の甕器については、今日、ほとんど実用品としての役割を終えようとしている。特に、済州島では元々温暖な気候もあって、冬の間の食料であるキムチ製作のための甕も、それほど盛んに用いられているとは言い難い。韓国社会にとって、食器としての伝統的な国産陶磁器は、多くの人々にとって身近な存在ではないものと考えられる。

その原因には韓国の歴史や、食文化がなんらかの形で影響しているものと考えるが、このような韓国における食器使用の在り方と日本における在り方とを比較し、さらにはこれを通じて両国の文化を比較・検討する試みを、今後とも続けて行きたいと考えている。

なお、末筆ながら、本研究の遂行にあたっては、ソウル大学校教授全京秀教授の多大なる御配慮とともに、済州大学校施設課高益萬氏の御助力があったことを記し、感謝の意を表する次第である。

琉球国と濟州島の歴史的関係

—予備的考察—

豊見山 和行

はじめに

琉球と朝鮮の関係史については、戦前の東恩納寛惇、小葉田淳、戦後では田中健夫、各氏の研究蓄積がある。これらの研究は大づかみに言えば概括的・概観的であるが、近年では、特に韓国側の研究者によって琉球・朝鮮間交流史に関する史料集(1)が取りまとめられたり、あるいは個別論文による研究が深められつつある(2)。他方、日本側の研究も個別テーマによる分析がなされてつつあるが、その中で漂流・漂着に関連する論考が焦点のひとつとなっている(3)。

小論では、これらの研究史を踏まえ、琉球と朝鮮国全体との交流ではなく、特に濟州島との関わりを中心に二、三の問題を検討する。

1. 牛島と琉球

旧来の研究では、朝鮮王朝全体と琉球との関係に主眼が置かれてきたが、ここではより地域を限定し、濟州島の離島である牛島との関わりを検討する。濟州島と琉球の関わりについては、すでに金泰能氏の論考がある(4)。その成果を念頭に、まず牛島へ漂着した琉球人に関する史料を示すと次のものがある(「耽羅紀年」『心齋集(Ⅱ)』濟州文化社、1990年)。

九年(清嘉慶十四年、1809年)

是年琉球国巡見官翁世煌・史官姚世康・毛維煥等漂到牛島、巡見官髻上挿金簪々頭如菊花、頭戴紫綾冠、腰黃緞大帶、足躡紅靴、史官皆挿銀簪、戴黃綾冠、被紺色周衣大袖長裔、日奉国王命、巡察民情到大島、竣事而還遇風漂来、王都在中山地、国俗都無印信、公行文蹟皆以墨套用之云、

上記の史料を要約すると、1809年、琉球国の巡見官である翁世煌、史官の姚世康・毛維煥らが牛島へ漂着した。その際の衣装は次のように記されている。すなわち、巡見官の翁は金の簪を髪に挿し、その簪の頭部は菊の花のようであった。そして「紫綾」の冠（ハチマチ）を戴き、紅靴を履いていた。史官は皆、銀の簪を挿し、「黄綾」冠を被り、大袖で長裾の周衣（袍衣か）をまとっていた。さらに、牛島へ漂着したのは、大島（奄美）の民情巡検の帰途であるとしている。そして、琉球の王都は中山にあること、さらに印信（印鑑）を用いないこと、公文書では墨書によること、などを記している。

右の答えで、大島への巡検の帰路で漂流した点には検討を要する。結論的に言えば、鹿児島（日本）との関係を隠匿するためにの返答であると言えよう。恐らく、鹿児島からの帰路において牛島へ漂着したものと考えられる。しかし、当該期の琉球は日本との関係を対外的に隠匿していたため、このような回答になったものと言えよう。

その他、牛島へは右の二年前の1807年にも琉球国人6名が漂着したことを小林らはすでに指摘している(5)。

これら牛島へ漂着した琉球人らがどのような経緯で漂着し、さらに帰国までにどのような処遇を朝鮮王朝から受けたかは、今後の課題である。

補足すれば、牛島における臨地調査（1999年10月）では、上記に関わる史料や伝承は残念ながら確認することができなかった。

2. 琉球王子遭害事件伝承と済州島

済州島の民間には、同島に琉球王子が漂着したが、琉球船に積み込んでいた宝物に目がくらんだ同島の牧使によって殺害されたという伝承が伝わっている。崔常壽氏は、それが伝承としてだけでなく、朴趾源「燕岩集」（朝鮮王朝後期）等に詳しく記録されていることを紹介している(6)。崔氏は前掲「燕岩集」だけでなく、「朝鮮王朝実録」仁祖元年（1623）四月条に「琉球国世子漂到我境、使辺臣潜殺・・・」とあることから、伝承と史実が合致するとして、この事件の考証を行っている。すなわち、その事件は1609年に琉球が薩摩藩島津氏に攻略され、尚寧王らが鹿児島へと連行された時期のものであるが、文献では、約10年ほどずれがあることなどを明らかにしている。

ここでは、崔氏の考証についてその当否を取り上げるものではない。その史実の確定は別の機会に譲り、済州島の住民が朝鮮王朝時代に確かにその琉球王子遭害事件を記憶していたことを取り上げてみたい。

済州島民の張漢喆は、1770年冬、ソウルでの科挙に応じるため同島を出港したもの

の、出港間も無く強風にあおられて外洋へ押し流され、漂流してしまった。琉球近海とされる無人島へ漂着し、助けを求めた船が倭寇であった。そのため物品を強奪され、かろうじて安南船に救助された。ところが、安南人らはかつて済州島民（耽羅人）に安南王子を殺害されたことがあるとして、張ら一行へ憎悪を募らせたため張らは安南船から海に抛り出され、またも漂流することになった。ようやく全羅南道の青山島近海の一小島へたどり着き、九死に一生を得てソウルで科挙を受けたが、不合格となり済州島へもどった、というものである。

一八世紀に倭寇が登場することや安南船での出来事など、これらをすべて史実として位置づけられるかどうかは、なお検討の余地がある。ただし、張が最初の漂流の際、琉球への漂着を恐れていた点は、済州島民が琉球をどのように認識していたかを知る上では貴重な素材と言えよう。すなわち、その部分とは、

「昔、わが国と琉球とは親交があつて、琉球から使臣が来ると今の全羅道の順天府にある昇平館に泊まったものである。なにしろ海路が遠く隔たっているので往来がそう頻繁ではなかった。ある時期、相前後して三人の使臣が来朝したことがあり、その内の二人のことは忘れて今思い出せないが、光海朝の辛亥年間（光海三年）、琉球太子一行が遭難して耽羅に流れ着いたことがあつた。時の牧使（行政官）は彼等一行を略奪者だどこじつけて処刑し、財貨や宝石などを取り上げた。それ以来両国は断交状態になったといわれている。私達が（琉球に）到着すれば復讐されるかも知れないので、それを恐れているのだ」（7）。

この内容は、不正確なものであろうが、少なくとも済州島の牧使による琉球王子殺害事件がかつてあつたと認識していた点は間違いない。

この事件そのもの当否については、前述のようにここでは問題にしない。むしろ、言説としての琉球王子遭害事件を済州島民が認識していたという点が重要であると考え。つまり、済州島と琉球の関係についての認識、換言すれば、済州島民—ただし、張は科挙を受験するほどのエリート—の琉球認識の一端が、如実に示されているということである。

むすびにかえて

琉球・朝鮮王朝間の公式な交流は、1609年の薩摩藩支配以後の近世では途絶えてしまう。もちろん、北京において両国の朝貢使節が交流していたことは事実であるが、古琉球時代のように琉球から直接朝鮮へ使者を派遣するような外交形式は採られなくなる。

しかし、済州島と琉球は、近世においても上記のような漂流という不慮の出来事による交流は断続的に続いていた。また、1702年に作成された『耽羅巡歴図』中の「漢拏壯囑」

には、南側に「大琉球」と島影をかすかに描いている(8)。18世紀初頭において、濟州島(耽羅)を中心とした地理的、空間的認識を知る上でも上記の絵図は、貴重な素材を提供しているといえよう。

[註]

- (1) 孫承喆、他編『朝鮮・琉球関係史料集成』(国史編纂委員会、1998年)
- (2) 例えば、李薰(松原孝俊・金明美訳)「朝鮮王朝時代後期漂民の送還を通してみた朝鮮・琉球関係」(『歴代宝案研究』第8号、1997年)。
- (3) 松原孝俊「琉球の朝鮮語通詞と朝鮮の琉球語通詞」(『歴代宝案研究』第8号、1997年)。小林茂・松原孝俊・六反田豊「朝鮮から琉球へ、琉球から朝鮮への漂流年表」(『歴代宝案研究』第9号、1998年)。
- (4) 金泰能(大口里子訳)「琉球と濟州との関係」(『南島史学』第20号、1982年)。
- (5) 前掲註3、小林・松原・六反田論考。125頁。
- (6) 崔常壽「琉球王子の濟州島漂着伝承」(『濟州島』1968年)。
- (7) 張漢喆(宋昌彬訳)『漂海録』(耽羅叢書2、新幹社、1990年)。
- (8) 『耽羅巡歴図』(濟州市、1994年)。詞書きとして、琉球との距離を「午距琉球国五千餘里」と記している(21頁)。

濟州島の考古学研究

後藤 雅彦

本報告では、各年度の調査内容を整理し、その成果を踏まえながら、濟州島という島嶼域における考古学研究の課題について、他の島嶼域との比較を合わせて整理してみたい。

1. 調査の内容

ここでは、各年度の調査内容を整理したい（第1図）。

(1) 1998年度

本年度の調査は、徳修里における考古学調査を目的に実施したが、調査初年度と言うこともあり、まず濟州島における考古学研究の状況把握を行ない、さらに徳修里が含まれる濟州島南部（安徳、大静）の考古資料の確認にあたった。

調査内容としては、濟州島南部を中心に濟州島の各時代に亘る代表的な遺跡の踏査と濟州大学校における資料実見及び文献の確認を行なった。

(主な調査内容)

①濟州大学校博物館、濟州道民俗自然史博物館の見学

②徳修里

③水精寺、抗蒙遺跡、北濟州群涯月邑古城里（土城壁・窯址）

濟州牧官衙址、大静城址

④上臺里遺跡（第1図遺跡番号4）、三陽洞遺跡（番号5）、高内里遺跡（番号8）、郭支貝塚（番号7）、高山里遺跡（番号1）、龍潭洞支石墓（番号6）

(2) 1999年度

今本年度の調査は、まず、牛島に行くと途中、城山の畑地において、瓦、新羅陶器、

高麗青磁片などを確認し、また、道路傍の断崖において貝層が露出している状況がみられた。

牛島では、すでに確認されている支石墓を実見し、済州大学校博物館の調査チームが実施していた分布調査にも同行し、牛島における考古学資料について確認することができた（註1）。その後、牛島の支石墓と比較検討するために、済州市に戻り、支石墓を中心に踏査を行った。

（主な調査内容）

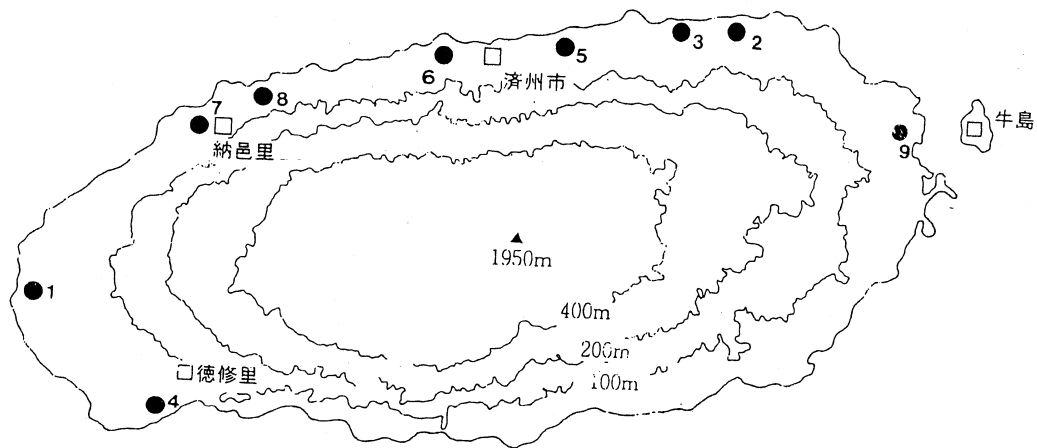
- ①牛島の調査
- ②支石墓の調査
- ③済州民俗自然史博物館において、開催されていた『済州発掘遺物特別展』の見学。済州島における考古学調査の進展を確認。

（3）2000年度

本年度は、郭支貝塚の踏査を中心に下記の調査を実施した。なお、各遺跡の報告書などの文献について、可能な限り確認を行った。

（主な調査内容）

- ①郭支貝塚の踏査（北済州郡・済州大学校博物館 1997 a）
- ②烽火台遺跡の実見
関野雄（1938）
「済州島には烽燧台址が多く、（略）これ等は平地にあるものと山頂にあるものとで構造を異にし、（略）両者とも海岸に近い眺望の開けた所に設けられている」
済州道（1996）
烽燧 25ヶ所 煙台 38ヶ所
- ③終達里遺跡の再確認（北済州郡・済州大学校博物館 1997 b）（番号 5）
昨年度、牛島の対岸地である終達里遺跡を踏査したが、2000年7月より済州大学校博物館が再調査を実施しており、その発掘状況を確認することができた。
- ④三陽洞遺跡の保存、整備状況の確認
- ⑤済州大学校において資料の実見と情報収集
済州島における主要な遺跡の出土遺物の展示を実見。



第1図 濟州道の主要遺跡

(原図：李 1995『濟州島考古学研究』図8に主要遺跡を印す)

- 1：高山里遺跡 2：金寧里遺跡 3：北村里遺跡 4：上幕里遺跡 5：三陽洞遺跡
6：龍潭洞 7：郭支遺跡 8：高内里遺跡 9：終達里遺跡

支石墓に関する調査及び、新たな知見を確認する。

⑥開設準備中の国立博物館の見学

⑦支石墓の再確認

内陸部にある支石墓の実見。

2. 濟州島の考古学研究—島嶼域における考古学研究

まず濟州島における考古学研究について、李清圭氏（1995）の著書を参考にして概観してみる（註2）。

濟州島における先史考古学の研究史は大きく3段階に分けることができる。

まず第1段階は、ほぼ1970年代初め頃までに相当し、一部の試掘調査と分布調査を通じて、支石墓と無文土器に対する検討が行われた。

濟州島における考古学資料の確認は1914年頃まで遡り、鳥居龍藏氏は、濟州島出土の土器を弥生式土器の系統とみなし、濟州島の位置付けとして、日本九州と韓半島を結び付ける役割も指摘した（鳥居1924）。

第2段階は、層位学的調査の進展と旧石器時代及び新石器時代に関する検討が本格

的になった。郭支里遺跡は 1973 年、宋錫範、江坂輝彌両氏によって確認され、1979 年に李白圭氏によって発掘が実施された。この調査の結果、無文土器の年代観が明らかになり、李氏は孔列土器が慶南海岸地方から伝来してきたものであると論じ、済州島と韓半島の関係について具体的に論議されるようになった。

第 3 段階になると、各時代にわたる発掘調査の進展と、済州島全域に対する分布調査が実施され、とくに李清圭氏が指導する済州大学校博物館と史学科チームによって調査が実施されるようになる。

このように研究史を見てみると、層位的な発掘調査の進展によって、済州島における独自の時期区分が考古学的に押さえられるようになり、一方で、韓半島を中心とした周辺地域との関わりが各時代にわたって具体的に検討されるようになった。個別研究として、宋錫範氏の支石墓に関する論考（1979）も、済州島から韓半島、西北九州を視野に入れたものである。こうした周辺地域との比較研究の重要性は、任孝宰氏（1986）が「済州島の地理的な位置から見ると、韓半島南部から島嶼地方、九州、沖縄及び中国大陸などの文化的連続性が認識され、各地域間の文化交流の状況を明らかにする為には比較研究が必要である。」と指摘していることに端的に示されている。

ここで、島嶼域である済州島における考古学研究を、同じく島嶼域を対象とする台湾考古学と合わせてみると、次のような 3 つ大きな流れを読み取ることができる。

まず、在外研究者（外国人を含む）を中心とした「発見の時代」（前述の第 1 段階）、在地研究者による地道な調査を踏まえた「編年研究の確立した時代」（第 2 段階）、そして、近年の「調査研究が多様化していく時代」（第 3 段階以降）へと移行する中、島嶼域という地理的環境を考慮した研究課題が浮かびあがってきているように思われる。

3. 支石墓—島嶼域における外来要素の受容と展開

前述したように、済州島における考古学研究において、支石墓を通して、韓半島との比較検討がなされている。韓半島を含む東北アジアの支石墓については、形態の差による分類（卓子形、碁盤形）、分布地域による分類（北方式、南方式）、さらに下部構造の差によって細分も行なわれてきたが、こうした分類に合わない類例も増加し、所在地名をとって、分類名を付す場合もあり、支石墓の範疇自体、諸説認められるようになった。

このように分類が多様化していく背景には、支石墓の系統論が深く関わり、東北アジアに分布する数多くの支石墓は、その型式、構造も多様性が認められ、既存の分類

にあてはめるだけでは、その性格を把握することが難しくなってきたと言えよう。

そうした中、1997年に西谷正氏を研究代表者とする『東アジアにおける支石墓の総合的な研究』平成6年～8年度科学研究費補助金（基盤研究A2）研究成果報告書が刊行された（註3）。その中で、「これまでの支石墓研究においては、中国・朝鮮・日本でそれぞれ個別的行なわれていたが、本研究計画では、各専門分野の研究者が結集して、東アジアという視野で総合的に研究することにしたのである。」としており、一方で、各地における支石墓の出現－展開－消滅という流れを追うことが意図されており、支石墓研究の研究成果と課題を知る上で重要な報告となっている。

濟州島における支石墓の発見は、1932年まで溯り、1969年には郭支里支石墓が調査されている。当初、濟州島の支石墓も、韓半島における支石墓の分類にあてはめ、その位置付けを捉えることに主眼が置かれていた感が強い。すなわち、卓子式の変形、基盤式の変形、支石がない蓋石式とする見解が併存していた。

その後、1985年には濟州市の龍潭洞、外都洞の2ヶ所で本格的な考古学調査が実施された。こうした調査の結果、濟州島の支石墓は、時期的にも、そして構造的にも、韓半島の分類にあてはめることができないと考えられるようになった。

その結果、李清圭氏（1995）は、濟州島の支石墓を以下のように分類し、濟州島における支石墓の時間的変遷を追求する方向を示した（表1）。

そして、外形上の変遷として、板石形の支石墓が新しく、濟州島支石墓の完成段階に位置付け、これは、共伴遺物からみても、年代が新しいことが裏付けられている。

ここで、濟州島の支石墓研究の課題を整理してみたい。

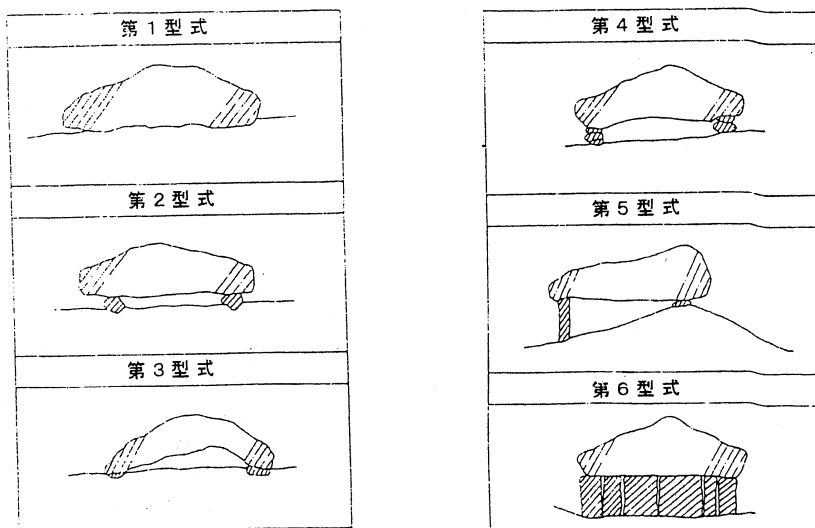
まず、濟州島における支石墓の分布状況の把握と基礎的データ（測量）の蓄積が急務であろう。宋錫範氏（1979）の集計では、総数63基、完全な状態34基としており、さらに、濟州大学校博物館チームは現在、支石墓の基礎的データの収集を行っており、康昌和氏のご教示によると172基の支石墓が確認されている。

とくに、最近、内陸部においても支石墓が確認され、これらは、周辺に遺物散布地が確認されておらず、孤立した状況において存在することが特徴である（註4）。一方、龍潭洞などの支石墓群は、付近に遺物散布地が存在し、平坦な土地、近くに河川が流れるなどの立地条件を備えている（第2図）。また、牛島の支石墓も海岸沿いに立地しており、当時の集落との関わりなど検討を要する。

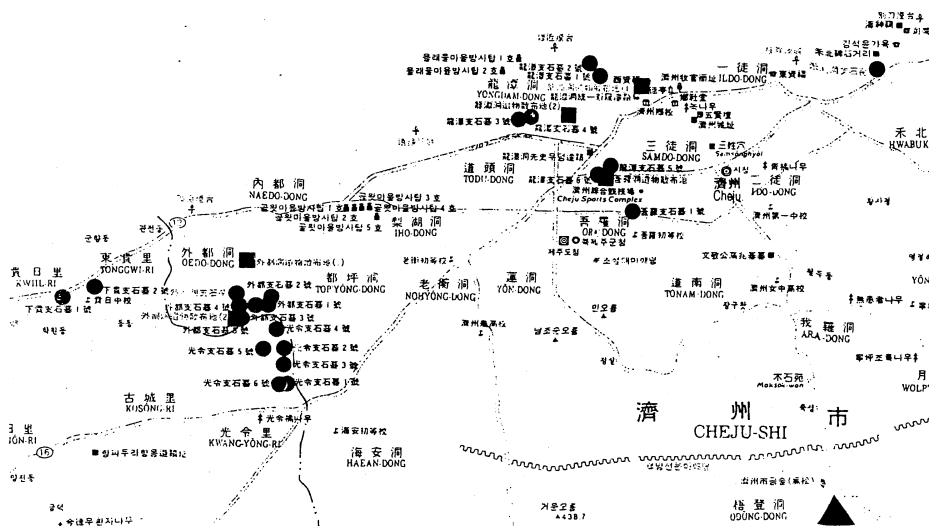
ところで、こうした分布状況を把握する必要性は、支石墓の保存にも関わる問題である。濟州島に限らず、支石墓は地上に大きな石を置かれているため、耕作などの関係で、破壊、移動されたり、現状の変更が著しく、早急に記録化することが望まれる。

表1 濟州島の支石墓分類 (李1995)

分類	埋葬位置	支石の形態	上石の形態
第1型式	地下	無	板石・碁盤形
第2型式	地下	塊石形	碁盤形
第3型式	半地上	塊石形	アーチ形
第4型式	半地上	塊石形・二重支石	不定形・碁盤形
第5型式	半地上	塊石形・板石	不定形・碁盤形
第6型式	地上	板石	不定形・碁盤形



(支石墓の分類模式図は康昌和氏 (1996) の論考より引用した。)



第2図 濟州島の支石墓 (龍潭洞周辺地域)

(原図：韓国地図院 1996『濟州道文化遺蹟地図』より抜粋)

●：支石墓 ▲：内陸側にある支石墓 ■：遺物散布地

そして、支石墓と報告された遺構の下部構造の把握、出土遺物の確認が問題であり、濟州島において、下部構造が明らかな事例は少なく、その構造の把握が必要である。こうした調査研究の成果を踏まえて、改めて、濟州島における支石墓の出現—展開—消滅を時間軸の中で把握し、韓半島、そして東北アジアの中での位置付けを明確に示さなくてはならない。

4. 遺跡の立地—島嶼域における遺跡の態様

濟州島において、島内全域で調査が実施されるようになり、各時代の遺跡のあり方が注目されており、例えば、濟州島の遺跡の中で、確認された遺跡数も多い郭支1式土器時期について、李清圭氏（1995）は、立地条件（土壌、河川、湧水など）を踏まえて、遺跡の分布状況を次のように整理している。まず、主要な遺跡の分布を見ると、旧巖土壌群の分布と密接な関係があり、同時期の村落の立地条件として畑作が有利な地域が選択されたことを示す。そして、濟州島は海拔1950mを頂点として、内陸に行くほど気候の条件が悪くなるため、遺跡は100m以下に分布する（第1図）。実際に、先史時代遺跡を踏査するにあたって、ほとんどの遺跡が海岸沿いに走る12号線道路に沿って分布することがわかる。また、同地域は漁業、農業に有利な地域であると同時に、沿岸航海と陸上交通などの好条件を備えており、海岸地帯以外の村は中世以後に開発されたと考えられる。

このように、濟州島と言う島嶼域に見られる特異性として、李氏が指摘しているように、土壌と気候、そして地質的自然環境が文化形成に強く影響を及ぼす。このため、濟州島という島嶼域における人々の居住のあり方を検討するにあたって、自然環境との強い関わりは看過できない視点であろう。

こうした視点は、同じ島嶼域の考古学研究として、臧振華氏（1991）による澎湖諸島の調査にも共通している。同氏は、澎湖諸島の考古学研究の利点として、大陸との文化関係の探索ばかりでなく、島嶼域という面積が限られた地域をあつかうことによって、一地域の全容が把握でき、なおかつ特殊な自然環境を有することに注目している点は、まさに、島嶼域の考古学研究の意義を示しているように考えられる。

5. 島嶼域として考古学研究の課題

島嶼域における考古学の研究テーマとして、上述したように周辺地域、本土との文

表2

時期区分	土器文化				年代	稲作	貝塚	支石墓
	有文土器	無文土器	赤褐色土器	灰色陶器				
耽羅以前	高山里式				B C 3000以前			
	北村里式				B C 2000~1000		○	
		上幕里式			B C 500~300 300~100	?	○ ○	○
耽羅前期			郭支1式	郭支1式陶器	B C 100~A D 500	○	◎	○
耽羅後期			郭支2式 (高内里式)	郭支2式陶器	A D 500~900	○	○	

化関係、遺跡の立地や遺構の分布から導き出される居住形態の変遷、そして生業形態の変遷などをあげることができる。

ここで、こうした議論を展開する上での課題について整理してみたい。

まず、同一時期における島嶼域と本土側の文化関係を示すには、時間的併行関係を明らかにしなくてはならない。現時点で、文化要素の比較をする上で、済州島と韓半島、また台湾と大陸側において時間差が認められる。これには、放射性炭素年代法のデータの比較ばかりでなく、各遺跡、各地域において層序関係を踏まえた編年研究の細分化を目指す必要があるのではないだろうか。とくに時代の移行期における編年の細分を通じて、時間的に前後する文化の継承関係をさらに探求しなくてはならないであろう。

こうした広域編年網の確立によって、外来要素の受容時期のずれ、受容から展開までの継続時間長さなど、時間差の生じる意味も考慮しなくてはならない。

また、外来文化の導入と、各地の受容、展開の両側面を検討する必要がある。例えば、先史時代における外来文化の代表として、稲作文化の広がり重要視されており、済州島においても、稲作開始時期の位置付けが問題となっている。

稲作文化の導入にあたって、稲作に直接関わる、植物遺存体や農耕具などの技術的側面以外にも、水稻耕作に伴う漁撈形態、紡織技術を示す紡錘車などの研究にも注意を払う必要があるだろう。一方、貝塚遺跡の出現、展開も、農耕の進展との関わりの中で捉え直すことも課題である(表2)(註5)。

さらに、韓半島と済州島とも文化交流の実態を探る上で、半島沿岸部の島嶼域の動態は注目される。筆者は、これまでも台湾海峡兩岸地域の文化交流を検討する上で、東南中国の沿海側に広がる島嶼域の先史文化の動態を問題としたが、長江以南の沿岸各地域は、島嶼域を包括しており、各島嶼域との往来も頻繁であったと考えられ、こうした島嶼域を含む小地域のネットワークを覆うように台湾海峡を超えたネットワー

クが重層的に存在していたと想定している。このような状況は、韓半島と済州島の間においても、共通するのではないだろうか。

6. おわりに

以上のような済州島における考古学研究の状況を鑑みると、やはり島嶼域としての特質が問われるものと考えられる。まず、周辺地域との関係から、文化交流の懸け橋的な役割が浮かびあがってくる。これは、言わば島外との関係であり、考古学的には搬入品、搬出品、在地品として捉えることのできる問題である。一方、島嶼域という限定された自然環境の中での居住のあり方や島内の地域性に関わる問題を検討する必要がある。

すなわち、島嶼域の考古学として、日本における南西諸島は言うまでもなく、筆者が研究対象としている中国東南沿海地域においても、例えば長江下流域と舟山群島、東南中国と台湾、海南島、香港近辺の島嶼部など共通したテーマが存在すると言える。従来の研究では、総じて本土との関係に着目されていた傾向が強かったが、各島嶼域での調査が進展する中、島嶼域内での遺跡のあり方をめぐる検討が深めるようになってきたと言える。

このように、島嶼域における考古学研究の課題は、島外との関係、島内における関係という両側面の視点をもつことによって、今後、東アジアから東南アジア、そしてオセアニア世界に広がる島嶼域における比較考古学的研究が望まれるように考える。

また、調査期間3年間において、研究方面の深化ばかりでなく、国立博物館の開館や、各遺跡の保存整備が進行している状況を垣間見ることができ、そして、実際それらに携わっている研究者諸氏と接することができたことは、有意義であった。

今回の調査では、研究分担者である李清圭氏にご指導いただき、各年度にわたって、済州大学校博物館の康昌和氏をはじめとする考古学スタッフにはご協力いただいた。

調査にあたっては趙現鐘氏(国立済州博物館)、高才元氏(済州道民俗自然史博物館)にご協力、ご指導いただいた。また、呉盛奎氏には、資料収集及び検討にあたって、ご協力いただいた。西谷正先生には、支石墓研究に関する文献を賜り、ご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

註釈

- 註1 牛島の支石墓及び遺物散布地については、北濟州郡・濟州大学校博物館（1998）にも報告されている。
- 註2 研究史については、最近、康昌和氏（2000）によっても整理されている。
また、江坂輝彌氏の論考（1973）の中に鳥居龍藏氏の調査などに関する研究史が紹介されている。
- 註3 朝鮮半島について、甲元真之氏（1997）によって詳細に検討されている。
- 註4 康昌和氏のご教示による。
- 註5 表2は、李清圭氏（1995）を参考に、李氏にご意見を伺いながら、各文化要素の位置付けを筆者なりに整理したものである。

引用参考文献

（韓国語）

- 任孝宰 1986「濟州島先史文化研究の現況と問題点」『濟州島研究』3
- 李清圭 1995『濟州島考古学研究』学研文化社
- 濟州道 1996『濟州の防禦遺跡』
- 北濟州郡・濟州大学校博物館 1998『北濟州郡の文化遺蹟（I）』
- 康昌和 1996「濟州島支石墓」『第4期博物館大学市民講座』
- 康昌和 2000「濟州地方埋藏文化財の発掘と保存」『博物館年報』第1号

報告書

北濟州郡・濟州大学校博物館

- 1997 a 『濟州郭支貝塚』濟州大学校博物館調査報告第20輯
郭支貝塚IV・V・VI・VII地区発掘調査報告

北濟州郡・濟州大学校博物館

- 1997 b 『濟州終達里貝塚』濟州大学校博物館調査報告第21輯
終達里貝塚1地区発掘調査報告書

（日本語）

- 鳥居龍藏 1924「民族学上より見たる濟州島（耽羅）」『日本周囲民族の原始宗教』

(『鳥居龍藏全集』に所収)

- 関野雄 1938「济州島における遺蹟」『考古学雑誌』第28巻第10号
江坂輝彌 1973「韓国の遺跡遺物見学旅行案内記(7)」『考古学ジャーナル』85
宋錫範 1979「济州島の支石墓」『考古学ジャーナル』第161号
西谷正 1997『東アジアにおける支石墓の総合的な研究』
平成6年～8年度科学研究費補助金(基盤研究A2)研究成果報告書
甲元真之 1997「朝鮮半島の支石墓」『東アジアにおける支石墓の総合的な研究』

(英文・中国語)

- 臧振華 1992『澎湖群島の考古学』中央研究院歴史語言研究所專刊95

濟州島納邑における祖先祭祀の諸相

—「死婚」を中心として—

徳丸 亞木

はじめに

本報告では、納邑における祖先祭祀の諸相の内、特に死後婚姻について報告を行う。

ここ納邑においても儒教式の祖先祭祀儀礼は盛んであり、それぞれの系統では、基本的には現世代の四代祖までを位牌祭祀の対象としている。死後婚姻は、祖先祭祀の列に連なることのできない独身死者を、霊的に結婚させることにより、その靈魂を慰め、茶礼や忌祭など、祖先祭祀儀礼の対象となさしめる意味を持ち、納邑においては、一般的には「死婚」と称されている。論者が確認できた死婚は、男女双方とも独身死者の事例であり、生者と死者との死婚については確認できていない。また、死婚の後、その夫婦の子孫となる養子を迎える例も一般的に聞かれ、この点では竹田の分類する濟州型の死後婚姻に該当すると思われる^{註1}。

納邑の死婚に関して留意されるのは、死婚に関わる儀礼が、仏教寺院の関与のもと行われる例が見られる点である。納邑集落内の主なる信仰表象としては、共同体レベルの儒教祭礼である醮祭を行う壇^{註2}、本郷堂^{註3}（シンバン^{註4}が司祭となる）、仏教寺院三ヶ寺、基督教会^{註5}などがある。この内、仏教寺院は、死婚を望む遺族の依頼に応じ、宗派間のネットワークなどを用いて死婚の相手を探し、さらに死婚の儀礼も寺院を中心として行われている。集落内の寺院は月印寺^{註6}、青龍寺^{註7}、コガン寺の三ヶ寺である。このうちコガン寺は、元々ムーダンだった男性が始めた寺で成立は新しい。恐らくはコガン寺も死婚儀礼に関係していると思われるが、ここでは、聞き書きをなした青龍寺の事例を中心として解説する。また、話者の話によれば、基督教会も寺院と同様に信者の依頼に応じて死婚の相手を探したり、死婚を教会で行っているという。しかし具体例を聞くことができなかったため、ここでは、論述を仏教寺院が関与したものに限る

納邑における死婚の概況

納邑では、死婚は、交通事故や病死、あるいは自殺など若い男女が独身のまま死亡した場合に行われる。すべての独身死者に対して行われる訳ではなく、未婚者の死後、その家に悪いことが起こった様な場合に、その原因が未婚死者と結びつけられて考えられ、死婚を行う事になるという。未婚者の死霊は、大人としての人格を持たず、そのままでは祭祀も行えないので、死霊を慰める意味もあるとされる。

死婚は、男性死者であれば女性の未婚死者、女性死者であれば男性の未婚者を探して行われる。普通の婚姻以上に、男女双方の相性が重視される。誕生日などから、慎重に「宮合」を調べる。この相性が合わぬと、死婚を行っても、様々な悪いことが起こるとされる。また、ムーダンの家の者が、基督教徒と死婚を行ったりするのも嫌われた。多くの場合は、同じ宗派、あるいは同じ基督教徒同士で死婚の相手を求める事になる。

死婚では、次に述べる青龍寺の事例のごとく、日柄も通常の婚姻以上に問題とされるが、済州市の「哲学館」など、占い師にその日柄を決めてもらうことが多いという。

青龍寺における死婚の事例

今回の調査では、青龍寺において具体的な死婚の事例を聞くことができた。月印寺でも、死婚に用いられた写真（タキシード姿の男性と、ウェディングドレス姿との女性が寄り添って写っている）と紙位牌とを見ることができたが、住職が不在のため、具体的な事例は確認できなかった。

青龍寺では、最も最近では 2000 年陰暦 3 月に死婚を行っている。男性側は納邑の出身で、軍隊での訓練中 27 歳で死亡、女性は済州市に居住しており 25 歳で死亡した。女性の両親は青龍寺の信者であり、青龍寺に死婚の相手探しを依頼した。そのため、青龍寺の住職は、宗派の会合やサシクジュ（四十九日）の儀礼の場などで、やはり死婚を希望している男性死者が居ないか、他の寺の住職達に尋ね、相手となる男性死者を探し出した。両者の相性を慎重に調べ、相性が良かったため、死婚を行った。

具体的な儀礼過程については、詳しくは聞けなかったが、大まかな流れのみ紹介しておこう。死婚を行う日取りが選ばれた後、両家では前もって新郎、新婦の写真、位牌を各々の寺へ渡しておく。結婚式の 3 日前に、それらの写真、位牌を実家へ戻す。済州では、新郎による新婦の実家への嫁迎えが通常の婚姻の場合には行われるが、これと同じく、新郎の写真、位牌を持った新郎側家族が新婦の実家を訪れ、その場で披露宴を行った後、新婦

の写真を持った家族と一緒に、結婚式の会場となる男性側の寺へと移動した。寺での婚姻儀礼の後、新郎側の家で披露宴を行い、その後、写真と位牌とを新郎側の一族の墓へと運び、一族の先祖に夫婦になった事を報告した。後日、男性の妻となった女性の遺骨を、実家の墓から、男性側の墓へと移し、同じ墓域に双墳の形で埋葬した^{註8}。

死婚に伴う養子慣行

納邑においては、死婚の後、その夫婦に養子を迎える事もあるという。ただし、これは必ず行われるものでもなく、残された遺族の状況にもよるとされる。死婚は、独身のまま死んだ死者の魂を慰めるためのもので、その養子になる事は、あまり良い事だとは考えられていない。ある女性話者によると、死婚を行うのは、遺族が何らかの理由で、その財産を、養子に迎えられる傍系子孫に残したい場合が多いとされる。養子をとらない死婚の場合は、チェサなどの祭祀は、親が存命の間は親が、その死後は兄弟のいずれかが承継して行くという。当地域では兄弟間におけるチェサの分割が行われている。その詳細は社会構造についての報告を参照されたいが、通常死者のチェサに関して一番負担が軽い者に、死婚を行った死者のチェサを引き受けさせる傾向が強いという。

死婚で迎えられる養子は、多くの場合、新郎の近い親族、例えば、新郎の兄弟の息子などから養子を迎えるとされる。長男、次男は通常死者のチェサを承継するため、彼らが死婚の養子に迎えられることは少なく、子供が3名以上いる兄弟から、その末子を迎えることが多いという。養子に迎える子供の年齢は決まっておらず、赤ん坊でも良いとされる。

養子になる者には、祭祀財産として遺族が畑などを新たに購入して与えるのが通例とされる。これは遺族の財産を分割して与えるのではなく、生命保険などで得られた死亡保障金などで土地を購入して与えるものである。現金のまま与える事はまず無いという。留意されるのは、死婚した夫婦のチェサを行うための祭祀財産として、その一族の系統に先祖から受け継がれている不動産が分割されるのではなく、遺族が購入して新たに手に入れた不動産を与えるとしている点である。一族の系統の中で受け継がれた祭祀財産を、死婚によって生じた養子へと継承させることを忌避している可能性も考えられる。

ただし、死婚の新郎、あるいは新婦が一人っ子で、彼（彼女）以外に親世代のチェサを引き受け得る者が居なかった場合には、また財産承継の様子は異なる様である。納邑の女性話者が語ってくれた事例であるが、納邑で行われたある死婚の新郎は三人兄弟の三男、新婦は一人娘で、仏教式に死婚を行った。死婚の後、新郎兄弟の次男の三人の子供の内、その末子を養子として迎えた。この場合、その養子は、新婦の親夫婦のチェサも将来的に

は引き受ける条件で、新婦側の財産を承継する予定だという。

カマゲモルンチェサ

独身死者であり、いまだ死婚を行っていない者のチェサでは、通常のチェサでその最後に行われる供え物の一部を屋根に投げ上げ、鳥に食べさせる儀礼が行われないという。このため、独身死者のチェサは、カマゲモルンチェサ（「カマギ（鳥）に知られぬチェサ」の意）とも称される。死婚は、独身で死んだ者に対して、「人としてのつとめを完成させ、人として認められる様にするための」儀礼とされている。故に、死婚を行った後には、そのチェサは通常死者のチェサと同様に行われる事になる。ただし、死婚を行った者のチェサは、通常のチェサと区別され、サフォンチェサ（死婚のチェサ）とも称される場合もある。その儀礼過程は、通常死者の場合とほぼ同様である。

おわりに

以上、短い報告であるが、納邑における死後婚姻の概況を述べた。納邑における死後婚姻は、竹田の分類に従えば、基本的には、男女双方死で遺骨の移葬、入養を伴う済州型に一致している。留意されるのは、ムーダンなどシャーマンが死後婚姻に中心的に関与するのではなく、むしろ、相手の選定や婚姻儀礼そのものに成立宗教である仏教寺院（あるいは基督教教会）の強い関与が見られる点である。死後婚姻の儀礼は、祖先の列に加わる事ができない独身死者霊を祖先霊の列に加え、儒教式祖先祭祀の体系に組み込んで行くための、一種の境界移行のための儀礼であるといえる。その儀礼に仏教寺院が積極的に関与するようになった契機を、韓国仏教の布教展開過程の考察と併せて、今後明確にして行く必要があるだろう。

註

註1 竹田且「東アジアにおける死霊結婚—韓国習俗を中心に—」松崎健三編『東アジアの死霊結婚』1993年 岩田書院。

註2 集落の北側に位置する樹林に覆われた段丘に共同体の儒教祭礼である醮祭が行われる壇がある。段丘中腹の樹林に石垣に囲まれた100平方メートル程の広場があり、西神壇、土神壇、醮神壇の石柱が建てられている。醮祭は、陰暦正月および7月の上丁日に郷会により行われる。

註3 納邑には、堂が一ヶ所ある。集落内の石垣で囲われた蜜柑畑の角に、榎木の倒木と若木があり、周囲とは石垣で区画されている。榎木の根本には、多数の蠟燭や瓶が奉納され、枝には白い糸束、五色の布などが結びつけられ、地面には儀礼で用いられたと思われる紙片が散乱し、現在でも集落の信仰の対象となっている事が伺われる。この堂は、本郷堂、本堂、ハルマンダンなどと称されるが、話者によっては「豚の堂」と呼ぶとする。豚を祀る故というが、具体的な伝承は確認できなかった。この集落でも、堂の祭祀は基本的には女性を中心としている。かつては陰暦正月に集落各戸の婦人達が堂に集まり、シンバンを中心として儀礼を行った。集落の女性が、この堂に集まる際には、途中の道筋で知り合いに会っても挨拶を交わしてはならないとされる。また、堂に行くには個人の敷地と畑を通らねばならないが、その通行を妨害する事も禁忌とされている。以前、敷地の所有者が参拝者の通行を断ったところ、その家族に災いが生じたと伝えられている。祭祀に用いる供物は、餅、甘酒、モヤシ、豚肉を串に刺したもの、米、麦、布、紙、糸などである。シンバンの祈願の後、紙を焼き、布や糸を枝に結びつける。

註4 集落の各姓には、かつては各1名のシンバンがいたとされるが、詳細は不明である。現在では、70歳のシンバンが在住している。彼女は、前述のシンバンには直接関わりはなく、シンバンとしての修行も本格的には行っていない。約30年前、体調を崩し、病院でも原因がはっきりしなかった際に、周囲の者に本郷堂へ詣でることを勧められ、それから熱心に参拝して祈願を続けた。専属のシンバンが居なくなった後、儀礼や祝願のやり方を覚えていたため、シンバンの役割を引き継いだ。現在は、通院のため、済州市に住んでおり、儀礼を行う際に納邑に戻って来る。彼女が行う儀礼は、陰暦正月、8月の集落の安寧を祈る祈願が主なもので、この他に、集落で子供が産まれた際に、その母親と子供と

共に堂で祈願を行う。堂の神は戸籍簿を持っており、集落で生まれた子供はすべてこの戸籍に載るのだと伝えている。また、それらの子供が病気になった際にも、堂で快癒を祈願するよう母親から依頼される。この様に、この堂は、集落の女性が信仰する氏神型の神であり、また産神としての性格を強く示している。

註5 大韓基督教納邑教会は集落のほぼ中央に位置し、現在信徒数は110名程度であるが、その内60名は集落外部の信徒である。常駐の牧師の話では、小学生の段階から子供達を教会行事に招いて布教に努めているが、その親は、チェサなど祖先祭祀儀礼を息子に継がせる必要があるため、教会への入信は認めようとしなないという。洗礼を受けた入信者には、人生に対する目的を見失い入信によりそれを見いだそうとした者や、子供が重病で神に救いを求めた者、あるいは、集落外から転入し、知り合いも少なく人との繋がりを求めた者などが居るが、集落内で生まれた男性で洗礼まで進んだ者は少ないという。基督教に対する集落住民の理解を求めため、教会では様々な社会的活動を行っている。学校行事に積極的に参加し、また基督教信徒である医者をして、無料で健康診断や歯科治療を行ってもらったりしている。

註6 大韓仏教曹溪宗の寺であり信者は、集落外部の者も含めて約100名である。建立の年度は不明である。本堂の大雄殿には釈迦牟尼の仏像が二座祀られているが、この他に山神壇、七星壇、獨聖壇、神衆壇、上壇、中壇の画も祀られ、また庫裡の台所には竈王壇の画も祀られている。住職は女性の尼寺であり、現在23歳の女性が、この寺で尼僧となるための修行を行っている。月印寺における仏教行事は以下のものがあげられる(すべて陰暦)。

1月15日 小正月の祭り

2月15日 釈迦入滅忌

3月14日 山神祈禱

4月8日 釈迦生誕忌

7月7日 七星祈禱

(北斗七星を祀る儀礼であり、巫式、仏教式、儒式それぞれで行われる。

水を撒いて清められた祭場に、七日間物忌みの生活を行った祭官が、七つの器に供物を供え七星を祀る)

7月15日 百中祈禱

(納邑では、蜜柑栽培の他、牧場における牛馬飼育も盛んである。百中は牛馬の安寧を祈る祈願祭であり、かつては牛馬の水場が近く、墓などが無い場所に、牛馬の手綱を供え、果物、野菜、甘酒、芹などを捧げて祈願を行った。月印寺では、この日に信者の家の死者供養を行う)

10月15日 出家忌

12月8日 還俗

12月22日 冬至

前述のごとく、月印寺には修行中の女性が一名居る。彼女は済州市の出身で、兄1名、姉3名の5人兄弟の末子である。小学校5年生から5年間程この寺で生活した経験の有しており、その後3年間の済州市における両親との同居、2年間のソウルでの生活を経た後、尼僧になるために生活に入っている。入信動機は、済州における家庭内の女性労働のきつさや社会的立場の低さに疑問を感じ、結婚すると否応なくそうした立場に組み込まれるのが耐えられなかったためと語る。

註7 集落の外れに円形の貯水池があるが、その近くに青龍寺は位置する。大韓仏教龍華宗の寺であり、弥勒像を本尊とし、現在、納邑では20家族が信徒となっている。1969年に成立した比較的新しい寺院である。現住職の父親は本来、カソリックの信者であったが、ある時、その夢に仏様が現れ、それ以来、依頼者の血脈を見て、その病の原因や、前世の行いを知ることができる様になった。また、ゼンソクであったその妻の夢にも仏様が現れ、その手から蓮の実を受けとって飲み込んで目覚めたところ、病が治り、他にも神秘的な体験を幾つか経て仏教に帰依したという。父親は、患者の患部に手を当ててその痛みを止めたり、あるいは針を足に打って呪文を唱えて治療を行う事ができ、これを寺の信徒に施していた。現住職は、そのような霊的な能力は持っていないが、鍼灸の技術を学び、信徒に施し、それを布教の手段としている。

註8 この事例では遺族に何らかの問題が生じその解決手段として死婚を行ったか、死婚の後に養子を迎えたか、儀礼過程における洗祭へのムーダンが関与したか、などの点については確認できなかった。

済州道の口承説話に関する予備的考察

鈴木 寛之

1. はじめに

筆者は、今回の日韓共同調査では「口碑文学」担当という形で、済州道内三箇所（南済州郡安徳面徳修里、北済州郡牛島面、北済州郡涯月邑納邑里）の口承説話について聞き取り調査を行なった。いずれも通訳を介しての聞き取りであり、本稿で紹介している「話例」はいずれも個々の話の梗概となっている点を先に記しておく。

2. 徳修里のトッチェビ

1998年度の南済州郡安徳面徳修里での調査では、地域に伝わる伝説として「広静堂と馬の墓」「山房山の話」「山房窟寺の薬水」「龍の頭」「子守唄の丘」などに関する話例の資料を得ることができた。徳修里の口承説話として特に興味を覚えたものは、家ごとに祀られる守護神がトッチェビとも称されている点であった。

韓国の代表的な「妖怪」として知られるトッケビは、済州島ではトッチェビと呼ばれている。金宗大『韓国のトッケビ研究』によれば、一般に韓国説話のなかのトッケビは、剽軽な性質で、いたづらを好み、人の及ばない非常な能力をもつ超自然的存在として描かれることが多い。また、韓国の「半島」部においては、トッケビが豊漁祈願・疾病退治の機能神として祀られる例も多いとある。

徳修里のトッチェビは、吉事も凶事も司る神秘的な存在で、時には人を死に至らしめることもある。特に女性に対していたづらを働くことが多いともいう。また正体不明の火は一般にトッチェビの仕業とされる。一説には、生きているトッチェビが人型で出現し、死んだトッチェビが火だけを見せるのだともいう。またトッチェビは箒にやどるとされ、古い箒を棄てる時には出来るだけ家の遠くに棄てるものとされる。

徳修里は済州島内で、もともと鍛冶業の集落として知られていた。その鍛冶業の職能神

が、近隣の地域からトッチェビという名で呼ばれていたのである。本稿では、この徳修里におけるトッチェビについて報告を行ないたい。

かつて徳修里では、餅などを蒸すシル（甑）の上に石を載せたものを神体とする、家の神を祀っていた。これは台所の隅や屋敷地の後方の角などに祀られていたものだが、多くは1948年の四・三事件後に姿を消したといわれる（一説には1960年代頃、宋氏の「門中会議」によって祭祀の中止が決議されたともいう）。

この神は、トゥイタルバン（後ろのお爺さん）と呼ばれるが、別称として、徳修里で鍛冶業を始めた宋氏に因んでソンヨンガム（宋令監）、またヨンガムシン（令監神）の名もある。鍛冶業をしていた家、また、宋氏の家では必ず祀っていたという。また以下の話例に示すように、ソントッチェビ（宋トッチェビ）という呼び名もあった。

かつて近隣の地域から、徳修里は「トッチェビを祀る村」だと認識されており、徳修里の女性が結婚して他所へ嫁ぐと、その家のトッチェビもその女性と一緒に付いて行くのだと言われ、徳修里の女性とはあまり結婚したくない、と噂されたこともあったという。以下は、現在徳修里に住んでおられる方々からの聞き取り内容である。

[話例1]

トッチェビ神は、昔、家の裏に置いて祀ったもの。年に一度餅や酒を供える祭祀をしたが、詳細は記憶していない。徳修里は鍛冶の村で大型の窯があったので、電気のない昔は、夜にふいごの火がつくと、それが近隣の村々からも点々と大きく見えた。それが何日も続くのが常だったので、近隣の人々は、「徳修里のあの火は、人間がつくった火ではない。トッチェビの仕業だ。トッチェビ・プル（火）だ」と噂したものである。この辺りでは、正体不明の怪光をトッチェビの仕業と考えるのが一般的である。

(1931年生、男性)

[話例2]

自分の家にはなかったが、徳修里にはトゥイタルバンを祀る家は多かった。特に鍛冶の神というわけではなく家の神である。旧暦の毎月5日や、先祖の法事の際などに、酒と食物をシルの穴に注いで供えた。自分には9人の子供がいる。最近、末娘が嫁いで行ったが、結婚前、新郎の母親が「この家にはトッチェビがいるのではないか？」と様子を見に来たことがあった。癩に触ったので、「うちには十のトチェビがいたのだが、まだ二つ残っている。一つ2,000万ウォンで買ってくれないか」とうそぶいてやった。

35年ほど前、徳修里でトゥイタルバンを祀っていたある人が、祭祀を続けるのを好まず

にシルを潰したところ、間もなく彼の次男が急死したことがあった。

自分自身、内心では、この家にもトッチェビがいるのではないか、と思ってもいるが、言わない。トッチェビについて口にするのは一種のタブーだと考えている。

(1922年生、男性)

[話例3]

トゥイタルバンは、ソントッチェビとも呼んだ。自分が30代の頃には、台所の隅にシルを祀っていたが、そのシルを崩して、もう30年ぐらいになる。家の守護神みたいなもので、吉事も凶事もこの神のお陰だと言われていたが、今では信じていない。「徳修里の女性にトッチェビが付いていく」というのも、迷信にすぎない。

トッチェビ・プル(怪火)の話は、父からも聞いたし、実際自分も山房山の周囲で見たことがある。これは気が弱い人がよく見るもので、見ると病気になると言われた。

(1926年生、女性)

[話例4]

家で祀る神のことを、家内ではヨンガム、チルソンなどと呼んだ。シルの上に藁を帽子のように被せたものを神体としていた。家に起こる吉事も凶事もこのチルソンのおかげだと言われた。今でも、何軒かは祀っている家もあると思うが、見せて欲しいと頼んでも、容易には見せてくれないだろう。20年程前、酒に酔って自家のシルに火を点けた人がいたが、ひと月後に亡くなってしまった事があった。

トッチェビ・プルは気の弱い人が見ると、魅入られてその後を付いて行ってしまう。この火は火薬の匂いを嫌うと聞く。

(1925年生、男性)

トッチェビ神にまつわる婚姻忌避に関して、『韓国の民俗大系』第5巻87頁には以下のような記述がある。

「昔は、兎山鬼神(蛇神)が娘から娘へと受け継がれるのだといって、結婚相手としては嫌われた。ところが、今ではトチェビ鬼神をもっと恐れている。手厚く祀れば繁盛するけれども、そうでないと滅亡したり、恐ろしいことが起こる。少しでも良いことがあれば、トチェビ鬼神を祀ったからだといわれるけれども、結婚相手もトチェビを祀る家系は敬遠される。トチェビ鬼神、クスル婆さんなど、それぞれの家によって大切に祀っている鬼神がある。これは、その家で行われる祭りの時に見ればわかる。また、部落内ではたがいに

よく知っていることである。

トチェビはプルミ鬼神すなわちふいごの神で鍛冶屋神だという人もいるけれども、プルムを最初に使った人はカルメ婆さんとカルメ爺さんである。そこで、自動車屋、精米所、プルミカン（鍛冶屋）は同じく、カルメ婆さんとカルメ爺さんを祀っている（話者：旧左面細花里、男巫。）

以上みてきたように、濟州道における口承説話のうえでは、トツチェビは「家の盛衰」を司る超自然的存在と観念されている一面がある。濟州道内において、こうした「家の盛衰」観念をどのような形で他の説話一般のなかから読み取れるのか、今後の課題として追究してゆきたい。

3. 牛島の口承説話

北濟州郡牛島面の口承説話を収載した文献として、管見の範囲では以下の三点が量的にまとまったものであり、いずれも比較的近年の刊行のものである。

まずは、1987年に刊行された『演坪郷土誌』が挙げられる。この本には「遺跡と伝説」の項目に〈遺跡〉2話、〈地形、地名に関する伝説〉14話、〈村落の名称について〉8話、それに加えて〈説話〉が掲載されている。この〈説話〉の項には「牛島と演坪という名称の由来」「島の開拓者・金進士」「釜山の長」「鮑のお婆さん」などがある。

第二に、1990年刊行の『濟州島部落誌(Ⅲ)』の「説話」の項目立てをみると、「牛島の島名由来」「人物に関する伝説」「部落名に関する伝説」「地形・地名に関する伝説」「飲料水に関する話」となっている。

第三に、1996年に刊行された大冊の『牛島誌』においては「第8篇：口頭伝承」の項が設けられており、この項は第一章「口碑伝承」、第二章「地名由来」から構成されている。この第一章はさらに細かく「伝説」「民謡」「俗談」「俗信談」に分類されている。

以上の三文献の項目立てをみると、牛島における口承説話の主要なものは「伝説」、それも主として島内の地名由来に関するものであり、それに加えて、島の開発に功績を残した先人の話、離島の生活における飲料水の確保に関する話、用水や溜め池の話が多い。

以下、1999年度の牛島での現地調査で得た話例を紹介する。

[話例1] 倭人墓

海岸を見下ろす丘上にある。昔（「植民地時代」以前）、海から日本人の遺体があがったのを牛島の人たちが合葬した墓所だと伝えられている。「昔、牛島に攻め入って死んだ日本

人の死体を埋めた墓」と説く人もあれば、「日本の商船が難破してその遺体を埋めた場所」とする人もあり、伝承の内容は一定しない。

〔話例2〕トッチェビ

島内にトッチェビが出現する場所は多々ある。「トッチェビの丘」という場所の近くを豚肉を持って歩くと、トッチェビが付いてくる。大きな人の姿、または女性、子供の場合もあり形状は不定。トッチェビにたぶらかされて夜間に山中をさまよひ、死体となって発見された人もある。

曇りや雨の日に見える原因不明の怪火もトッチェビの仕業である。古木などで青い光を放つ。埋葬した人骨から出る燐光が正体とも言われる。二人で歩いている、気が弱い人だけに見える、また病気の人にも見えるという。風で多くの漂着死体が打ち上げられた海岸ではトッチェビの火がよく見られる。

(1934年生、男性)

〔話例3〕下牛目洞の孫さんの話

下牛目洞に住んでいた穀物商の孫さんが、米を仕入れに全羅南道の康津に出掛けた。その土地で知り合った女性の父親が孫さんを気に入って、牛島に、娘と一緒に連れて戻って欲しい、そうしたら帆船に一杯の米をあげようと約束をした。娘は一緒に行くことになったが、乗船の際、まず孫さんが先に船に乗って、次に娘が乗ろうとしたら、船内に渡る足掛かりの板を孫さんが取り外してしまった。娘は悲しみのあまり海に身を投げた。やがて孫さんの乗った船は無事に牛島まで帰着したが、みると船と一緒に娘の遺体も着いて来ていた。孫さんは、驚いて密かに遺体を引き上げて埋め、法事も行なったが、後に家運も傾いてしまい、子孫は今は牛島には残っていない。

(1927年生、男性)

4. 納邑里のヤン・サンウ氏の語り

2000年度の北済州郡涯月邑納邑里調査では、話者をヤン・サンウ氏（1922年生、男性）一名に絞って口承説話の聞き取り調査を行なった。氏は、同じく納邑出身の奥さんと二人暮らし、子供は7人いる。「学校には行っていない」のだが、近所の人たちからも「記憶力がいい」と評判が高く、「正式に教育を受けたら文章家になれる」と言われている程である。

氏の話の語り方にはいくつかの特徴がある。話を語り出す前には、必ず煙草を一服して間をもたせたり、物語のクライマックス部分でわざと話を止め、再度間をおき、煙草を一服して聞き手の気をもたせるのである。

氏の伝承する話の多くは、風水にまつわる話や、儒教思想を説く教訓的な話が多いが、総じてその語り口調がきめ細かく、語りの途中で休憩をはさんで、約1時間程に渡る話もあった。

今回の調査では、のべ4日間で、約20話の資料を得た。以下に内容を例示してみる。

〔話例1〕 どちらの子供か

子供がいないことだけが悩みの、ある財産家があった。その隣家には子供がたくさんいた。財産家は隣家の主人に、自分の妻に子種を分けてくれと頼み、妻にも言い含めて、一夜、二人を一緒に過ごさせた。間もなく妻は妊娠、男の子が産まれた。夫は最初は喜んだが、本当の自分の子供ではないので、複雑な思いだった。それでも、近隣もうらやむような立派な息子に育てた。それをみて隣家に住んでいる、息子の「本当の父親」は欲が出て、「息子を自分のもとに戻してくれ」と申し出たため、財産家は、悩んで病気になってしまった。息子はこの時、母親から自身の出生の経緯について初めて知らされた。隣家の主人は、自分の頼みがなかなか聞き入れてもらえないので、官家に告訴に出た。官家では事情を聞くために息子呼び出した。約束の日、息子はわざと定刻に遅れてやって来た。そして、遅刻の理由を問われた際に、以下のように答えた。「自分がここまで歩いて来る途中に喧嘩があって、その様子を見ていて遅刻をしてしまいました。ある人が作物の種を畑にたくさん蒔いたのですが、そのうちのひと粒が隣の畑に落ちてしまい、生長した作物がどちらの所有になるかで争っていたのです。」その話を聞いた官家長が「それは実際に育てた人のものだろう」と言うと、「自分もその作物と一緒に、私を今まで育ててくれた現在の両親の息子です」と述べた。

〔話例2〕 米人は韓国人の外孫

昔、国が豊かだった頃、国内に盗賊がはびこったことがあった。国王が、盗賊を捕まえた者には自分の娘を嫁にやる、と告知したが、なかなか捕まえられる者がいなかった。ところがある日、一匹の犬が盗賊の首をくわえてやって来た。獐猛な犬で、恐くて誰も側に近付けず、餌を与えれば帰るかと思ったが、それもない。仕方なく、王が娘に事情を話すと「国のために、私はこの犬に嫁ぎます」と答え、共に出ていった。何年かの後、この娘が「犬でも人間でもないような、妙な人間たち」と一緒にやって来た。そのころは米人と

という言葉がなくて、西人と呼んだ。西人は犬の子孫なので髪が黄色で目も青色である。

〔話例3〕実在した「名医」の話

実在した名医の話。昔ある女性が、退屈で茄子で遊んでいたら、女性器から取れなくなってしまい、困ってこの名医の所にやって来た。医者は、この女性が家の玄関の前にやって来た姿を見ただけで、なぜ来訪したのかがすぐに判り、家の中から「そこにある大きな岩を抱えてこちらへ運びなさい」と命じた。女性が大きな岩を抱えるため足をふんばって力んだ途端、茄子はぶじ外に落ちて出て来た。

これらの話は、氏が幼少の頃に、祭祀の夜、深夜 12 時を過ぎて眠くなった時に、当時 70 才ぐらいだった祖父から眠気ざましに聞いたものが多いという。話上手だった祖父が語ってくれた内容を、氏は記憶力がよいので「一度聞いただけで忘れない」でいるのだという。ただ、今回の聞き取り調査までにこうした話を外部者に語る機会は「ほとんどなかった」とのこと。氏の表現を借りれば、幼少の頃に聞き覚えた話だが、「今までイヤギ・ポツタリ（話し袋）を使ったことは一度もなかった。自分が死んで、そのまま一緒に持っていけると思っていた」ということになる。

以下に、話が一段落する箇所や、物語のヤマ場で休憩する時に氏がよく用いる口癖を挙げてみる。

- ・「(調査者が顔を見せると) もう来ないで」
- ・「話の辻褄が合わないと、文章にならないよ」
- ・「(話の間をもたせて) 全部話してしまうと面白くないのになあ……」
- ・「(同上) イヤギ・ポツタリ (話し袋) は、全部開けてしまうと面白くないのになあ……」
- ・「(調査者が話の続きを早く聞いたような様子を見せると) 疲れるじゃないですか。さっさと話してしまったらおもしろくないよ」
- ・「(話を途中で止め、煙草を一服しながら) 話の充電をするのは、結構時間がかかるよ」
- ・「話は、長いのも短いのもあるのが、面白さ」
- ・「(独り言のように) [自分は] 教育不足なんだけど、話はよく話せるよなあ」
- ・「(話の登場人物が寝るとき) ……〇〇が寝た。私もちょっと休もう (と言って煙草を一服する)」

- ・「ちょっと休んでから話した方が、もっと面白いよ」
- ・「私の話す内容って、もっともでしょう？」

5. おわりに

今回の調査報告では、3年度にわたる聞き取り調査内容の概略のみを記した。これらの資料をもとに済州道口承説話の現状についての追究を今後の課題としたい。また、納邑里のヤン・サンウ氏の語りからは、口承説話を伝承する際の場の問題についても、さらに調査を継続したいと考える次第である。

参考・引用文献

- 牛島誌編輯委員会編 1996 『牛島誌』 牛島誌編纂委員会（韓国語）
- 金 宗大 1994 『韓国のトッケビ研究』 国学資料院（韓国語）
- 玄容駿 著・朴健市 訳 1978 『＜アジアの民話 2＞ 済州島の民話』
大日本絵画巧芸美術
- 済州大学校耽羅文化研究所編 1990 『＜耽羅文化叢書＞ 済州島部落誌（Ⅲ）』
済州大学校耽羅文化研究所（韓国語）
- 竹田且・任東権 訳 1992 『韓国の民俗大系 一韓国民俗総合調査報告書一』 5
＜済州道篇＞ 国書刊行会（原本：韓国文化公報部文化財管理局発行）
- パク・キョンシク 編 1987 『演坪郷土誌』 演坪国民学校（韓国語）

付 記

済州道での聞き取り調査においては、左恵景先生（済州大学校博物館特別研究員，同大学校非常勤講師）、また通訳として済州大学校の梁宰赫さん、玄宥才さんに大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

제주도에서 본 琉球의 고고학

李 淸 圭

1. 머리말

큐우(琉球)열도와 제주도는 한반도·중국·일본으로 둘러싸인 東中國海上에 있는 섬으로서 각각 한반도와 일본열도라는 본토의 주변도서인 점에서 상호 비교될만하다.

금번 양 지역을 대상으로 한 한일 합동조사연구팀은 이러한 데 초점을 맞추어 구성된 것으로 일본측의 津波高志교수와 한국측의 全京秀교수의 주도 아래 인류학, 민속학, 지리학, 역사학, 고고학 등의 여러 분야의 연구진이 참여하게 되었다. 필자는 고고학분야의 일원으로서 조사1차연도인 1998년에 오키나와(沖繩) 본섬을 중심으로 류우큐우 고고학의 연구현황을 살핀 바 있으며, 이를 토대로 이 글이 작성된 것이다.

오키나와에서의 고고학조사는 1904년에 鳥居龍藏가 石川市 伊波岬총과 石垣島 川平岬총에서 시굴조사를 한 것이 그 처음이다. 그로부터 반세기 지난 1950년대부터 多和田眞淳을 비롯한 류우큐우 현지학자들에 의해 자체조사가 이루어지고 琉球列島の 선사문화편년안이 제시되기 시작하였다.(當眞嗣一 1975·池田榮史 1995)

일본의 류우큐우열도에 비견되는 한국의 제주도에서의 본격적인 고고학조사는 1959년 당시 제주도종합학술조사팀의 일원으로 金哲竣이 來島하여 제주시 龍潭洞 일대의 지식묘조사를 하면서부터이다. 제주도 현지학자에 의해 본격적인 발굴조사가 이루어진 것은 1970년대 후반 내지 1980년대 전반에 와서이다. 그리고 제주도 선사시대의 편년안에 대해서는 1973년에 鄭永和가 처음 제시하였으며, 1980년대 후반에 들어와 李清圭에 의해 보완되어 오늘에 이른다. 이렇게 보면 琉球의 고고학은 제주도에 비해 반세기 이상 앞서 있는 바, 같은 동중국해에 있는 섬지방으로서 琉球 고고학의 연구성과는 제주도 연구에 시사하는 바가 많을 것으로 기대된다.

무엇보다도 류우큐우열도, 제주도 양 지역이 본토와 일정 거리 이상 떨어진 도서지방이기 때문에 본토와의 문화 교류가 제대로 이루어지지 않아, 通時的인 문화변천과정이 본토와 차이가 있다는 점에서 공통된다는 사실이 주목된다. 제주도 선

사·고대문화의 편년체계를 무리하게 한반도에 맞추려고 하면 오히려 제주도 문화의 변천과정을 제대로 이해하는데 장애가 된다는 것이 필자의 생각이다. 지리적 여건과 島嶼性을 보아 琉球도 일본 본토와 차이가 지는 것이 당연할 것인 바, 그러한 점에서 琉球 고고학 연구자들의 편년체계를 우선 살펴보고자 한다.

아울러서 두 섬지방을 비교함에 먼저 알아두어야 할 것은 지리적 위치와 환경이 서로 다르다는 점이다. 무엇보다 류우큐우는 1000km 넘는 길이로 이어지는 열도로 구성되어 있는 점에서 제주도와 차이가 난다. 그리하여 거의 단일문화권을 형성하고 있는 제주도와 달리 류우큐우는 자체내 세분된 문화권을 가질 수 밖에 없으며, 이 점 또한 양 지역을 직접 비교하기 전에 살펴 볼 문제이다.

도서지방의 문화는 두말할 것도 없이 독자적으로 자체적으로만 발전을 하는 것이 아니고 외부와의 교류 속에서 변화한다. 따라서 외부와의 교류 양상을 검토해야만 동 지역의 문화를 共時的이고도 通時的으로, 그리고 안과 밖의 균형잡힌 시각에서 제대로 이해할 수 있을 것이다.

琉球의 주변에는 거리상으로 보아, 일본열도, 다음 중국대륙 그리고 한반도 순으로 자리잡고 있으며, 대체로 주변과의 교류의 빈도 또한 이 순서대로일 것이다. 또한 동 순서가 류우큐우와의 본격적인 교류를 하는 시간적 순서라고도 생각되며, 실제로 류우큐우고고학 연구자들의 조사와 연구성과도 그에서 크게 벗어나지 않는다. 고고학적 측면에서는 교류의 방식은 그 대상이 된 물질적 자료를 통하여 접근할 수 밖에 없는데, 본고에서는 각 대상지역별로 그중에서 대표적인 것 몇 예를 들어 검토하고자 한다.

2. 류우큐우열도의 문화권 구분(그림1)

류우큐우열도(琉球列島)로 알려져 있는 섬들은 대략 200여개로 일본 큐우슈우가고시마현의 남쪽에서 타이완의 동쪽 사이 대략 1200km의 거리에 자리하고 있다. 이 류우큐우열도에 대해서는 오키나와(沖繩), 南島, 南西諸島, 琉球弧 등의 다른 이름으로도 불리기도 하는데, 구체적으로 따지면 이들 지명은 각각 가리키는 공간적 범위가 조금씩 다르다.

우선 琉球列島에 대해서는 大隅諸島·토카라열도·奄美諸島로 구성되는 薩南諸島와 그리고 沖繩諸島·先島諸島로 구성되는 琉球諸島를 포함하는 것으로 정의되어 있는 바,(目崎茂和 1983) 先島諸島는 다시 宮古諸島와 八重山諸島로 구성되어 있다. 역사적으로 볼 때 류우큐우는 원래 琉球왕국의 최대판도였던 영역, 즉 북쪽으로는 도카라열도, 남쪽으로는 先島諸島까지를 가리키는 것이므로 앞서의 사전적 정의와

다소 차이가 난다.

류우큐우왕국의 영역은 1609년 島津의 침공후 사츠마번(薩摩藩)에 아마미제도(奄美諸島) 이북이 넘겨지면서 그 영역이 축소되는데, 일반적으로 류우큐우라고 하면 아마미제도부터 八重山제도까지를 포함한 지역으로 이해되고 있다. 그렇게 되면 앞서 규정된 류우큐우열도의 지리적 개념과 달리 북쪽으로는 大隅諸島, 토가라열도가 제외된다 하겠다. 安里進은 이러한 지리적 범위가 단순한 류구왕국의 정치영역이 아니고 동일한 언어·민속권을 형성하고, 일본본토와 구별되는 문화권이라고 주장한다.(安里進 1990)

한편 琉球에 비견되는 것으로 南島라는 명칭이 있는데, 원래 이는 일본 나라시대에 울령국가 영역 바깥에서 조공을 바치던 족속 중 북쪽의 蝦夷의 지역에 대조되는 족속의 지역 개념이다. '續日本記'의 기록을 보면 문무천황 698년조에 '南嶼'가 나오는데, 다음해 기록에 種子島, 屋久島, 奄美大島 등을 가리키는 것으로 되어 있다. 이에 따르면 南嶼 혹은 南島에 오키나와(沖繩)와 先島諸島가 포함되지 않았는데, 시대가 내려오면서 일본 본토사람들이 이 지역에 대한 정보를 더 많이 갖게 되면서 이를 포함하는 지리적 용어로 탈바꿈된다.

그러다가 南島는 種子島·屋久島에 茶爾國이 설치된 이후로는 아마미제도 이남만을 가리키게 되는데, 남쪽으로 先島諸島가 포함되는지는 여부가 확실하지 않다. 이처럼 南島라는 말이 역사적으로는 류우큐우열도의 일부를 가리키는 개념이지만, 그 전체를 가리키는 것으로 왕왕이 사용되기도 하며 특히 고고학에서 그러한 바, 주의가 되는 용어개념이다.

南島라는 말 말고도 현재 일본에서는 南西諸島라는 명칭이 보다 많이 사용되는데, 이는 가장 북쪽의 大隅諸島 부터 남서쪽의 尖閣列島·先島諸島에서 동쪽으로는 오키나와 본섬에서 500여km 이상 떨어져 있는 大東諸島를 포괄한 개념의 용어이다. 따라서 류우큐우열도에 大東諸島, 센가쿠제도를 덧붙인 지리용어라 할 수 있겠다. 이 명칭은 明治연간에 1887년에 일본 수로국에서 명명한 관제지명으로서 지리학용어로는 적당한 것은 아니라고 하지만,(木下尙子 1996) 고고학 학술지에서 매년 일본 전역의 고고학의 연구성과를 살피는데 이 명칭을 사용하고 있는 실정이다.

류우큐우열도는 앞서 보듯이 남북으로 1200km 넘는 길이로 길게 분포하므로, 같은 열도에 있더라도 남쪽과 북쪽간에 기후를 비롯한 자연환경은 물론 주변지역과의 관계적 지리환경에 차이가 있다.(池田榮史1995) 지리학적으로는 바다길이 험난한 토가라 해협과 그 길이가 300km가 넘는 미야코 窩地 해저지형으로써 류우큐우열도가 2분되어, 北琉球·中琉球·南琉球로 구분된다.(藤岡謙二郎 1985) 北琉球는 種子島, 屋久島와 그 주변의 섬, 中琉球는 奄美大島·오키나와 본섬과 그 주변의 섬, 南琉球

는 미야코(宮古)· 이시가와섬과 그 주변의 섬으로 구성된다. 기후적으로 보면 북류우큐우는 온대, 중·남류우큐우는 아열대에 속한다.

이러한 지리학적인 지역구분에 대응하여 國分直一은 고고학적인 관점에서 류우큐우열도를 북부권, 중부권, 남부권으로 구분하고 있다. 즉 북부권은 일본 죠몬·야요이문화의 영향을 받는 큐우슈우문화권에 속하며, 중부권은 큐우슈우의 영향을 받으면서도 독자적인 문화를 형성한 지역이고, 남부권은 필리핀 대만의 영향을 받는 지역이다. 바꾸어 말하면 3개의 문화권 별로 중세이전에 주변지역으로부터 받는 문화적 영향이나 교류양상이 다르다는 것이다.(國分直一 1966)

그런데 琉球왕국이 성립되기 이전의 이른바 原琉球시대에 보면 북부와 중부는 일본 큐우슈우의 죠몬과 야요이문화의 영향을 받지만, 남부의 사키시마제도(先島諸島)는 그렇지 않은 점을 볼 때, 남부권은 그 이북의 중부, 북부권과 구분된다 하겠다. 상대적으로 다음 류우큐우 왕국시대에 와서는 남부와 중부는 동일한 문화권에 편입되고, 북부권은 제외된다. 그리고 사츠마번(薩摩藩) 침공 이후에는 북부와 중부의 아마미 섬은 사츠마의 관할에 속하는 바, 같은 중부권에 속하는 아마미와 오키나와는 구분되는 변화를 겪게 되는 것이다.(安里進1990)

3. 琉球考古學의 시대구분 (표1)

류우큐우 고고학 편년의 첫번째 제안자는 多和田眞淳으로서, 그는 오키나와 각지를 답사하여 수집한 자료를 토대로 하여 1956년 류우큐우열도의 선사시대를 패총시대라 규정하고, 前·中·後·晩期の 4기로 구분하였다.(多和田眞淳 1956) 그 당시로서는 가장 이른 전기는 나하시(那覇市) 城岳패총에서 출토한 明刀錢을 근거로 죠몬시대 말기로 보았으며, 만기에 대해서는 중국 宋代의 수입도자기로써 일본 본토의 헤이안 이후의 시기에 병행하는 것으로 보았다. 이 편년의 지리적 범위는 琉球는 중부권과 남부권을 포함한 것이지만, 나중에는 남부권이 편년의 대상지역에서 제외되고, 만기가 이른바 쿠스쿠(クスク;城)시대라 대체되었다.

1978년에 高宮廣衛는 多和田眞淳의 편년과 일본본토의 편년관을 대비하여 이른바 잠정편년안을 발표하고(高宮廣衛 1978), 그후 3차에 걸쳐 수정을 하여 오늘에 이르게 되었다. 그의 초기 편년안은 전기·중기·후기의 삼시기 구분체제였으나, 東原패총에서 일본 죠몬 전기와 초창기의 토기가 확인된 것을 계기로, 그에 상응하는 초기를 추가하여 4시기구분으로 변경한 것이다. 그후 두차례 수정을 거듭하여 만들어진 1984년의 편년안은 죠몬시대를 전기, 야요이시대 이후의 시기를 후기로 대별하고, 전기를 5기, 후기를 4기로 세분한 것인바,(高宮廣衛 1984) 기본적으로 그의 편

년관은 일본본토의 조몬·야요이문화와의 관계 속에서 짜여진 것이다.

이에 대해서 安里進은 오키나와 선사문화가 외부로부터 영향을 받기 쉬운 토기문화를 기준으로 할 경우 일본본토와의 同質性이 강화되지만, 자연환경과 밀접하게 관련된 생업경제를 각각 고려한다면, 또한 異質性이 강조될 수 밖에 없다고 주장한다.(安里進 1990) 따라서 高宮廣衛와 달리 異質性을 강조하여 오키나와 독자적인 편년안을 설정할 수 있다고 주장하였는데, 실제로 그에 부응하는 편년체계는 아직 제시되지 않고 있다.

白木原和美도 일본 본토중에서도 關東 지방 중심의 편년체계를 琉球에 막바로 준용시키는 것은 문제가 있다 하여, 독자적인 6기의 시대구분안을 발표하였다.(白木原和美 1992) 그의 편년안을 살펴보면 1기는 큐우슈우의 토기문화의 남하로 류우큐우의 토기문화의 기초가 열리는 시대로서 조몬시대 초창기에서 조, 전기에 상응한다고 한다. 2기는 琉球 독자의 토기문화가 형성되는 시대로 조몬 전기말에서 중기에 상응하고, 3기는 琉球 토기문화가 본격적으로 전개되는 시대로 조몬시대 후기라고 한다. 4기는 문화의 내용이 급속히 변화 발전하는 시대로 조몬시대 만기에서 야요이시대에 걸치는 시대, 그리고 5기는 야요이시대 말에서 고분시대초부터 헤이안시대 초에 걸치는 시기, 끝으로 6기는 왕조를 형성하며 경제적 문화적으로 도약하는 시대로서 류우큐우문화의 완성기로 규정하고 있다. 그러나 이러한 그의 시대구분론도 따지고 보면 앞서 高宮廣衛의 편년안과 크게 차이가 없는 바, 대체로 1-3기는 패총시대 전기, 4-5기는 패총시대 후기, 6기는 쿠스쿠시대에 대응된다 하겠다.

기본적으로 琉球 편년에 가장 큰 문제는 패총시대 후기가 일본 본토의 야요이시대, 고분시대, 헤이안시대의 三時代를 커버한다는 것이다. 일본 본토에서는 水田농경과 급속문화가 야요이시대에 도입되고, 고분시대에는 대형 고분들이 축조되고, 陶器·철기문화가 크게 발달하며, 나라시대를 거쳐 헤이안시대에 이르면 명실공히 고대, 중세국가로 크게 발전하는 1천년 넘는 기간에 琉球에서는 수전농경, 철기·도기문화, 고분문화의 진전이 거의 없다는 것이다. 상대적으로 수렵채집문화가 상당히 지속되는 경향을 보이고, 석기·토기문화가 바뀌어지지 않으며, 대형 고분이 전혀 축조되지 않는다는 사실이다.

이러한 점은 제주도의 경우와 비교될 수 있다. 제주도는 대체로 기원전후한 시기부터 고려의 일개 郡으로 전락되는 12세기경까지 耽羅라는 독립적인 정치집단을 유지하고 있어, 탐라시대라고 일컬을 수 있다. 그시대에 제주도에서도 陶器가 생산되지 않고, 벼농사의 증거도 확실하지 않으며, 철기 생산도 제대로 이루어지지 않을 뿐만 아니라, 한반도에 유행한 대형고분도 축조되지 않는 것이 琉球의 패총시대 후기와 비슷한 것이다.

한편 琉球의 선사시대 혹은 패총시대의 종말은 이른바 쿠스쿠(クスク)시대의 개시와 맞물리는 것이 특징적이다. 쿠스쿠라 함은 류우큐우의 독특한 城塞的 유적으로 대체로 오키나와 각지에 할거하는 아지(安司)라고 불리는 領主的 인물의 居城으로 알려지고 있는데, 일부 쿠스쿠 중에는 제사를 지내는 성역으로서의 기능을 하였다고 보는 견해도 있다. 이러한 쿠스쿠로 표상되는 정치적 시대를 쿠스쿠시대로 규정하고 있는데, 이시대에 류우큐우를 중심으로 아마미제도는 물론 사키시마제도가 동일한 문화권을 이루면서 류우큐우문화권이 처음으로 성립되게 된다.

쿠스쿠시대의 고고학적 증거로서, 첫째 다량의 탄화미나 보리와 철제 수확도구 낫 등의 농경관계유물, 둘째는 壺·甕을 주요 기종으로 하는 농경적인 廣底土器의 출현, 셋째는 류스에키(類須惠器)라고 하는 陶器요업생산의 개시, 넷째는 도기·돌솥(石鍋)·중국 도자기 등의 교역과 유통의 발달 등이 제시되고 있다. 이러한 쿠스쿠시대의 개시가 최근까지는 대체로 12세기경을 전후로 하여 이루어지는 것으로 이해되고 있어 왔다. 그러나 安里進은 廣底土器와 石鍋, 류스에키(類須惠器), 그리고 탄화미 출토가 10세기 전후하여 이루어지고, 상대적으로 쿠스쿠는 13세기를 거슬러 올라가지 않는 것으로 추정된다고 하여, 쿠스쿠시대는 다시 10세기 전후하여 경제적 발전기, 13세기경으로 정치적 전개기의 2단계로 구분하여야 한다고 주장한다.

쿠스쿠시대의 종말에 대해서도 논란이 있다. 대체로 광저형토기를 이 시대의 표지로 삼고 종말 기준을 삼아 왔는데, 安里進은 이 시대는 본격적인 역사시대인만큼 문헌적 사실에 근거해야 한다고 주장하고, 그래서 그는 1429년경의 三山統一을 그 기준으로 하자고 주장한다. 쿠스쿠시대 후기에 山北·中山·山南의 지역권을 중심으로 3대세력이 경쟁하는 三山分立時代가 도래하고, 1429년에 삼산세력이 통일되는데, 그러면서 발전된 관료조직을 갖춘 류우큐우왕국이 형성되는 것이다. 제주도에서는 관료조직이 뚜렷하고 왕권이 확립된 고대왕국체제를 갖추지 못하고 한반도 본토의 중앙집권국가의 지방으로 化했다는 점에서 琉球와 차이가 난다.

4. 일본과의 관계: 야요이와 고분문화

일본 본토의 야요이문화는 유물로 보면 기본적으로 야요이토기를 標識로 하며, 한반도계 마제석기·청동기·철제품 등이 보급되는 시기이다. 그러나 무엇보다도 야요이문화는 생업측면에서 벼농사로 특징지워지는바, 전단계 죠폰시대의 채집경제 단계와는 다른 집약농경의 시대가 되는 것이다.

이러한 일본 본토의 야요이문화의 토기가 琉球에서 최초의 예는 1963년에 伊江島 具志原패총에서 확인한 남큐우슈우의 야마노쿠치식(山ノ口式)토기이다. (右寄英一

郎·高宮廣衛 1968) 그리고 1966년 다카미야가 발굴조사한 糸滿市 眞榮里패총에서 큐우슈우의 이타츠키(板付)2식의 토기가 수습되었음이 오다후지오(小田富士雄)에 의해 확인되면서 琉球에서의 야요이문화는 분명한 존재처럼 되었다. 그는 이 패총에서 합린마제석부 등의 야요이계 석기가 셋트를 이루어 동반출토되므로 큐우슈우지방의 농경문화가 보급되었을 가능성이 높다고 주장하였으며,(小田富士雄 1984) 다카미야(高宮廣衛)도 동 유적의 입지와 자연환경으로 보아 水稻경작이 시행되었을 가능성이 있다고 하였다.

河口貞徳도 奄美大島の 笠利町 사우치(サウチ)유적에서 큐우슈우지방의 야요이전기말의 高橋 1·2식의 토기가 출토될 뿐만 아니라, 유적의 입지등으로 보아 아마미섬에 야요이 농경문화가 정착하였다고 보았다.(河口貞徳 1978) 1987년 발굴조사를 통해서 本部町 具志堅패총에서도 큐우슈우의 야요이토기가 상당수가 발견되고 동유적 주변에 근년까지 논이 있는 점을 근거로, 패총시대 후기에 야요이식 논이 조성되었을 가능성이 접쳐지기도 하였다.(知念勇 1991)

최근까지 야요이토기가 류우큐우 열도 중부에서 발견된 예는 40여점이 넘고, 앞서 보듯이 水稻경작을 비롯한 야요이 문화의 정착을 주장하는 학자들이 적지 않지만, 그러나 아직 논농사와 관련된 직접적인 증거는 아직 발견되지 않고 있다. 지금까지 발견된 가장 오랜 벼농사의 직접 증거는 奄美大島 住用村에서 출토한 볍씨자국이 있는 須惠器토기편으로 기원 10세기 이후 쿠스쿠시대에 속하는 것이다.

이처럼 패총시대 후기의 류우큐우문화가 한편으로 야요이 문화의 요소가 영향을 받았음에도 불구하고, 그 생업방식은 전통적인 수렵채집경제가 우세한 점과 관련하여 학자들간에 서로 상반되는 관점이 있다.

우선 일본 구주의 야요이문화요소의 유입을 중시여기고, 水田농경의 가능성이 높으므로, 이 단계의 류우큐우문화를 續彌生文化로 규정짓자는 견해이다.(高宮廣衛 1983) 또다른 관점은 비록 야요이문화 속성이 유입되었다고 하더라도 벼농사가 함께 보급되었을 가능성이 없다는 증거가 더 많다는 입장에서 동 단계의 문화를 續繩文文化라고 보는 견해이다.(安里進1992) 유적의 입지를 보면 논 입지로 부적합한 석회암지대인 경우가 많으며, 토기 기종의 구성을 보더라도 농경사회 특유의 壺形토기가 적다는 것이 지적되고 있다. 또한 패총이 많고 출토유물중 어망추 등의 어로도구가 다량 출토되는 점으로 보아, 조몬문화의 특성인 수렵채집경제의 성격이 강하다는 점을 주목하는 것이다. 사하라 마코토(佐原眞)도 이 입장에서 琉球의 同 패총후기문화를 南島續繩文文化로 규정한 바 있다.

관점이 어떻든간에 류우큐우에 야요이계문화의 유입은 어떻게 이루어진 것일까 하는 의문에 대한 적절한 해답이 요구되는데, 이에 대해서는 琉球産 조개의 팔찌장

식의 교류관계를 연구한 기노시타(木下尙子)의 주장이 주목된다. 그에 따르면 류우큐우산 조개팔찌가 일본 류우큐우지역의 야요이시대 유적에서 다량 발견되는데, 대체로 사츠마(薩摩)반도부터 류우큐우 중부사이에서 중계지가 있다고 한다. 조개자체는 류우큐우 중부 지역에서 조달되고 1차가공되지만, 제품화되는 곳은 사용지이라는 것이다. 그래서 류우큐우의 야요이 토기는 다른 야요이계유물과 함께 조개팔찌 소재와의 교환품으로서 유입된 것이라는 것이다.

그에 의하면 서북큐우슈우와 北浦의 무덤과 형식·葬法·부장품등에서 공통하는 점이 많은 讀谷村 모멘바루(木綿原)유적에서 조사된 석관묘 7기는 北浦人의 무덤이지, 琉球 주민의 것이 아니라는 것이다. 그리고 이들 北浦人이 류우큐우산 조개를 일본 본토에 수출한 장본인이라는 것인데, 이러한 맥락이라면 琉球에서의 야요이문화 요소는 큐우슈우의 야요이문화 담당자가 남긴 것이 된다.(木下尙子 1992)

고분시대 이후에도 류우큐우산 조개팔찌 등이 일본 본토는 물론 한반도 남부지방의 고분에서 부장되는 것이 확인된다. 또한 琉球 북부의 種子島 廣田 유적에서는 야요이 중기부터 후기에 걸쳐 류우큐우산 조개로 만든 貝札과 팔찌가 다량 출토된다. 이와는 상대적으로 일본본토유물은 류우큐우 중부지방 이남에서는 전단계보다도 훨씬 드물게 나오는 바, 따라서 류우큐우 중부 이남지역은 거의 조개 조달처로서의 역할에 그치게 되었던 셈이다.(그림2)

결론적으로 말하면 야요이시대도 그렇지만 고분시대에 이르러서도 일본 본토문화가 류우큐우에 정착하지 못했다고 보는 견해가 지금까지의 조사결과로만 보면 상대적으로 우세한 셈이다. 그러나 일본 큐우슈우産의 하지키(土師器)가 1992년 아마미오오시마의 마츠노토(マツノト)유적에서 출토한 예가 있으며, 이케다에이지(池田榮史)가 지적하듯이 야요이문화 유적에 대한 조사횟수나 규모에 비해 고분시대 유적의 조사가 제대로 진행되지 않은 사실도 고려해야 한다.

기원 7세기 이후 일본본토가 율령국가체제로 전환되면서 문헌기록을 살펴보면 琉球는 大和政權에 朝貢을 받치는 주변국으로 化한 것으로 되어 있다. 율령국가 체제의 행정구역에 직접 편입되는 것은 種子島·屋久島를 비롯한 琉球 북부권이다. 이를 방증하는 자료로서 九州 大宰府 유적에서 출토한 木簡 유물이 있는데, 동 목간에 '俺美'銘이 있어 본토와 오키나와의 교류, 조공관계를 방증한다.

5. 중국과의 관계-도자와 화폐

오키나와에서 발견된 가장 오랜 중국화폐는 전국 燕나라 明刀錢이다. 이 명도전은 일본 열도는 물론 우리나라에서는 청천강 이북에서 발견되었지만 제주도를 포함

한 그 이남에서는 정확한 출토상황과 함께 정식보고된 바가 없다.

1점은 1924년에 발견된 것으로 나하시 표고 32m의 석회암 작은 구릉상에 있는 城岳패총에서 발굴된 것으로 석촉 등의 석기와 함께 출토되었다고 한다. 다른 1점은 1992년에 오키나와 본섬의 具志頭村 具志頭城 아래 석회암 동굴 내에서 출토한 것으로, (當眞嗣一 1997) 미국인이 금속탐지기로 태평양전 당시의 폐금속을 수집하다가 발견한 것이다. 발견당시에는 유물포함층이 확인되지 않았으나, 원래는 문화층이 있었을 가능성을 전혀 배제하지 못한다고 한다. 그밖에 与那城村 屋慶名 패총에서 명도전 1점이 발견되었다고 보도된 예가 있으나, 정식보고되지 않아 확실하지 않은 예가 있다.(琉球新聞 1969.9.22.)

明刀錢은 크게 세형식이 있는데, 오키나와 발견 城岳패총과 具志頭城 명도전 2점은 중국 요령성과 서북한 지방에 주로 발견되는 것과 형식상 통한다고 한다. 전국시대 당시에 오키나와가 명도전이 주로 통용된 중국 화북과 동북지방, 한반도 북부와 거리상으로 보아 직접 교류하였다고 보기는 어렵다.

출토상황이 확실하게 알려져 있지 않지만 일본 본토에서는 사가현(佐賀縣)의 가라츠시(唐津市)와 히로시마현의 三原市에서 출토한 예가 있다 한다. 또한 城岳패총에서 명도전과 함께 큐우슈우계 조몬만기토기가 출토된다고 하므로 오키나와 명도전은 큐우슈우지방을 경유하여 가져온 것일 가능성이 많다고도 볼 수 있겠다.

戰國時代를 지나 秦漢시대 것이 분명한 화폐로서 오키나와에서 발견된 예는 드물다. 중국화폐인 五銖錢도 오키나와 여러 유적에서 발견되었는데, 그 대부분은 연대가 확실하지 않거나 보다 늦은 시기에 속하는 것이다. 이와는 달리 우리나라 제주도에서는 제주시 建入洞에서 貨泉·大泉五十·貨布·五銖錢 등의 新나라 王莽때 화폐가 수십매가 일괄 발견되었으므로 기원 1세기경의 것임이 확실하다. 또한 제주도는 三國志 기록에 中韓과 교역한다고 전하고 있는 바, 한반도 남부를 중계로 하여 漢郡縣지역과 긴밀하게 교역하였으며, 同 제주도 王莽錢은 그러한 배경에서 한군현지역으로부터 직접 유입되었을 가능성이 많은 것이다. 다만 그 화폐의 전달자가 중국 상인인지, 제주도민이었는지는 별도로 검토해야 할 문제이나, 사실이 어떻든 오키나와에서는 漢代에 제주도만큼 적극적으로 중국이나 중국군현지역과 교역하였다고 보기 어려운 것이다.

오키나와에서 중국 화폐가 본격적으로 수입된 것은 8세기를 전후한 唐나라 때이다. 당시 중국화폐는 開元通寶로서 1959년 가테나(嘉手納) 野國패총에서 5매 출토 확인한 것을 필두로 오키나와 제도에서 8개소, 아마미제도에서 2개소, 八重山諸島에서 3개소 등 총 13개소 유적에서 발견되었다. 출토매수는 1-3매, 5-6매 또는 10매 전후가 보통인데 八重山諸島의 石垣市の 岐枝赤崎패총에서는 27매가 출토하였다.

일본에서는 중국 당나라에 遣唐使船을 10회정도 파견하였고, 8세기경에는 南路를 개설하여 견당사선이 琉球에 寄港하였는바, 앞서의 개원통보는 이 견당사선을 통하여 유입되었을 가능성이 많은 것이다. 견당사 폐지후에는 이른바 琉球는 私貿易시대로 들어가는데, 9세기 이후 주변 해상로를 경유하는 상선의 대부분이 중국의 배이었으므로, 견당사선 이외에도 중국배가 이 琉球에 기항하였을 가능성은 충분하다고 한다. 따라서 일본 본토와 오키나와간의 중국 상인이 주도하는 私貿易을 통해서 이러한 개원통보가 입수되었을 가능성이 많다고 보겠다.(高宮廣衛·宋文薰1996)

다카미야(高宮廣衛)는 다른 민족지 예로 보아 류우큐우에서는 이 시기에 도내 자체는 물물교환방식으로 상품거래를 하지만, 중국제 수입품을 구입할 때는 이 중국 개원통보를 사용하였을 것이라고 추정하였다. 그러므로 개원통보가 발견되는 7-12세기경의 패총시대 후기는 일종의 화폐경제의 도입기로 볼 수 있다고 주장한 바 있다.(高宮廣衛 1996)

오키나와에서 중국에서 구입하는 교역품 중에서 단연 앞서는 것은 도자기이고, 중세에 오키나와에서 발견되는 무역도자기 중에 90% 이상의 중국도자기이다. 그러나 개원통보가 발견되는 당시의 중국 도자는 오키나와에서 드물게 발견되는 편이다. 다만 八重山諸島の 西表島の 출토예가 있는데, 이는 9세기를 중심으로 한 당대 후기에 중국 湖南省 長沙의 銅官鎮 가마에서 제작된 것으로 오키나와 자체에서 본격적인 수요가 발생하기전의 것으로 추정된다. 이 도자기는 앞서 본 개원통보와 함께 중국의 상인들을 통해서 입수되었을 가능성이 있는 것으로 보여진다.

우리나라 제주도에서도 8-9세기 唐代 청자가 제주시 龍潭洞 유적에서 발견된 바 있는 바, 당시 전남 莞島에는 張保臯의 靑海鎮이 있어 중국-한국-일본의 교역에 중요한 역할을 하였다. 아울러 용담동에서는 다량의 新羅陶器가 당대 중국 청자와 함께 발견되기 때문에 제주도 발견의 당나라도자는 한반도 남부를 경유해서 들어왔을 가능성이 높다. 그것은 오키나와에서 중국상인이 직접 들어온 결과 개원통보가 발견되는 것과 맥락을 달리하는 것이다.

琉球에서 본격적인 발굴조사를 통하여 발견되는 宋나라 중국도자는 11세기말 12세기초의 白磁碗으로 恩納村 熱田貝塚을 비롯하여 오키나와에서 약 40개소 유적에서 발견되었다. 그리고 12세기후반에서 13세기경에 들어와서 중국의 龍泉窯와 同安窯계 청자가 오키나와에서 다량 출토되어 이때부터 琉球에서는 중국도자 교역이 본격적으로 이루어졌음을 확인할 수가 있다.(金武正紀 1998)

이 단계에는 琉球 각 지역에 토착세력인 아지(安司)들이 발호하고 이들이 중국과 교역을 하는데, 그것은 私貿易 수준이었다. 이러한 상황에서 중국 도자 무역선이 류우큐우열도에 빈번하게 寄港했을 것으로 추정되며, 그 대표적인 예가 宇檢村 倉木

崎海底遺蹟의 예이다. 이 유적은 아마미 섬의 서쪽 宇檢村灣 입구에 있는데, 남송 때 도자기를 대량 실은 배가 난파된 곳으로 1996년과 1997년에 조사되었다.(宇檢村敎育委員會 1999) 이 유적에서는 송대도자기와 함께, 1점의 오키나와·아마미섬의 독특한 兼久式土器가 함께 발견되었는데, 이 사실에 주목한 田村晃一은 동 중국도자가 아마미 현지인과 교역하였을 가능성도 충분히 있다고 지적하였다.

이 유적에서 발견된 도자기는 그 대부분이 대접류로서 ‘河濱遺范’, ‘金玉滿堂’銘이 있는 예가 다수 포함된다. 똑같은 명문의 자기는 오키나와 본섬의 나하시 등 여러 유적에서 발견된 바 있어, 더욱더 당시의 송대자기를 실은 중국 무역선이 琉球 현지에 기항했을 가능성을 높여 준다 하겠다. ‘河濱遺范’, ‘金玉滿堂’銘의 남송도자는 제주도에서 한경면 新昌里 수증유적에서 다량 발견된 바 있어, 남송도자기는 당시 제주도와 류우큐우열도 주변의 동중국해를 사이에 두고 빈번하게 교역되었음을 짐작하게 한다.

그런데 琉球가 중국 도자 교역에 주도적으로 참여하는 것은 14세기에 들어와서이다. 그것은 중국에 明이 들어서면서 주변의 140여개소의 나라와 부족을 冊封하고, 조공관계를 맺게 되는데, 琉球도 이에 포함되면서 對중국의 進貢貿易이 활성화되기 때문이다. 중국 측에서는 당시에 책봉관계를 맺은 나라 이외에는 조공무역을 인정하지 않았으며, 중국 내의 일반민에게도 해외무역을 금지하는 이른바 海禁정책을 실시하였다고 한다.(金武正紀 1998)

이때는 각지의 아지(安司) 혹은 수장세력들이 산발적으로 사무역을 추진했던 전 단계와 달리, 수장세력이 中山·山南·山北의 이른바 三山세력으로 통합되면서 이들을 중심으로 公貿易이 활발하게 전개된다. 기록을 보면 1372년 中山王에 의해 조공무역이 개시되고, 이어서 산남·산북의 왕도 1380년, 1383년에 각각 시작하는 것으로 되어 있다.

조공무역을 통하여 다량의 명대 도자기 류우큐우에 수입되는데, 이들 도자기는 류우큐우 자체의 소비만을 위한 것은 아니고, 중계무역의 상품으로서 이용되기도 하였다. 류우큐우가 다른 지역보다 중계무역지로서 각광을 받은 것은 당연히 그 지리상의 여건에 있는데, 동중국해상에서 도자기 생산 공급지인 중국 남부지방과 수요지인 일본을 징검다리식으로 연결하고 있기 때문이다. 그러므로 오키나와 본섬의 수백여 곳되는 쿠스구 유적을 비롯하여 전지역에 중국도자가 다량 출토하여, 琉球는 무역도자의 왕국이라는 별칭이 붙을 정도에 이른다. 그러나 이러한 조공무역은 1475년 이후 琉球 사신의 중국내 소요사건을 계기로 그 규모가 축소되고, 1567년 海禁政策이 해제되면서 그 중계무역지로서의 위상을 상실하게 된다.

6. 한국과의 관계 -도자와 기와

琉球에서 한반도로부터 건너 온 것으로서 확실한 고고학적 증거는 琉球 각지의 크고작은 쿠스쿠 혹은 城관계 유적에서 다량 발견되는 '癸酉年高麗瓦匠造' 銘의 기와이다.(그림3) 오키나와에서는 동 기와가 계유년에 해당하는 1273, 1393년 등 어느 시기에 제작되었는지 학계의 의견이 분분하다. 1273년설을 취하는 이케다(池田榮史) 교수는 한국의 고려 三別抄 해체와 관련하여 설명하고 있는데 반해,(池田榮史 1998) 1393년설을 주장한 입장에서는 여말 선초의 교체기에 유민집단의 유입으로 설명하기도 한다.(西谷正 1981)

기와 이외에 琉球에서 발견되는 또다른 한국계 유물로서 오키나와에서는 高麗靑磁로 이해되고 있는 粉靑磁器가 있는데, 그 숫자도 적고 하여 별도로 정리되거나 체계적으로 논의된 바 없다. 그러한 이유로 번거롭지만 여기서 필자가 수집한 자료를 토대로 소개하고, 이에 대해 간단하나마 설명을 하고자 한다. 여기에 소개한 것 이외에도 정식보고되지 않은 예도 있고, 필자가 미처 자료를 입수하지 못한 예도 있을 것인 바 이에 대해서는 추후 보완하고자 한다. (그림4·5)

1) 那覇市 首里城(鎌倉芳太郎 1976·手塚直樹 1980·沖繩縣教育委員會 1988·上原靜 1994)

1936-37년에 걸친 조사에서 파편 1점이 수집되었는데, 보고자는 당시 琉球에서 유일한 조선도자기로서 三島手(분청자기)라고 보고하고 있다. 1961년 友寄英一郎이 채집한 것으로 분청자기 底部片 1점이 있는데, 그 바깥면 굽주위로 돌아가며 白象嵌의 蓮瓣文帶, 안쪽으로는 如意頭文帶가 장식되어 있다.

1974년 발굴에서 수집된 2편의 파편 중 1점은 저부에 가까운 부위로 바깥에는 상하 2개의 橫線 중에 연판문이 장식되고, 다른 한점은 印花聯珠文이 장식된 대접편이다. 보고자는 이와 함께 출토된 다량의 중국 도자기의 연대로 보아 14세기대인 고려청자로 추정하고 있다. 1992년에 수습된 작은 파편은 線象嵌의 草花무늬가 장식된 대접편이다.

2) 伊是名村 伊是名城(手塚直樹 1980)

분청 대접의 저부편 1점과 胴體部片 2점이 채집 보고되었다. 저부편 다른 1점은 안쪽 한 가운데 印花 국화문이 장식되어 있는 것이다. 동체부편 2점은 둘다 겉쪽은 초화문의 선상감 초화무늬, 안쪽에는 인화국화문이 밀집되어 있는데, 두점다 역시 14세기대 고려청자로 보고하고 있다.

3) 浦添市 浦添城(浦添市教育委員會 1985)

모두 12점의 상감청자가 채집되었다고 하는데 그중 4점의 대접편이 정식보고되었다. 1점은 구연부편으로 겉면은 3줄의 線文帶 아래에 草花文, 안쪽에는 象嵌唐草文帶와 印花聯珠文帶를 장식하였다. 그밖에 물고기 비늘같은 무늬가 장식된 파편, 蓮瓣文帶가 장식된 파편, 그리고 내저에 백상감의 한줄의 선이 있는 저부편이 있다.

4) 具志頭村 玻名城古島遺蹟(沖繩縣立博物館 1985)

1982-84년 조사에서 수습된 대접의 작은 파편 1점으로, 인화국화문대가 장식되었다.

5) 北谷町 北谷城(北谷町교육위원회 1986)

대접의 저부가까운 파편 1점으로 길면에 연관문대, 안쪽에는 如意頭文帶와 작은 연주문대가 장식되어 있는 것이다.

6) 具志頭村 具志頭城(具志頭村教育委員會 1986)

1982년 조사에서 1점 확인되었는데, 대접구연부편으로 바깥에는 雷文帶 아래에 초화문, 안쪽에는 雷文帶 아래에 변형구름무늬대가 뺄뺄하게 장식되어 있다.

7) 豊見城村 高嶺古島遺蹟(豊見城村教育委員會 1990)

1987,88년 조사시 1점이 수습되었는데, 저부에 가까운 대접편이다. 바깥면에는 아래쪽에 흑백상감의 연관문대를 장식하고 그 위에 雨點文을 표현하였고, 안쪽면에는 아래쪽에 인화 연주문, 그 위로는 변형구름문을 장식하였다. 역시 보고자는 고려청자로 보고하였으나, 분청자기에 속하는 것이다.

8) 嘉手納町 屋良城(嘉手納町教育委員會 1995)

고려청자로 1점이 보고되었는데, 복원 입지름이 21.7cm인 대접의 구연부편으로 안쪽면에 백상감의 인화연주문대가 2조의 선안에 일렬로 장식되어 있다. 보고자는 13세기말-14세기로 추정하고 있다.

9) 石川市 伊波城(石川市教育委員會 1996)

1996년 조사에서 수습된 대접의 外反口緣部片 1점이다. 백상감의 몇 개의 줄무늬가 확인되었다.

10) 今歸仁村 今歸仁城(那覇市立壺屋燒物博物館 1998)

1998년에 那覇市立壺屋燒物博物館 개관기념 특별전 도록에 소개된 것으로 4점의 대접편이 있다. 2점은 저부편이고, 1점은 구연부편, 1점은 동체부편인데, 구연부편은 안쪽에 변형당초무늬대와 인화국화문대가 장식되고, 동체부편은 퇴문대와 변형된 花瓣文이 장식되어 있는 것이다.

11) 名護市 宇茂佐古島遺蹟(1998)

아직 정식보고가 안된 1점의 파편으로 名護市教育委員會의 후의로 관찰할 수 있었다. 대접 혹은 접시편으로 추정되는 것으로 안쪽면에 雨點印花文이 장식된 고려말 조선초기의 象嵌印花粉靑계통의 자기이다. 대체로 그 연대는 14세기말 15세기전반으로 추정된다.

위에서 보듯이 琉球에서 발견되는 한국 도자기는 총 30여편이 안되는 것으로 중국 도자기에 비해 매우 적다. 한 유적 당 발견되는 숫자의 비율도 아주 낮아서 예를 들면 1992년 首里城 성곽의 조사에서 총 265점의 도자기중 1점만이 한국계 자기인 것이다.(上原靜 1994)

오키나와에서는 이들 자기를 고려청자라고 전부 보고하고 있지만, 실제로 우리나라에서는 그 대부분이 분청자기로 분류되는 것이다. 모두 印花象嵌手法으로 장식된

조선시대 분청자기계열로서 일부 상감청자에 속하는 것이 있을지 모르나 그 연대를 보면 14-15세기에 속한다. 이 때는 앞서 본 것처럼 琉球가 중국 明나라의 冊封國이 되어 조공무역이 활발하게 전개되는 때이고, 아시아지역의 중계무역지로서 두각을 나타내던 시대이다. 이러한 상황의 시대에 한국의 도자기가 琉球에 유입되었다는 것이다.

주목되는 것은 그 器種이 전부 대접편이라는 점이다. 중국이나, 동남아시아 지역에서 수입되는 그릇 중에는 대접 말고도 병이나 항아리 등이 많은 것과 대조적이다. 두말할 것도 없이 당대에 한국에서는 대접 이외에 항아리, 병, 접시 등 다양한 기종이 제작되었는데도 琉球에서는 대접만이 선택적으로 수입된 것이다.

발견되는 유적을 보면 그 대부분이 쿠스쿠유적이거나 그와 유사한 성격의 古島유적이다. 이들 유적은 류우큐우지역 중 당대의 중심적 위치에 있는 곳으로서 당대 지배세력과 관련되었다. 그렇다고 한다면 당시에 류우큐우에서 일정한 계층 이상에서 많이 사용한 외국의 도자기 중 대접으로는 한국의 고려청자 혹은 조선분청의 대접을 어느정도 選好하였음을 알 수가 있다.

문제는 이들 도자기를 공급한 담당자가 누구인가 하는 문제인데, 나하(那覇) 포구에 구전되는 설화중에는 이와 관련하여 한국 상인에 얽힌 내용이 있다. 한국에서 온 상인이 팔려고 하는 도자기를 너무 값을 낮추어서 살려고 하니까, 화가 나서 싼고 온 도자기를 바다에 모두 버리고 갔다는 내용인 바, 이를 통하여 보면 한국상인의 琉球 來島의 가능성이 얼마든지 있다 하겠다. 특히 비슷한 시기에 高麗瓦匠造銘의 기와가 琉球 전역에서 출토한 점을 미루어 볼 때 더욱 그러한 것이다. 동 기와의 출토는 어떤 식으로든 조직적으로 한국사람이 琉球에 들어 왔음을 말해주는 것으로 그러한 상황 속에서 도자기를 팔려는 한국 상인의 來島 가능성은 충분히 있다고 하겠다.

그러나 전남 新安 앞바다 元나라 해저 침몰선의 경우를 생각해 보면 달리 생각할 수도 있다. 동 도자교역선은 14세기 元代의 중국 배로서 배에 실었던 그 대부분의 자기는 중국 원나라 제품인데, 그중에 일부는 고려청자도 있었던 것이다.(崔光南 1992) 이 배는 중국을 떠나 한국 서남지역을 경유해서 일본으로 가는 배로 추정되는 바, 琉球의 고려청자 혹은 분청자기도 중국 상인이 타고 다닌 배를 통하여 유입된 것일 가능성도 있다 하겠다.

또 다른 가능성은 琉球 상인이 직접 한반도를 내왕하여 취했을 가능성이다. 기록에 보면 한국에 琉球에서 사신을 보낸 사실이 있는 바, 사신을 통해서 이들을 수입할 가능성도 배제 못하는 것이다. 그러할 경우 그 교역의 경유지는 큐우슈우일 가능성이 높는데, 류구의 상인이 그곳에 건너가 그곳에 유입된 한국 고려청자를 구

입해서 오는 것으로 추정해 볼 수 있겠다.

7. 奄美大島 고고학의 몇가지 문제

아마미(奄美)오오시마(奄美大島)는 오키나와 제도와 함께 류우큐우열도의 중부문화권에 속한다. 國分直一에 의하면 이 중부권은 큐우슈유의 문화의 영향을 받으면서 독자적인 문화권을 구축하는 것으로 이해되고 있다. 그러나 두 섬은 1609년 島津의 침공을 받은 후 아마미(奄美)섬이 사츠마번(薩摩藩)에 소속하게 되면서 오키나와 본섬과는 행정구역상 다르게 되어 오늘날 이르게 되었다.

오키나와와 아마미(奄美) 양 섬의 고고학적인 편년체계가 상호 별도로 논의되고 있다는 것이 주목되는 바, 그것은 양지역이 동일 문화권에 속하면서도 상호 별도의 문화변천과정을 겪는다는 것을 말해준다.

금번 2차년도 류우큐우-제주의 비교문화연구 조사에서 조사지역인 아마미(奄美)의 고미나토(小湊)는 아마미(奄美)고고학 연구에 중요한 유적의 현지조사가 실시된 바 있다. 우선 고미나토(小湊) 후아가내구(外金久)에서 名瀨市 교육위원회에서 발굴조사한 류우큐우 최다의 夜光貝의 다량 集積유적이 조사된 것을 들 수 있다. 동 유적자료는 매년 일본에서 실시되는 전국 출토 중요 문화재 특별전(1999년도)에 출품 전시된 바 있다. 동유적의 고고학자료는 류우큐우와 일본 九州를 무대로 한 고대단계의 해상 교역체계를 보여준다는 점에서 주목되는 것이다.

아울러 고미나토(小湊)에서는 작년과 금년에 이어 구스쿠(グスク)유적에 대한 현지분포조사를 실시한 바 있다. 구스쿠(グスク)는 오키나와 본 섬을 중심으로 수백곳 분포하고, 이곳 아마미(奄美)에도 全島 일원에 밀집분포하는 것으로 알려져 있다. 다만 양 지역의 구스쿠(グスク) 성격을 이해하는데 관점의 차이가 있는 것으로 알려져 있어 동 구스쿠 유적도 아마미(奄美) 고고학의 중요 연구과제가 되고 있다.

한편 고미나토(小湊)에서는 일찍이 古墓유적에서 중국 南宋代 도자기가 출토되어서 주목받은 바가 있다. 앞서 夜光貝가 일본 국내를 중심으로 한 교역체계를 보여준다면, 중국 도자기는 東中國海 전반의 교역체계를 보여준다는 점에서 중요하다 하겠다.

본 발표에서는 고미나토(小湊)의 중요한 연구주제이면서 동시에 아마미(奄美)전체의 고고학 연구상에서 중요한 위치를 점하고 있는 위의 세가지 대상을 놓고 현지조사를 통해서 수집한 자료를 중심으로 보고 논의하고 한다.

1) 고미나토(小湊) 夜光貝 대량출토유적에 대하여

류우쿠우는 일본이나 한반도에서 산출되지 않는 야광패와 이모가이(イモガイ) 조개산지이다. 두 종류의 조개는 크기와 角質 뿐만 아니라 색깔, 광택등이 우수하여 장식품의 원소재로 이용되어 왔다. 지금까지 기노시타(木下尙子) 등이 연구한 바로는 이들 조개를 원료로 한 장식품이 일본 야요이시대부터 고분시대 이후에까지 일본구주를 비롯한 본토지역에 교역되었다고 한다.

그 제품의 종류는 크게 대형 조개용기(貝匙), 貝札, 기타 馬具 장신구로 대표된다. 조개용기는 기본적으로 대형의 야광패를 소재로 하여 큰 수저 모양을 만든 것이다. 이 용기는 기록에 따르면 단순한 식기가 아니라 음주용기로 쓰였을 가능성이 많다. 패찰은 장방형의 소형 板飾에 기하학적인 무늬가 장식된 것으로서 의복 등에 매단 것으로 추정되는 것이다. 무늬가 중국 청동기에 많이 장식되는 饕餮무늬 닮았다고 하여 중국의 영향으로 만들어진 것으로 이해되고 있다.

일본과 그리고 한국 고분에서 주로 출토하는 고대 마구류 중에는 말몸통을 결박한 띠의 연결부에 장식한 말띠꾸미개(雲珠)가 있다. 이 운주는 대체로 원형판 모양을 기본 모양으로 하고 있는데, 오키나와産 이모가이(イモガイ)가 그 원판형 틀의 장식으로 많이 사용되었다.

고미나토(小湊) 가내후내쿠유적은 해안사구상에 형성된 것으로 砂丘 후방부분에 길게 분포하고 있다. 그 유적규모는 대략 20,000㎡로서 그중 약 4,000㎡를 1997년에 2차에 걸쳐 거의 6개월간 조사되었다. 동 유적에서 5개소의 야광패 제작지가 확인되어 대략 2,500여점의 야광패가 검출되었다. 아울러 패찰이 총 16점 출토되었는데, 앞서 야광패 제작지에서 함께 출토된다고 한다.

우선 주목되는 것은 고미나토(小湊)의 야광패가 일정한 지점을 중심으로 集積되어 있으며, 그 대부분이 어린 조개가 아닌 성장한 조개들 뿐이라는 사실이다. 상태도 완전한 것이 대부분인데, 이로 미루어 이 조개무더기는 면밀주도한 계획을 갖고 포획되었다고 말할 수 있다. 바꾸어 말하면 조개포획에서부터 集積 저장하는 것이 전문적인 노우하우(know-how)를 통하여 이루어졌음을 미루어 추정할 수 있는 것이다.

다음 이곳에서 확인된 조개용기는 총 90점 이상으로 그동안 류우쿠우 열도에서 한 유적에서 발견된 예중 가장 많은 숫자인데, 그 대부분이 미완성품이고, 최종 완성품은 3점에 불과하다고 한다. 이러한 미완성품의 확인을 통해서 고미나토(小湊)에서 단순히 조개포획 저장만이 이루어진 것이 아니고, 제작되었던 제작처였음을 분명히 할 수가 있다. 그리고 이들 미완성 조개수저를 통해서 1)사용부분의 절취 2)형태의 成形과 整形 3)겉면의 연마등 일정한 제작과정을 거쳤음을 알 수가 있는 바, 따라서 제작과정에서도 역시 전문적인 제작기술이 동원되었음을 알 수가 있다.

마지막으로 주목되는 것은 동 유적지에서 완형품이 근소하고 파손품이 많으면서, 그 파손부위가 대체로 일정한 것으로 확인된다는 점이다. 그 대부분이 사용도중에 파손된 것이 아닌 점을 미루어, 발굴조사자인 高梨修는 이 조개수저 완제품은 이곳에서 사용 소비된 것이 아니고 다른 지역에서 소비되었다고 추정한다. 결론적으로 말하면 아마미(奄美) 섬에서 고미나토(小湊)를 비롯한 여러 곳에서 야광패의 용기가 제작되었지만, 그 완성제품의 대부분은 다른 지역에 수출되었을 것이라고 추정하는 것이다.

대체로 동 야광패유적지의 연대는 같이 나오는 가내구식(兼久式) 토기의 연대로 보아 대체로 7-8세기경인 바, 이 때는 일본 본토는 본격적인 율령국가체제로 돌입되는 시기이다. 아마미(奄美)는 당시에 일본의 주변 朝貢國으로서 일본에 동 야광패 조개제품을 일본 본토에 조공하였을 것이라 추정된다. 실제로 일본측 문헌기록에 이를 방증해주는 기록이 나오고 있을 뿐만 아니라, 일본 太宰府 유적에서는 '奄美嶼'라는 명문이 있는 竹簡이 발견되어 그러한 사실을 더욱 방증하여주고 있다.

야광패 수저가 류우슈우에서 긴기지방에 이르기까지 일본 여러 지역 뿐만 아니라, 우리나라 남부지방의 고대 유적에서도 출토된다. 지금까지 확인된 지역의 대부분은 당대 伽倻와 新羅가 위치한 지역인데, 우선 고분의 부장품으로서 高靈 지산동의 예가 있고, 사찰유적으로 경주 黃龍寺에서도 출토된 바 있다. 이처럼 류우슈우 야광패는 일본과 한국 남부에서 진귀한 물품으로 인정을 받고 있는데, 한국의 경우 직접 류우슈우에서 온 것이라기 보다는 일본의 九州지역을 거쳐 유통된 것이라고 생각된다.

이들 류우슈우産 조개제품을 私적으로 류우슈우 혹은 아마미(奄美) 사람들이 직접 운반 수출했을 가능성도 전혀 배제할 수 없는 바, 기노시타(木下尙子)는 동 조개제품이 가고시마 남쪽의 種子島 廣田유적을 중심으로 중계무역이 이루어졌다고 추정한 바 있다. 이는 일본 본토에 널리 보급된 류우슈우산 貝札이 廣田유적에서 대량 출토되기 때문에 내린 결론이다. 그러나 패찰은 앞서 보듯이 고미나토(小湊)유적에서 20여점 가까이 출토되었는 바, 아마미(奄美) 등 류우슈우열도에서 제작이 되었으며, 조개용기와 함께 아마미(奄美) 사람들이 주체적으로 교역하였을 가능성도 전혀 배제 못할 것이다.

2) 아마미(奄美) 구스쿠(グスク)에 대하여

아마미(奄美) 지역을 포함하여 오키나와에는 대체로 城을 뜻하는 류우슈우 방언으로 구스쿠(グスク)라고 하는 유적이 수백개소 조사된 바 있다. 구스쿠(グスク)의 기능과 성격에 대해서는 그 형태, 입지, 축조기술, 시대 등에 따라서 여러 관점에서

설명되고 있는데, 크게 首長세력인 按司(アジ)의 거주설, 聚落說, 聖域說 그리고 방어설 등 네가지 설이 있음을 中山清美가 정리한 바 있다.

그중 按司 거주설이 일반적으로 널리 알려져 있는데 이 입장에서 當眞嗣一은 구스쿠(グスク)의 전개과정을 설명한 바 있다. 우선 농경문화가 발전하고 계급사회로 이행하는 단계에 성립해서, 대외무역이 확립하고 발전하면서 城으로서의 체제를 갖추고 규모가 커진 구스쿠가 각지에 들어선다고 한다. 그리고 마지막에 가서는 首里城主가 오키나와를 통일하면서 각지의 성이 쇠퇴하는 과정을 밟는 것으로 이해되고 있다.

구스쿠가 일반 취락이라고 보는 입장에서 嵩元政秀는 류우큐우 열도의 구스쿠를 세종류로 나누어 파악한다. 우선 A식은 首里城, 今歸仁城, 中城城 등 문헌기록에 분명히 지배자의 居城으로 인정되는 구스쿠(グスク)를 말한다. B식은 문헌기록이나 구전등으로 별로 전하지 않은 구릉상의 돌담을 갖는 구스쿠(グスク), C식은 구스쿠(グスク)라 전하지만 출토유물도 없고, 砲臺와 같은 특수한 구스쿠를 가리킨다고 한다. 그중 구스쿠는 B식으로부터 발생하였는데 그 배경에는 채집경제사회에서 대외무역이 활발한 유통경제로 이행하는 시대를 배경으로 한다고 설명하고 있다.

성역설은 中松彌秀 등이 주장하는 것으로 상당수의 구스쿠(グスク)가 격절된 입지에 있어 피난소의 성격을 갖고 있으면서, 자기 지배지나 촌락을 보호하는 기능은 별로 가고 있지 않다는 점에 주목한다. 상대적으로 많은 구스쿠(グスク)가 수장의 居城으로서의 좁은 면적을 갖고 있으므로, 구스쿠가 발생하여 상당한 기간이 경과한 후에 아지(按司)와 그 가족이 기거하는 성으로 발전하였다는 입장이다. 그리하여 구스쿠에 성곽이 추가되면서 성이라는 개념이 생겼다는 것으로, 원래 구스쿠(グスク)는 신을 예배하는 장소 곧 聖域이라는 것이다.

방어설의 입장에서는 무엇보다도 그 입지조건에 주목하게 된다. 구스쿠(グスク)는 입지에 따라 첫째 구릉의 정상에 있는 것, 둘째 독립된 작은 구릉에 있는 것, 셋째 절벽상의 대지에 입지한 것 등이 있는데, 대체로 방어를 목적으로 하여 처음 발생하였다고 주장한다. 그리하여 방어적 성격이 보다 강한 구스쿠(グスク)에는 긴 구덩이 시설인 堀切(호리기리)를 갖고 있는 예가 보편적인 적이다.

中山清美도 아마미(奄美) 구스쿠(グスク)의 입지에 주목하여 산중에 있는 것, 대지상에 있는 것, 바다에 면해 있는 것으로 크게 세종류로 나누고 있다. 그중에서 산중에 있는 것은 몇 개의 호리기리(堀切)를 갖고 있는 것이 특징이고, 대지상에 입지한 것은 주로 취락의 후방에 있으며, 바다에 면한 것은 바다쪽으로 돌출한 舌狀대지에 독립된 지형을 이용하고 있는 예가 많다고 한다.

名瀬市교육위원회에서는 1998년에 나제시(名瀬市) 관내의 구스쿠(グスク) 상세분

포조사를 실시하였는 바, 그중에서는 고미나토(小湊)와 그 주변지역도 그 대상에 포함되어 있다. 그결과 현재 고미나토(小湊)와 고미나토(小湊) 포구에서부터 谷間지형이 내륙으로 연장되는 양주위의 산에는 총 16개소와 3개의 구스쿠(グスク) 지명이 전하는 곳이 확인되었다. 그 중에 인위적으로 조성된 평탄대지와 하리기리, 통로, 土壘 등을 갖춘 성곽시설이 있는 쿠스쿠도 있지만, 현지 주민들은 그중 2개소에 대해서만 구스쿠라고 부르고 있다.

대부분 그 성곽시설은 상당히 가파른 지형을 이용한 것이므로, 토착세력의 城으로 보기는 어렵고 방어시설이나 아니면 聖域시설로 보는 것이 타당하리라 생각한다. 대체로 주민들의 구전에 의해서도 동 구스쿠(グスク)에 대해서 후자로 생각하는 경우가 강하다.

제주도에서는 제주시 龍潭洞의 구릉 정상부에서 陶器와 중국제 磁器가 다량 출토하는 유적이 발굴조사된 바 있다. 동 유적에 대해서는 앞서 류우큐우 쿠스쿠처럼, 여러 측면에서 설명할 수 있으나, 대체로 제사지내던 곳으로 추정되는 점이 앞서 구스쿠(グスク) 성역설과 통한다고 보겠다.

한편으로 제주도에서 城이라고 하면 해안가 저지대에 있는 성곽시설을 갖춘 縣城과, 鎮城으로 이는 耽羅가 한반도 중앙 집권국가의 지방으로 편입된 이후의 것으로, 류우큐우처럼 在地세력의 근거지로 확립되면서 성립한 것과 다르다. 그러나 현성과 진성으로 변모되기 이전에 그중의 일부는 류우큐우 구스쿠처럼 자체 재지세력의 근거지로서 기능하였을 가능성을 전혀 배제할 수 없을 것이다.

제주의 해안가 오름 정상에는 유사시 연락을 취하는 煙臺와 烽燧시설이 수십개소 자리한다. 오키나와나 아마미(奄美)에서의 상당수 구스쿠(グスク)는 역시 이와 같은 통신시설 기능을 갖고 있을 가능성이 많다 하겠다. 그것은 주변해역을 통해서 들어 오고 나가는 교역선이 많기 때문에 그러므로 바다에 면한 구스쿠(グスク)는 그러한 기능을 가졌다고 추정할 수 있다.

3) 고미나토(小湊) 古墓出土 中國陶瓷에 대하여

고미나토(小湊) 砂丘유적에서는 1965년에 공사중에 완형품 도자기가 10개 이상 발견되었다. 발견시에는 일부의 항아리 안에 인골이 매납되어 있었다고 하므로 藏骨器로 사용되었음이 분명하다.

백자는 4점으로 1점은 접시, 3점은 대접인데, 대체로 11세기 후반 12세기 중엽 사이에 있는 중국 福建省 일대에서 제작되었다고 추정되는 중국 宋代 도자기이다. 그중 접시는 九州 福岡縣 山經塚에서 출토한 1120년의 紀年銘이 있는 것이고, 3점

은 褐釉四耳壺로서 그중 한점 또한 福岡縣의 한 무덤에서 1110년의 기년명품이 있는 것과 유사하다. 그밖에 두점의 대접류와 함께 류우큐우産 도기 항아리 1점이 공반출토된 것이 전한다.

대체로 11-12세기는 류우큐우 각지에 首長세력들이 성장하고 구스쿠(グスク)가 곳곳에 들어서는 단계이다. 이때는 아직 중국과의 본격적인 조공관계를 맺지 못하고, 각지에서 산발적으로 지역집단별로 私貿易을 하는 단계인 것이다. 중국 배가 류우큐우열도 루트를 경유하면서 도자기를 내고, 그 대신 류우큐우의 특산물을 갖고 간 것으로 추정된다.

아마미(奄美)를 寄港으로 한 중국 무역선은 아마미(奄美)섬의 우겐촌(宇檢村)의 倉木崎에 난파된 해저 유적의 조사를 통해서 확인되는데, 1994년에 처음 확인되어 1995년부터 1998년에 걸쳐 수중조사되었다.

동 유적은 燒内灣의 입구에 있는 작은 섬과 만의 해안 사이에 한가운데에 형성된 폭 300m, 길이 2km의 枝手久 해협에 위치한다. 유적지점은 수심이 2-4m 정도로 얕은 곳으로, 해저에는 산호초가 형성되었는데, 이 지점을 통과하여 灣 안으로 들어 서면 갑자기 깊어져 수심이 80m에 이른다고 한다.

해저의 중국도자기는 앞서 좁은 산호초 해협을 중심으로 길이 900m, 폭 200m의 걸쳐 분포하였는데, 조사보고자들은 이는 후대에 파도에 밀려 넓게 퍼진 것으로 보고 있다. 또한 동 지점에서 礎石이 출토된 것으로 보아, 1척의 교역선의 침몰되면서 잠긴 것이라고 추정하고 있다.

이 유적에서는 4차에 걸친 조사를 통해 약 2300여점의 중국계 도자기편이 수습되었는데, 그 산지별 종류를 보면 龍泉窯系청자, 同安窯系청자, 福建省系백자, 景德鎮窯系청백자, 泉州窯系 등의 陶器가 있다.

중국의 요업생산지는 기본적으로 원료와 연료를 취득하기 쉬운 장소에서 운영되는 바, 내륙부, 산간부에도 위치하므로, 일단 이들 도자기는 내륙 하천을 운항하는 화물선으로 운반되어 강하구의 集荷地에서 外航用の 화물선에 실려 해외에 무역되는 것으로 이해된다. 따라서 동 하고자키 침몰선은 温州와 福州 등 각지에서 반출된 외항용 화물선 1척에 실렸던 것으로, 일반적인 외항용의 배가 그렇듯이 尖底形바닥을 가진 동 배가 이 해협에서 좌초되어 침몰된 것이다. 동 배는 결국 중국 福建省에서 아마미 倉木崎를 거쳐 일본 九州로 이어지는 항로로 운항되었던 것이다.

아마미(奄美) 섬에는 앞서 고미나토(小湊) 등 벌써 이 하고자키보다 50년 이상 앞서서 중국계 도자가 유입된 바도 있고 하여, 이 하고자키 해저침몰선은 적어도 재지 유력인 집단에게 일정의 도자기를 팔았거나 팔려고 하였던 배일 가능성이 충분히 있다고 보아야 한다. 특히 이 해저유적에서는 중국계 도자기와 함께 아마미(奄

美) 재지계 토기인 가내구식(兼久式) 토기가 동반 출토되었다는 점에서 더욱 그러한 것이다.

오키나와가 중국의 조공국가로 되어 三山の 지배세력을 중심으로 공식적인 進貢 무역을 하고 동중국해의 중계무역지로 각광을 받는 것은 14세기 이후로서, 이 하고자키 유적의 연대에는 아직 私貿易의 단계이다.

이 하고자키 유적의 도자기 종류와 똑같은 것이 가고시마현을 중심으로 九州의 여러 유적에서 발견된 바 있을 뿐만 아니라, 한국의 제주도 한경면 新昌里 유적에서도 발견된 바 있다. 한경면 신창리에서도 하고자키의 것과 똑같은 ‘河濱遺範’, “金玉滿唐”명의 청자 대접편이 다량 출토된 바 있어 당대 중국 도자 무역선이 동중국해 남쪽의 류우큐우는 물론 북쪽의 제주도를 경유하거나 기항을 하였던 것임을 알 수가 있다.

그리고 오키나와에서 그렇듯이 이들 宋代 中國陶瓷은 대체로 재지 세력가들에 의해 구입되었을 것인 바, 이들 중국도자가 구체적으로 류우큐우 아마미(奄美)에서 어떤 식으로 소비되었는지를 살핌으로써, 고고학에서 중요연구 대상인 물질적 자료의 생산, 유통, 소비 과정을 체계적으로 이해하는 좋은 예가 될 것이다. 고미나토(小湊)의 중국도자기는 그것이 屍身을 매납한 藏骨器로 이용되었는 바, 일반 생활용으로 소비되지 않았음을 보여주고 있다.

8. 宮古島 고고학의 몇가지 문제

류큐(琉球)列島 南部에 位置한 미야코 섬(宮古島)에 대한 가장 큰 考古學的 關心은 이 섬의 文化가 周邊 어느 地域과 어떻게 關係를 맺고 있는가하는 문제이다. 이러한 關心은 傳播論的인 것으로서 그것은 아마도 日本은 물론 류큐(琉球)列島의 최남단 周邊部에 있기 때문인 것으로 풀이된다.

그러한 論議 중에서도 특히 조개도끼(貝斧)와 거석묘(巨石墓)를 둘러싼 論議가 활발한데, 이에 대해서 충분하지 못하나 미야코(宮古)와 이라부(伊良部) 섬 현지에서 現地踏査를 통하여 얻은 所見을 정리 發表하고 關係學者의 가르침을 받고자 한다.

조개도끼(貝斧)에 대해서는 安里嗣淳(아사토)선생의 논의가 가장 代表的이고, 거석묘(巨石墓)에 대해서는 金에리카 선생의 論文이 있는 바, 이들 두 분의 논의를 중심으로 살피고자 한다.

1) 조개도끼(貝斧)에 대한 논의

미야코(宮古)의 우라수쿠(浦底)패총과 나가마수쿠(長間底) 등지에서 발견된 조개

도끼(貝斧)는 대형 샤코가이(シャコガイ)조개를 材料로 하여 만든 것이다. 이들 조개도끼(貝斧)는 조개의 가장자리가 아니라 開閉部의 두툼한 部位를 재료로 하여 만든 점에서 필리핀의 것과 가장 비슷하며, 中國 南部나, 臺灣, 마이크로네시아 등지에서는 그 예가 드물다고 한다.

가까운 臺灣보다는 보다 먼 필리핀 지역과 考古學資料가 類似한 現狀을 쿠로시오(黑潮) 海流와 관련지어 생각하는 학자가 많다. 쿠로시오(黑潮) 海流는 필리핀 루손 섬 隣近에서 발생하여 臺灣 東部를 거쳐 오키나와(沖繩) 열도를 따라 동북쪽으로 北上하는 北赤道 海류로서 이를 통하여 많은 文化要素가 海류 주변의 여러 島嶼地方에 傳達된다는 주장을 한 학자가 많다.

韓半島 南海岸이나 濟州島의 文化要素 중에서도 일부가 쿠로시오(黑潮) 海류를 통하여 왔을 것이라고 主張하는 학자들의 의견이 있어 왔다. 고고학(考古學) 분야에서도 크게 두가지 견해가 있는데 그 하나는 新石器時代 빗살무늬토기(櫛目文土器)에 대한 것이고 다른 하나는 지석묘(支石墓)에 대한 것이다. 전자의 경우 류우큐우(琉球)열도(列島) 관계되고, 후자의 경우는 인도네시아와 關係된다.

특히 後者の 경우는 직접 浮游物을 띄워서 확인하려고 試圖하였는 바, 아직 그 浮游物의 海上 移動 狀況을 정리한 論文이 發表되지 않고 있다. 발표자 또한 濟州島 海안가를 답사하여 최근의 표착물(漂着物)을 확인한 바 있는데, 제주도 南部에 漂着한 대부분의 物件들은 臺灣의 예가 가장 많았던 것으로 기억되고 있다. 이는 최근의 海洋物理學者가 제주도에 근접하는 海류가 쿠로시오(黑潮)해류라기 보다는 臺灣과 中國 南部사이를 흐르는 臺灣海流라는 主張과 맞아떨어지는 것으로 이해되는데, 보다 확실한 것은 금후의 면밀한 검토에 의해서 斷定될 일이다.

앞서 보았듯이 미야코(宮古) 섬의 조개도끼(貝斧)가 필리핀 섬의 것과 유사하고 보다 거리상으로 近接한 臺灣과는 관계가 없다고 한다면, 이는 原始航海나 漂流性航海에 影響을 많이 주는 쿠로시오(黑潮) 海류와 밀접한 관계가 있다고 볼 수 밖에 없다. 이러한 생각을 염두에 두고 금번 이라부(伊良部) 섬에 대한 조사를 통해서 쿠로시오 海류에 의해 移動되는 物質資料를 可視적으로 확인하고자 하였다. 그리하여 이라부(伊良部)섬이 미야코(宮古) 주변의 섬 중에서 필리핀에서 출발하는 쿠로시오(黑潮) 海류가 제일 먼저 만나는 곳 중의 하나임을 着眼하여, 海안가의 漂着物을 調査하기로 하였다. 이라부 섬 중에서도 특히 남쪽으로부터의 漂着物이 많은 下地島와 이라부(伊良部)섬의 사이의 渡口의濱 海안가에서 1시간동안 漂着物을 蒐集하였다.

日本産 혹은 류우큐우(琉球)列島産 것을 제외한 浮游移動이 가능한 外來漂着物로서 20점을 수집하였는 바, 20점 중에 9점이 필리핀 産으로 가장 많고, 다음으로는

臺灣産이 5점이 확인되었다. 그밖에 中國, 인도네시아, 韓國 製品도 각각 1,2점이 있었는데, 물론 지나가는 배에서 떨어뜨린 것도 있어서 각각의 地域에서 흘러오지 않았을 수도 있지만, 대체적으로 필리핀으로부터 출발하는 쿠로시오(黑潮) 해류로 통하여 이동하였을 가능성이 높은 것이 확인되었다. (표 2참조)

문제는 조개도끼(貝斧)의 경우 浮游物이 아니어서 사람의 손을 빌리지 않고서는 運搬되기 어렵다는 데에 있는데, 海流보다는 오히려 사람이 배를 이용한 항해의 결과 필리핀에서 미야코로 傳達되었다고 볼 수 밖에 없다. 그런데 필리핀의 조개도끼(貝斧)와 미야코(宮古)의 그것과 사이에는 이천년 이상의 年代差異가 있는 것 자체가 단순히 海流를 통한 文化傳播에 대한 논의가 문제가 있음을 말해준다 하겠다. 단순히 해류만 이용한 航海라는 것은 거의 漂流性 航海에 가까우며, 다른 航海技術이 隨伴되지 않는 한 이를 통한 文化의 移動과 移植은 限界가 있는 것으로 이해된다.

安里 선생은 미야코(宮古)의 新石器時代는 前期에 土器를 사용하는 集團이 小規模 遺蹟을 海岸段丘上에 형성시킨 것과 달리 後期에 海안가로 내려와 土器는 만들지 않고, 漁撈와 狩獵에 종사하는 집단이 大規模로 遺蹟을 形成하였다고 주장하고 있다. 그에 따르면 前期에는 사람들이 아직 정착하지 못한 단계이고 2500년전에서 1000년전에 이르는 後期 단계에 비로소 보다 많은 人口가 定着하게 되었다고 주장한다. 그리고 조개도끼(貝斧)는 이 後期段階의 유적에서 전부 발견되는 것이다.

그렇다고 한다면 역시 조개도끼(貝斧)라는 文化要素가 전기단계에 설혹 들어왔다고 하더라도 그것이 미야코(宮古)의 한 文化로서 정립되는 것은 역시 보다 오랜 시간과 과정이 지나서임을 말해주는 것이 되겠으며, 이 또한 島嶼地方에 文化가 流入되어 이식되는 과정을 잘 보여주는 예라고 할 수 있겠다.

2) 거석문화(巨石文化)에 대한 논의

미야코(宮古)섬에는 巨石記念物로 인정되는 대표적인 예가 있는데 그 하나는 미야코(宮古)섬의 久見후자키(ぶさぎ)라고 불리는 巨石墓이고, 다른 하나는 미야코(宮古)섬의 실력자였던 나카스니 도우이야마(仲宗根豊見親)의 巨石記念建造物이다. 전자는 한 가운데에 板石으로 짠 石棺墓를 安置하고 주위로도 역시 板石으로 組立한 平面 方形의 담을 짜 맞추어 施設하였다. 후자는 가파른 언덕에 濟州 五賢壇의 組豆石처럼 작은 立石 7개 세우고, 傾斜面에는 돌로 잘 짜맞춘 階段을 造營한 것이다. 階段 下部에는 石室을 꾸미고, 그 앞으로 샘을 파고, 그 앞에 돌담을 둘러 시설을 갖추었다.

무엇보다도 이러한 예가 우선 巨石文化의 範疇에 들어갈 수 있는지에 대한 初步

的인 論議가 필요하다고 본다. 단순하게 생각했을 때, 巨石文化라 함은 보는 사람이 壓倒당할만한 일정 수준의 크기와 숫자를 갖추어야 한다고 생각되는데, 이들을 巨大한 記念碑的 造營物이라고 보기는 어려운 점이 있다. 차라리 巨石이 아닌 一般的인 돌의 文化로 認定하는 수준에서 돌을 통하여 祖上과 子孫, 또는 神과 사람이 만난다는 觀點에서 接近하는 것이 妥當하리라 생각된다.

또한 류우큐우(琉球)북부의 아마미오오시마(奄美大島)에서도 미야코섬(宮古島)이나 이라부 섬(伊良部島)에서 확인되는 巨石墓와 비슷한 무덤의 예가 있다. 해안가의 넓적한 산호바위편을 떼내어서 조립한 것으로 아마미 오오시마(奄美大島)의 북부지역에 많이 분포하는데, 龍郷町 赤尾木の 예가 대표적이다. 다만 차이가 나는 것은 미야코(宮古)의 경우 石棺 周圍로 板石을 두르고 있지만, 아마미(奄美)의 경우는 그렇지 않다는 데에 있으며, 돌 재료 또한 미야코(宮古)의 경우 石灰岩製가 많으므로 相互 差異가 있다고 볼 수 있다.

그러한 차이가 있지만, 미야코(宮古)의 경우는 巨石墓의 概念으로 그리고 아마미(奄美)의 경우 板石墓라는 概念으로 區分하는 것은 잘 이해되지 않는다. 같은 무덤인데도 불구하고, 그러한 名稱 또는 概念의 差異는 葬送儀禮와 관련되는 것인지 分明치 않은데, 이는 학자마다 無意識的으로 서로 다른 이름을 붙인 결과인지 아니면 아마미 오오시마(奄美大島)의 겨우 노로나 家族 墓의 경우이고, 미야코(宮古)의 경우는 實力者의 무덤이라는 측면에서 차이를 반영한 것인지 모르겠다. 대체로 巨石墓 또는 巨石記念物의 개념은 우리나라의 경우 地域集團이나 實力者의 威勢를 反映하는 것으로 이해되고 있기도 하다.

다른 한편으로 이러한 개념의 차이는 류우큐우(琉球) 北部와 南部간에 구분되는 文化圈을 염두에 둔 것인지도 모르겠다. 여러 학자들이 지적하는 것처럼 류우큐우(琉球)열도는 크게 北部, 中部, 南部 혹은 北部, 南部로 나누어 볼 수 있는데, 中部와 南部 혹은 北部와 南部의 경계로 미야코섬(宮古島)과 오키나와(沖繩)섬 사이 수백키로미터의 海峽이 있다. 실제로 여러 考古學的인 側面에서 양 지역의 文化的 區分이 가능하며, 상호 同一 文化圈으로 인정할만한 단계는 쿠수쿠시대(グスク)이후 혹은 류우큐우왕국시대(琉球王國時代)라는 것이다,

분명히 차이지는 것은 아마미 오오시마(奄美大島)의 板石墓와 달리 앞서 지적한 바처럼 묘 주위에 별도로 잘 다듬은 板石으로 둘러싸고 있다. 거의 방형으로 둘러싼 板石造 基壇이 특징인데, 이처럼 石棺墓 周圍에 平面 方形의 板石造 基壇은 15-16세기 濟州의 이른바 王子墓라고 전하는 무덤의 예도 있다. 제주시 禾北洞의 傳 星主의 무덤과 西歸浦 화원동 法華寺址 隣近의 傳 王子墓가 바로 그것이다. 미야코(宮古)의 이러한 巨石墓는 대체로 支配層이거나 外部에서 온 實力者로 이해하

는 觀點도 있어서 상호 示唆하는 바가 있다 하겠다

미야코의 잘 다듬은 巨石記念物과 巨石 무덤에 대해서 14-15세기경 中國 南部 福建省에서 移住한 住民들과 關聯된 것이라고 주장되고 있다. 이에 대해서는 이 지역과 미야코(宮古) 간의 交易 등의 關係記錄과 傳說이 根據가 되고 있다. 中國 南部의 技術者들이 築造하고 그들이 또한 문헌된 것이라고 하는 바, 信仰的인 側面과 技術的인 側面, 그리고 歷史, 口傳 등의 여러 측면에서 多方面에서 接近하려는 점은 重要하고도 示唆받은 바가 많다. 濟州島의 支石墓의 起源을 따지는 논의가 단순히 形態上的의 類似性만 따지고, 그 文化的 歷史的 背景에 대해서는 거의 言及없는 것과는 對照가 된다.

9. 맺음말

우선 고고학자료를 토대로 하여 琉球와 주변지역과의 관계를 通時的으로 살펴 보았다.

대체로 琉球는 중국과 일본 사이에 있는 열도로서 북부, 중부, 남부로 나뉘며, 각각 시기에 따라 주변으로 받는 문화와의 교류양상이 다르다. 선사시대 대부분 북부는 일본 큐우슈우의 영향을 거의 직접적으로 받지만 중부와 남부는 그와 다르며, 중부와 남부 또한 琉球왕국 성립 이전에는 별개의 문화권으로 파악된다. 한편 류우큐우의 선사시대 편년은 일본 본토와 다르며, 무엇보다도 패총시대 후기가 설정되어 일본 본토의 야요이시대·고분시대·헤이안시대 모두에 대응되는 선사시대임이 주목된다. 이는 기원후 1천년동안 도기·철기 생산·벼농사 등이 제대로 이루어지지 않은 제주도의 탐라시대와 비견될 수 있다.

일본과의 관계를 살필 때 야요이시대의 벼농사문화와 고분시대의 스에키(須惠器)·고분문화는 琉球에 제대로 정착하지 못한 것으로 되어 있다. 류우큐우산의 조개제품의 교역에서 알 수 있듯이 그 교역의 주체는 지금까지 알려진 바로는 큐우슈우나 류우큐우열도 북부권으로 이해된다. 그리고 울령국가체제 이후에 주변 속국으로 되지만 독립된 문화권을 유지하다가, 사츠마번(薩摩藩) 침공 후 비로소 일본 문화권에 편입되는 것이다.

중국과의 교류는 화폐와 도자를 중심으로 살필 수 있는 바, 본격적으로 琉球에 중국화폐와 도자가 유입되는 것도 대체로 唐나라 때인 8-9세기부터이다. 그러나 중국과의 도자교역은 다음 쿠스쿠시기 시작 무렵인 12-13세기로서 각지역의 수장세력들에 의해 본격적으로 이루어진다. 동중국해상에서 중계무역지로 두각을 나타내는 것은 14세기대에 들어와서인데, 중국의 조공관계를 맺으면서 中山·南山·北山

의 三山세력을 중심으로 進貢貿易의 형식을 취하면서이다.

한편 한국의 문물로서 琉球에 유입된 대표적인 것으로 고려기와를 들 수 있는데, 이에 대해서는 학자에 따라서는 고려 후기 1273년 제주도에서의 삼별초 봉괴직후이거나 혹은 고려말 조선초에 유이민이 들어 온 것이 계기가 된 것으로 이해하고 있다. 琉球에서 발견되는 한국도자는 조선초의 것으로 추정되는 분청자기 대접이 대부분으로 한국상인이 실고 왔을 가능성이 가장 높으나, 중국상인 혹은 류우큐우인이 운반해 올 가능성도 전혀 배제 못한다.

결론적으로 말하면 琉球와 주변의 韓中日과의 교류관계는 지리적, 역사적, 문화적 여러 조건과 관련하여 다양하게 전개된다고 볼 수 있다. 그 교류방식을 총체적이고도 체계적으로 접근하는 것은 현재의 필자 능력으로서 불가능하나, 금후 류우큐우 고고학의 연구성과를 보다 숙지한 후 재차 접근하고자 한다.

2차년도 조사지인 아마미섬에 관련해서는 고미나토(小湊)의 고고학 자료를 중심으로 대략 살펴보았다. 야광패 유적을 통해서 일본과의 교역, 古墓 출토 중국 도자기를 통해서 중국과의 교역, 그리고 구스쿠 유적을 통해서 오키나와 본섬과의 관계에 대해서 검토할 수가 있었다. 동 자료를 정리, 이해하고 설명하는데에는 거의 대부분이 아마미(奄美)의 현지 고고학자 中山清美, 高利修, 元田信有 선생이 제공한 논문 및 보고서와 류구대학의 池田榮史와 後藤雅彦 선생의 도움에 의한 것임을 밝히고자 한다.

3차년도 조사지인 미야코(宮古)와 이라부(伊良部) 섬과 관련한 논의는 짧은 기간 동안 踏査하고, 몇 편의 論文에 根據하여 본 發表文이 作成되어 誤謬가 많으리라 생각한다. 또한 이라부의 漂着物 蒐集도 體系的이지 못하고 매우 幼稚한 水準의 것이다. 濟州島 考古學을 하였던 立場에서 外部로부터의 文化 流入은 류우큐우(琉球)와 미야코 섬(宮古島)의 考古學者와 共同의 關心事가 아닐 수 없는 바, 같은 島嶼地方의 考古學的 文化에 대한 關心의 表現으로 理解하고 오키나와 現地の 學者들의 많은 가르침을 期待한다.

끝으로 3년간의 류우큐우고고학의 자료수집과 동 지역의 유적답사를 위해 류구대학의 津波高志교수를 비롯하여 池田榮史교수, 後藤雅彦교수, 그리고 유학생 吳盛奎군의 도움을 크게 받았는 바, 이에 감사의 말씀을 드린다. 아울러 본 논문에서 류우큐우 고고학의 연구성과에 대해서 필자가 잘못 이해하고 쓴 부분이 적지 않으리라고 생각되는 바, 이는 전적으로 필자의 책임임을 밝혀 둔다.

参考文献

嘉手納町教育委員会

1994 『屋良グスク』, 嘉手納町文化財調査報告書 1

鎌倉芳太郎

1976 『セルベス 沖縄 発掘古陶瓷』, 國書刊行會(東京)

高宮廣衛

1978 「沖縄諸島における新石器時代の編年(試案)」, 『南島考古』 6

1984 「暫定編年(沖縄諸島)の第3次修正について」,

『沖縄国際大學文學部紀要社會科學篇』 11-1

1996 「開元通寶と貨幣經濟の開始」, 『月刊 考古學ジャーナル』 404

-----・宋文薰

1996 「琉球弧および臺灣出土の開元通寶-特に7-12世紀ごろの遺蹟を中心に」,
『南島文化』 18, 沖縄国際大學南島文化研究所

龜井明德

1993 「南西諸島貿易陶磁器流通経路」, 『上智アジア學』 11

具志頭村教育委員会

1986 「具志頭村の遺跡」, 具志頭村文化財調査報告書 3

國分直一

1959 「史前時代の沖縄」, 『日本の民族文化-日本の人類學的研究』

金武正紀

1998 「沖縄出土の貿易陶磁器」, 『考古學ジャーナル』 427

那覇市立壺屋焼物博物館

1998 『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』

多和田眞淳

1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」, 『琉球政府文化財要覽』

目崎茂和

1983 「琉球列島」, 『沖縄大百科事典』

木下尚子

1996 『南島貝文化の研究-貝の道の考古學』, 法政大學出版局(東京)

當眞嗣一

1975 「沖縄諸島の考古學研究(年表)」, 『琉大史學』 7, 琉球大學史學會

1997 「具志頭城北東涯河洞穴内で發見された明刀錢について」,

『沖繩縣立博物館紀要』23.

白木原和美

1992 「琉球弧の考古學-奄美と沖繩諸島を中心に」, 『琉球弧の世界』, 小學館
(東京)

北谷町教育委員會

1986 『北谷城第7遺跡』, 北谷町文化財調査報告書 2

上原靜

1994 「首里城城郭, 西のアザナの調査」, 『沖繩縣教育廳 文化課紀要』 10

西谷正

1981 「高麗・朝鮮 兩王朝と琉球の交流」, 『九州大學九州文化史研究紀要』 26

石川市教育委員會

1996 『石川市伊波城跡北西遺跡』

小田富士雄

1984 「沖繩九州系彌生前期土器-眞榮里貝塚遺物検討」, 『南島考古』 9

手塚直樹

1980 『伊是名ウフジカ遺跡發掘調査報告書』, 伊是名村文化財調査報告書 5

安里進

1990 『考古學からみた琉球史(上)-古琉球世界形成』, ひるぎ社(那覇)

宇檢村教育委員會

1999 『鹿兒島縣大島郡宇檢村倉木崎海底遺蹟發掘調査報告書』,
宇檢村文化財調査報告書 2

右寄英一郎・高宮廣衛

1968 「伊江島具志原貝塚調査概報」, 『琉球大學法文學部紀要-社會科學篇-』 12

知念勇

1991 「繩文時代から平安時代の沖繩諸島」, 『新版 古代の日本 3 -九州・沖繩』,
角川書店(東京)

池田榮史

1995 「南島と古代の日本」, 『西海と南島の生活文化』, 名著出版(東京)

1998 「물질문화상으로 본 한국 제주도 와 류큐열도의 교류-고려시대를 중심으로」,
『耽羅文化』 19, 제주대학교 탐라문화연구소

沖繩縣教育委員會

1988 『首里城跡』

沖繩縣立博物館

- 1985 『特別展 グスク』
崔光南
1992 「新安海底沈没船はどここの國の船か」, 『考古學ジャーナル』 343
浦添市教育委員會
1985 『浦添城跡發掘調査報告書』, 1985
豊見城村教育委員會
1990 『高嶺古島遺跡』, 豊見城村文化財調査報告書 4
河口貞徳
1978 『サウチ遺跡』, 笠利町教育委員會
宇檢村教育委員會
1998 「鹿児島縣宇檢村 倉木崎海底遺蹟發掘調査概報」 宇檢村文化財調査報告書 1
1999 「鹿児島縣宇檢村 倉木崎海底遺蹟發掘調査概報」 宇檢村文化財調査報告書 2
中山清美
1999 「發掘された奄美のグスク」, 『先史學・考古學論究』 III, 白木原和美先生古稀記念獻呈論文集
高梨 修
1999 「(豫察)小湊・フワガネク(外金久) 遺跡におけるヤコウガイ貝殻利用の實態」,
『サンゴ 礁の 島嶼地域と古代國家の交流』, 第2回奄美博物館シンポジウム
池田榮史
1999 「沖縄貝塚時代後期土器の編年とその年代的位置付け—奄美兼久式土器との關
わりをめぐる—」, 『サンゴ 礁の 島嶼地域と古代國家の交流』, 第2回奄美
博物館シンポジウム
金秉模
1981 「韓國巨石文化 原流에 관한 研究(1)」, 『韓國考古學報』 12
任孝宰
1986 「新石器時代の 韓日文化交流」, 『韓國史論』 16
濟州史定立事業推進協議會・濟州大學校博物館
2000 『河原洞墳墓群』
木原三郎
1990 「奄美大島北部板石墓」, 『笠利町立歴史民俗資料館 館報』 7.
金子エリカ
1993 「巨石の遺蹟-先島例」, 『海洋文化論』, 凱風社
小田靜夫

1992 「黒潮を傳わつた交流」, 『考古學ジャーナル』 352

小野重朗

1989 「奄美大島の板石墓・積石墓」, 『南島の墓-沖縄の葬禮・墓制』, 沖縄縣地域史協議會

安里嗣淳

1993 「南琉球原始世界-シャコカイ製貝斧とフィリイフィン」, 『海洋文化論』, 凱風社

凌純磬

1967 『臺灣與東南亞細亞及南太平洋的石棚文化』

IG-Chan Pang & Tae-hee Kim

1993 On the Origin of the Tsushima Current(1); Barotropic Case, *Bulletin of the Korean Fisheries Society*, Vol. 26 No.6

年代	地域	韓 國		日 本		
		韓半島	濟 州	沖 繩	日本 列島	
紀元前 10000		舊石器時代	舊石器時代	舊石器時代	舊石器時代	
紀元前 1000		新石器時代	有文土器時代	貝塚時代	繩文土器時代	
		青銅器時代	無文土器時代			
紀元 0		初期鐵器時代				彌生土器時代
紀元 500		原三國時代	耽羅時代			古墳時代
		三國時代				
		南北國時代				
紀元 1000		高麗時代			쿠스쿠時代	鎌倉時代
				南北朝時代		
기원 1500		朝鮮時代	耽羅郡濟州牧時代	琉球時代	室町時代	

(표1) 류우큐우열도와 제주도의 時代區分 對比

<표2> 이라부 해안의 외래 표착물 목록

번호	생산지 국명	종류	크기(cm)
1	중국	플라스틱병	高14.7 口徑3.3 底經5.8
2	?	플라스틱병	高21.8 口徑2.7底經5.6
3	대만	종이팩	
4	인도네시아	컵라면	高10.5 底經6.6
5	한국	실리콘통	高22.2 口徑1.5底經4.8
6	필리핀	기어오일통	長19.6 短7.7
7	?	병	高15.4
8	필리핀	플라스틱병	高12.5
9	필리핀	플라스틱병	高4.4
10	?	플라스틱병	高7.0
11	필리핀	플라스틱병	高3.9
12	대만	신발창	長23.0
13	대만	병	高9.7
14	필리핀	플라스틱병	高9.4
15	필리핀	플라스틱병	
16	대만	라이터	高8.0
17	필리핀	과자봉지	長11.5短8.5
18	필리핀	과자봉지	長9.7短6.3
19	필리핀	일회용커피봉지	長7.0短5.8
20	?	과자봉지	長12.0短10.0

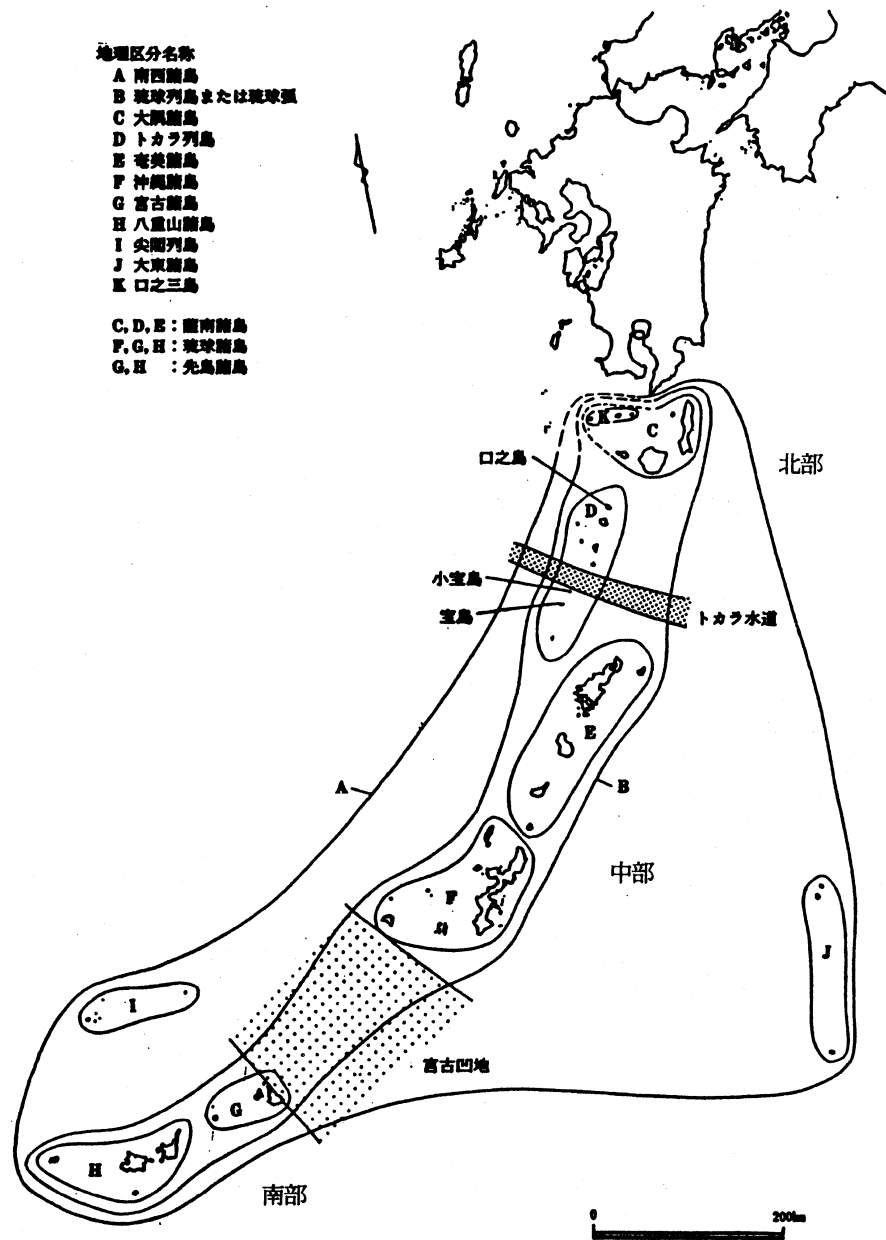


그림 1. 류우큐우열도의 지역구분(木下尚子 1996)

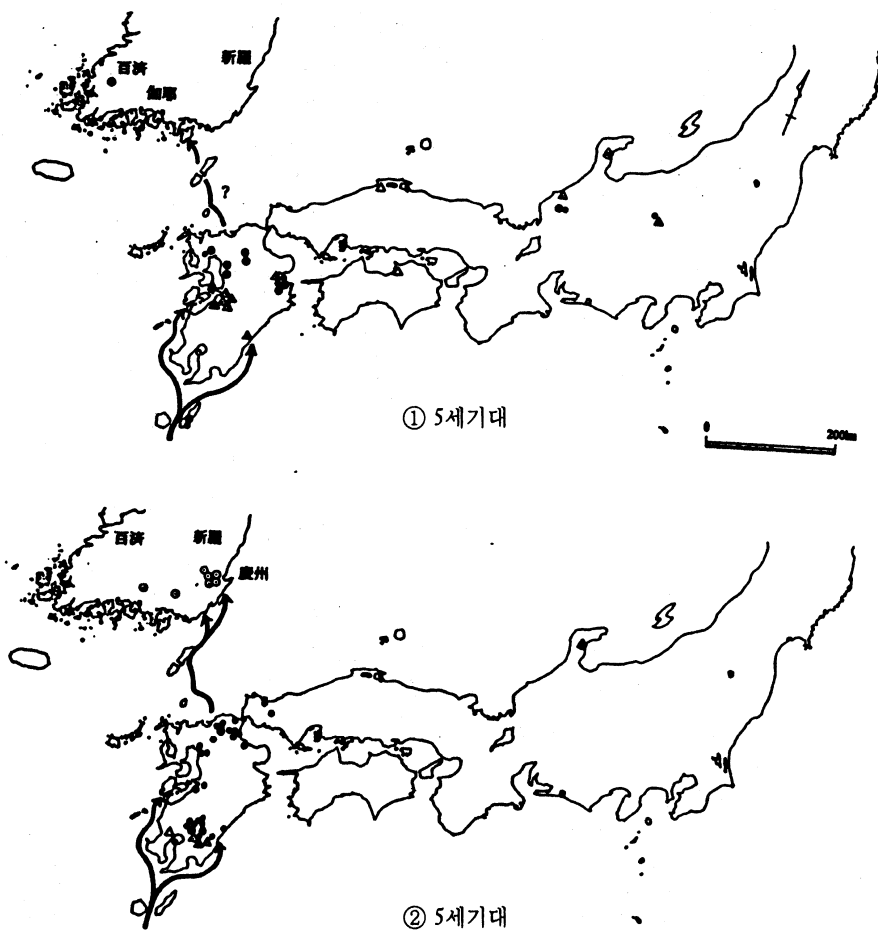


그림 2. 류우큐우産 조개패품의 분포와 유통(木下尙子 1996)

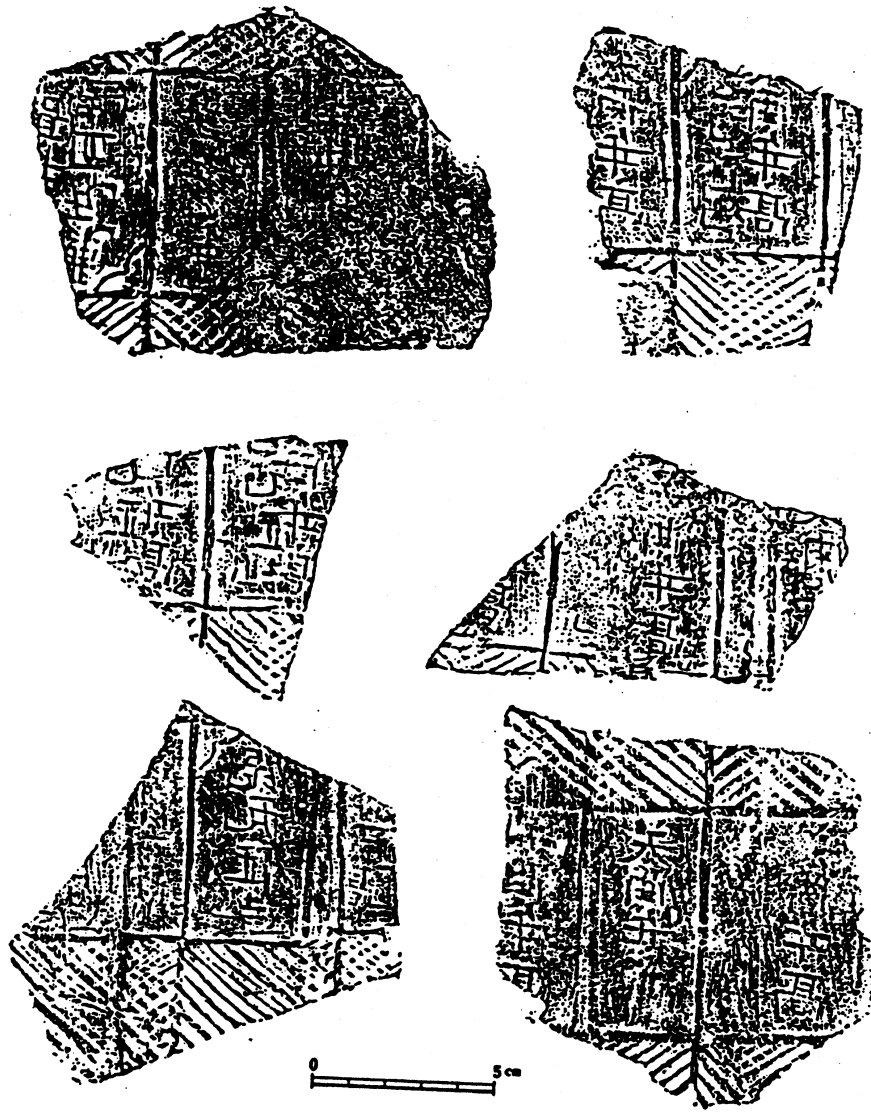


그림 3. 류우큐우출토 「癸酉年高麗瓦近造」銘기와(西谷正 1981)

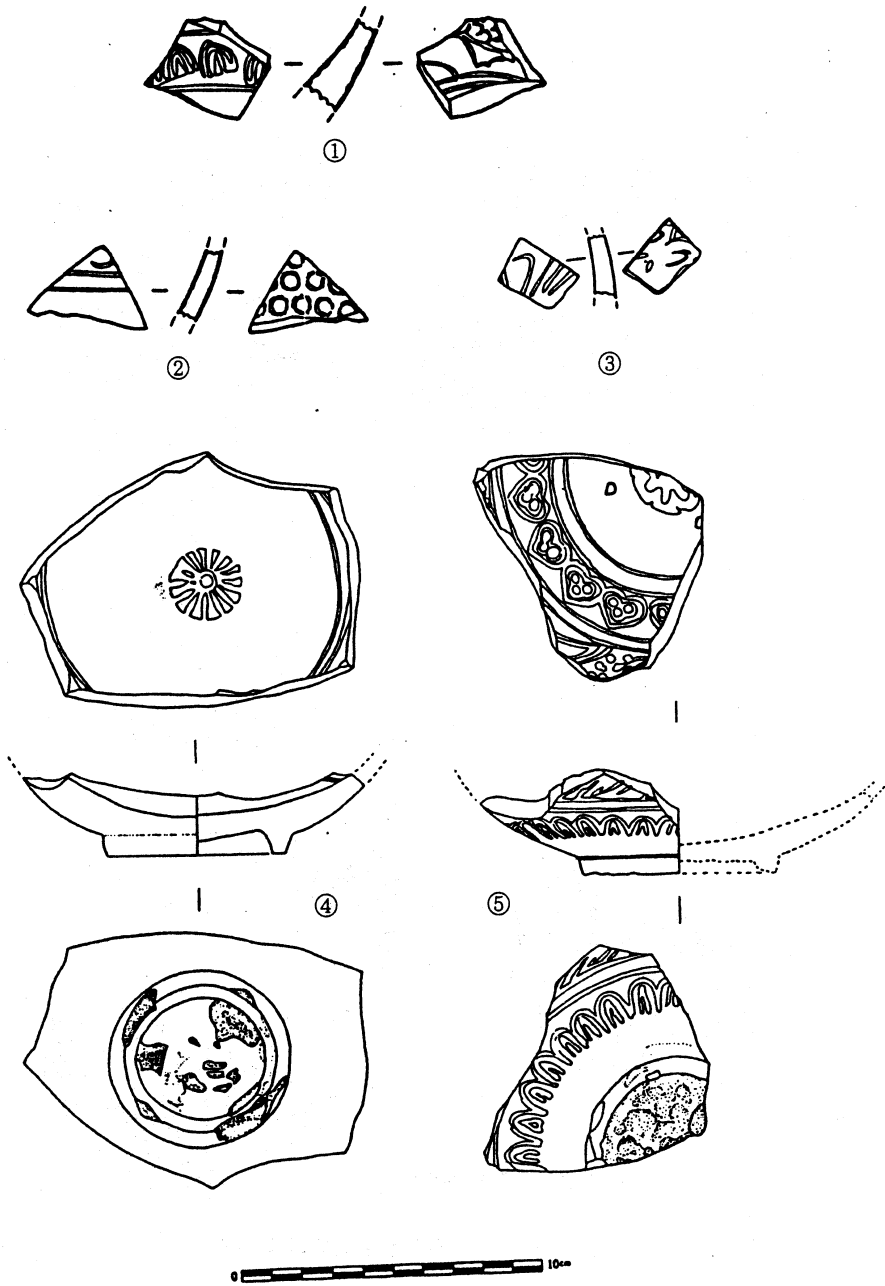


그림 4. 류우큐우출토 분청자기편(①~③ 首理城 ④~⑤ 伊是名城)

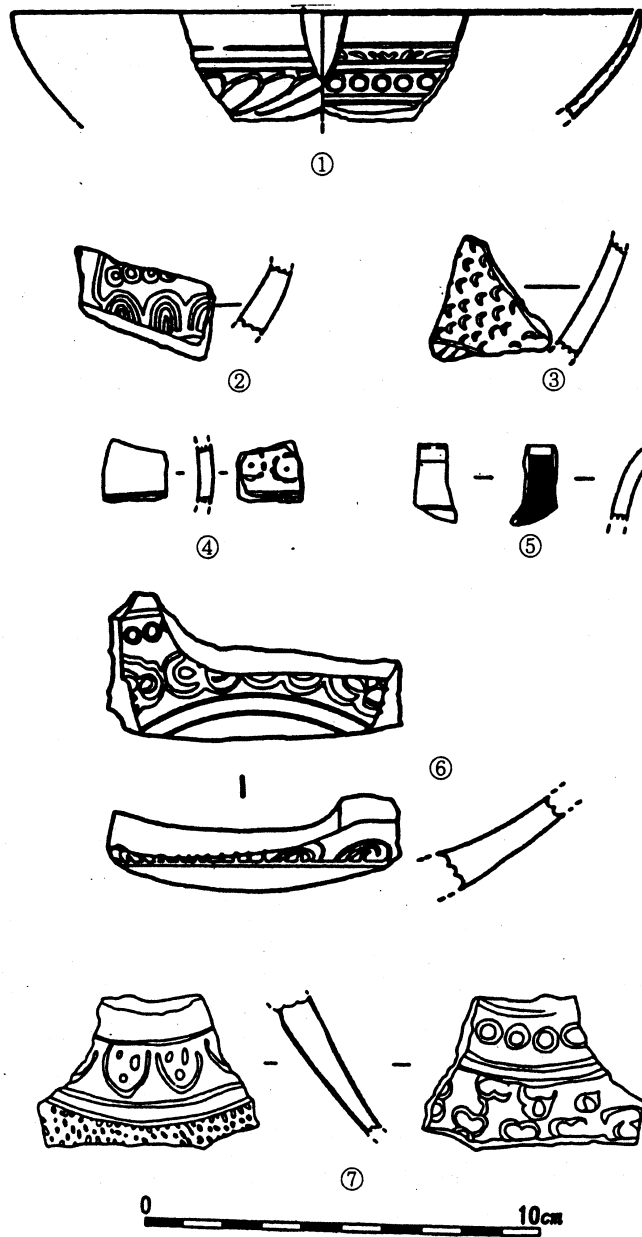


그림 5. 류우큐우출토 분청자기편
 (①~③ 浦添城 ④ 玻名城古島 ⑤ 伊波城
 ⑥ 北谷城 ⑦ 高嶺古島)

[和文要約]

済州島から見た琉球の考古学

李 清 圭

本研究報告書は、1998年から2000年にかけて実施した済州島と沖縄の考古学的比較調査の成果をまとめたものである。1998年に実施した第1次調査については、沖縄本島を中心に沖縄考古学の研究現状を把握し、これに基づき、以下の研究テーマを設定することにした。まず、日本本土と異なる沖縄考古学の編年体系や沖縄考古学の細分された三つの文化圏の概観、最後に日本本土を始めとする中国・韓国との交流に注目した。

- ・琉球列島における文化圏の区分：沖縄・南島・南西諸島など地理学的用語と考古学的な側面から細分された三つの文化圏の整理を行った。
- ・琉球考古学の時代区分：沖縄考古学の独自の編年体系の整理と、合わせて済州島考古学の編年との比較を行った。
- ・日本との関係－弥生と古墳文化：沖縄各地から出土した弥生土器や木綿原遺跡の石棺墓、南海産貝製品の日本本土遺跡からの出土例を挙げながら検討した。
- ・中国との関係－陶磁器と貨幣：沖縄から出土した燕の明刀銭や開元通宝の輸入経路の推定、中国陶磁器についてはその当時の社会的な側面からの考察を行った。
- ・韓国との関係－陶磁器と瓦：韓国との関係は高麗産瓦や主にグスク遺跡から出土する陶磁器から検討した。

次に、1999年の第2次調査については、奄美小湊などにおける現地調査の成果や収集した考古学関連資料をもとに、奄美大島の考古学について検討した。奄美小湊のフワガネク（外金久）遺跡出土のヤコウガイを通して、琉球と九州地方の古代段階の海上交易について考察を行った。また、奄美と沖縄に分布するグスクの性格の整理と済州島の縣城・鎮城との比較も試みた。最後に、小湊の古墓遺跡から出土した南宋代陶磁器に注目し、東中国海における交易体系についても検討を加えた。

最後に、2000年の第3次調査地である宮古島の伊良部の現地調査を踏まえ、貝斧や巨石墓に関する既存の研究成果の検討と所見を述べた。とくに、貝斧については黒潮海流との関係に注目し、漂着物の収集の成果も付加した。宮古の巨石墓については、奄美大島の板石墓や済州島王子墓などとの比較検討も行った。

濟州島村落共同体信仰の変化と持続

－納邑里の醮祭の事例を中心に－

姜 京 希

1. はじめに

韓国の村落共同体信仰は、儒教式の祭祀と巫式の祭儀という二重構造の原理に基づき行われると指摘されている。儒教式の祭祀は、いわゆる男性中心として執り行われる祭祀であり、巫式の祭儀は主に女性中心として行われている。こうした類型は、元来の古代時代から行われてきた固有巫俗祭儀が李朝時代の儒教思想の普及によって、儒・巫という二つの種類の祭儀への変化が生じたといわれる。

元来の固有巫俗祭儀は、女性司祭者によって行われてきた。それが男女共同主管で挙行することになり、儒教の普及が盛行するにつれ、過去の女性の位置を男性が占有するようになった。そして、儒教の影響で儒教式の祭祀が盛大に行われながら、儒教式と巫式が習合された祭儀形式が主流を成すようになったのである。しかし、現代に至って巫俗祭儀を挙行する巫女の激減により、儒・巫習合の祭儀から巫俗祭儀が徐々に消滅していき、現在はほとんど儒教式祭祀のみが残されるようになっている。

村落共同体信仰は、その土地で生活する村民がその村の共同神に対し、村と深く関わる祭場で村民のために祈願する集団祭儀である。その集団祭儀の名称は地域によって、山祭、山神祭、洞祭、洞神祭、堂山祭、距離祭、街里祭、將軍祭、城隍祭、コルメギ城隍祭、本郷祭、醮祭などさまざまに呼ばれているが（朴桂弘 1982: 3 - 4）、その根源は同じである。

日本植民地時代に韓国における村落共同体信仰について調査を行った村山智順は、このような多様な名称を統括して「部落祭」と呼び、「部落祭は生活の地域と条件とを同じくする部落の人々が、その生活を脅かす災害を免かれ、その生活を増進せしむる幸福を求むるが為め神明に祈願し、之に依って何等の不安もなく寧る感謝に充てる平安な生活を楽まんとする目的から、各自その心を一にして年一回又は数回祭祀を謹修する郷土的年中行事の一つである」と述べている（村山智順 1937: 1、朴桂弘 1982: 4 再引用）。

本稿は、2000年11月3日から9日まで済州島納邑里で行われた現地調査から得られた聞き取りや文献資料をもとに、納邑里の醮祭を中心として、済州島における村落共同体信仰のあり方や位置づけを試みようというものである。納邑里の調査の中から、納邑里の村落共同体の生活は儒教思想を基盤として成り立っていること、そして村民がその村の出身であることにどれほど強い自負心をもっているかを、窺い知ることができた。さらに済州島の他の村よりも、村落共同体信仰の儒教式の醮祭の伝統的形式を保存と維持していることが分かった。

加地伸行(1994:4-5)によれば、「沈黙の宗教—儒教、それは日本、朝鮮半島、中国、すなわち東アジア地域をゆるやかに結んでいる大文化である」。儒教は東北アジアの人々の心を根底から把握して練りあげたものであるから、困難な問題が起こったとき、儒教的立場の大本に帰り、そこから問題を観察し、解決の手がかりを得て、人々を納得させることができた、と述べている。

現代社会において、このように儒教的思想に基づいて行われている村落共同体信仰が、長い歴史の流れの中で多くの変遷を見せながらも、村の人々の生活に欠くことのできない精神的要素になっていることについて考察してみたい。

まず、ここでは韓国における村落共同体信仰の歴史的変遷の過程を考察する。さらに済州島納邑里の醮祭を中心として、儒教という大文化の枠組がどのように周辺社会に影響を及ぼし、運用され定着しているのか、またこれからの展望について探ってみたい。

2. 調査地の概況

北済州郡涯月面納邑里は、済州市に繋がる中山間道路の南西部に位置し、済州島の北海岸から2.5キロメートルほど内陸部に入った標高80-90メートルの盆地に集落を形成している。村の起源については、文献上で明らかにされていないが、今から約680年前、高麗時代の1300年頃に人々が入村し、最初は「郭南」のちに「科納」と村名を付けた。それから350年ほど過ぎた1674年、村内に分散し生活していた村の人々が村の中心部に集まり自然村落を形成してきたが、風水により1675年には「納邑」に改名されたと伝わる。しかし、現在までも「科納」という村名が通用している。

納邑里は、儒教思想を基盤に忠・孝・礼を實踐する文郷・班村であると言われてきた。村内に漢文学の書堂を設置し、後世のために教育に力を尽くし、李朝時代には大勢の人材が輩出した伝統的な儒林村であった。このような儒教的な観念は、現在まで村落共同体の生活の重要な基盤となっている。例えば、父母を尊敬し、夫を大事にしない人は人間とし

て認められない。村内に立てられている「孝烈高氏之間」という烈女門や、伝承されている孝子・烈女の説話からも、如何に孝道思想が大事にされているのかが分かる（金行玉編 1984）。

現在、納邑里は「郷会再現示範村」や「孝道示範村」になっており、儒教式で行なわれる村落共同体信仰の「酺祭」は、1986年に「済州道無形文化財第6号」に指定されている。

納邑里の産業経済は、特用作物として胡麻・麦・油菜・芋があるが、1960年代から始まったみかんが今では主な経済収入源となっている。そのほかに共同牧場運営の畜産業なども生活経済を賄っている。かつては、良質なタバコの栽培でも知られていたが、今は栽培してない。

1948年4・3事件の祭、納邑里は疎開令の対象となり、村落全体が焼き払われている。その後集落が復建され現在に至っており、村内の中央道路を境界として東と西に分けて、西上洞、西中洞、西下洞、東上洞、東中洞、東下洞など六つの洞がある。

1946年開校された納邑小学校は、1948年4・3事件の際に全焼したが、1954年に全村民の協力で再建された。また村落会館・老人会館・青年会館の建設、農業用水、道路整備、電気施設、みかん下置場、搗精工場などの開発事業が推進され、生活は近代化した。道路整備によって済州市内から納邑里までは車で30分ほどになった。

しかし、1980年代に入り、済州島社会の産業化・都市化が進むにつれ、納邑里村落から都市への人口流出が顕著になった。納邑里の公式的な統計によれば、1977年（済州大学耽羅文化研究所 1990：23）には460世帯で男985名、女1017名、計2002名であったが、2000年（納邑里事務所提供）には463世帯で男713名、女696名、計1409名である。約23年の間に世帯は3世帯増えているが、逆に人口は30%の減少を見せている。

特に若年層の離農の現状は深刻な問題となっている。こうした実情は、1997年に完工した19世帯の多世帯住宅の建設事業がよく示している。この建設事業は、廃校の危機に直面した納邑小学校を残すために推進された。納邑里では、多世帯住宅を建てて、小学生のいる若年世帯に無償で提供した。これは、「小学校の存在が、まさに村の生き残りにつながる道である」という信念で村民のすべてが協力し、村落の維持や発展を求めて行った事業であった。

納邑里には、1986年「天然記念物第375号」に指定された「錦山公園」という暖帯林地帯があり、このなかに村落共同祭の酺祭を行う酺祭壇が設置されている。村内にある宗教施設は、大韓仏教曾溪宗月印寺をはじめ、1969年には大韓仏教龍華宗彌勒仏青龍寺、1975年には大韓基督教イエス長老会納邑教会と韓国日蓮正宗仏教会済州道総本部西部地域納邑班が建立された。仏教の信者は200人ほどいるが、その他の宗教の信者は少ない。

さらに村には、元来の固有巫俗信仰の祭場の「本郷堂」である「ハルマンドン（堂）」があるが、ここでは村落共同体信仰のレベルでは祭儀を行わず、個人レベルの祭儀が行われているだけである。

このように納邑里は、今日まで儒教思想の影響が強く残されているために、巫俗信仰や外来宗教に対しては厳しい現状が見られる。

3. 村落共同体信仰の歴史的変遷の過程

(1) 巫俗祭儀から巫・儒教式祭祀へ

韓国における村落共同体信仰の祭名は、一般的に「洞祭」または「堂祭」という。(李杜鉉外 1991 : 180)。この洞祭と堂祭は、すでに新羅、高句麗、百濟以前の古代社会で発生した集団祭儀で、現在に至るまで韓国の多くの宗教現象のなかで地縁的結束や和睦を図る祭儀として、人々の生活に多様な機能を果たしている代表的な民間信仰の一形態である。

既述したようにその祭堂の名称は、京畿、忠清各道では山祭堂、山神祭堂、江原道では城隍祭、全羅、慶尚各道では堂山、済州道では本郷堂、醮祭壇など地域によって様々であるが、根本的には同じものである。「堂」は、「大庁」（家の中央にある板の間）、「小屋」、「神仏の前に立てる旗」、「祭祀の場」、「多くの人が集まる場」などの様々な意味を含んでいる（朴桂弘 1982 : 3）。さらに堂は村落を単位として、村民が集まり村に関する事項等を討議し、堂神を奉安する場所となっており、村の政治や経済と密接な関わりがあるとされる。

洞祭の歴史は古代部族国家の巫俗的祭天行事まで遡ることができる。扶余の「迎鼓」、濊の「舞天」、韓の「天神祭」、高句麗の「東盟」のような祭天行事は古代部族社会では祭政一致の民族祭儀としての民衆的年中行事であり、秋収感謝祭の農耕儀礼でもあった（李杜鉉外 1991 : 182 - 183）。

こうした儀礼は、新羅時代に至っては宮中儀礼となり国家レベルで行われてきた。高麗時代では「八閔会」をはじめ、「燃灯会」など土俗神信仰と仏教思想が習合された形態の国家宗教的な大行事への変化が見られる。さらにこのような集団的民族祭儀は、各地域で村落レベルの集団祭儀を生じさせており、それが今日の各地域で伝承されている洞祭である。

ここで注目すべきは、このような祭儀には必ず踊りと歌が伴ったという事実である。舞踊は神霊と人間が交際する宗教的技術として、神を迎え、迎えた神を喜ばせ、また神を愉快にお送りするという意味が含まれている。

ところが、李朝時代の治国理念である儒教思想は、固有思想時代の巫俗的民族信仰に大

きな変化をもたらした。元来女性司祭者によって執り行われてきた集団的民族祭儀は、男女共同主管で挙行されるようになり、高麗時代には官から公認された。だが、李朝時代になって儒教が男性社会に普及され、官の儒教式祭儀の形式と神祇を導入し、男女両性の信仰構造と堂祭が分離されることになった。男性は土俗信仰の土台の上に儒教式祭祀を構築し、女性は元来の巫俗的祭儀を守り続け現在に至っているといえるのである。

要するに、韓国では部族国家単位の巫俗的農耕儀礼、氏族共同体単位の季節祭、国家儀礼などは高麗時代の八閏会、燃灯会を最後に無くなっており、儒教の影響で儒教式と巫式が習合された祭儀形式が主流を成すようになった（朴桂弘 1982：580）。

しかし現代に至っては、巫俗祭儀を担う巫女の激減により、儒・巫習合の祭儀から巫俗式祭儀が徐々に消滅していき、現在の洞祭はほとんど儒教的祭祀のみが残っている状況であるといえる。

(2) 村落共同体信仰に対する弾圧と再創造

現在、村落で挙行されている共同体信仰の祭儀は、韓国における歴史的、社会的、文化的変動の中で、中央や地方の行政的、社会的権力者などの外部的、内部的な様相によって何回も厳しい弾圧を受け、中止または消滅したり再生したりしてきたことは事実である。

歴史的に考察してみると、まず李朝時代の儒教政策は固有の巫俗祭儀を禁じ、士大夫層が城隍祭などの巫俗祭儀を行うことを杖罰で規制し、また巫女に対しては、その祭儀行為を行わないように取り締まりを強化し弾圧してきた。済州島でも儒教の影響が及び「郷校」が設置され、巫俗祭儀の民間信仰は強い弾圧を受けたのである。一つの例を挙げれば、李朝時代の肅宗の時、済州牧使李衡祥は、淫祠と佛宇 130ヶ所を焼き払い、また巫女 400人ほどに対して、巫俗祭儀の行為を規制し抑圧したと記録されている（李杜鉉外 1991：184）。

それ以降、いわゆる迷信打破の政策としては、日帝総督府の権力者によって、また日本植民地からの解放後は、国内における左翼系やキリスト教、新生活推進委員、セマウル運動の管理者などによって実施されてきた。こうした迷信打破の政策によって、1969年済州島では 135ヶ所の神堂と祭壇が破壊されたが、そのことから全国的にどれほど多くの神堂と祭壇が破壊されたのかが推察できる。特に 1970年代のセマウル運動によって、一層多くの神堂と祭壇が破壊されており、村落共同体の祭儀までも廃止されたのである（韓国文化広報部文化財管理局 1992：118 - 120）。

こうした中でも、長い歴史の流れとともに保存され伝承されてきた村落共同体信仰を人々は無視できず、弾圧を受けながらも社会の底辺に根を下ろし現代まで引き続き行われているのである。ただ村落共同体信仰は歴史的・社会的変化に伴い、儒教の影響で固有の

巫俗祭儀の形態に変化が見られる。いずれにしろ、韓国の近代化の生活政策は儒教式の祭祀でも廃止や弾圧の対象とし、村落共同体信仰自体を打破し根絶しようとしたといえるだろう。

韓国の経済的発展に伴って西欧文化の導入が激しくなるにつれ、現代社会における村落共同体は解体、崩壊などの深刻な危機を迎えている。それでも、1980年代後半からは伝統文化が再認識、再評価され、村落共同体信仰は新たに復活、強化されることとなり、また道、市、郡などの行政的次元からの支援が与えられ、再創造されるような状況が現れている。

4. 済州島納邑里の村落共同体信仰

上述の通り、韓国の村落共同体信仰のように済州島にも二重構造の原理に基づき、村落共同体の祭儀は行われている。済州島では、男性が中心として挙行される儒教式の村落共同体の祭祀を「醮祭」とし、その祭祀が行われる祭壇を「醮祭壇」または「醮祭ドンサン」という。醮祭は、郷校の稷奠祭のように儒教式に基づき行われる。醮祭の名称は、村によって農醮祭、里醮祭、里社祭、大祭、堂祭、洞祭、街祭など様々であるが、済州島では、醮祭という名称を普遍的用語として用いる。一方、女性を中心として挙行される巫俗祭儀は、「ダン（堂）グッ」といい、「ハルマンダン」の「本郷堂」で行われる。

ここでは、納邑里の醮祭を中心に村落共同体の信仰を考察してみたい。納邑里では巫俗儀礼を行う本郷堂があるが、村落共同体レベルの祭儀は行わず、主婦達が個人レベルで祭儀を行っているにすぎない。さらに現在は村の出身のシンバン（巫女）がおらず、また巫俗儀礼に対する村の人々の関心が薄れているので、醮祭に限りみてみたい。

納邑里の醮祭は、1986年4月10日に「済州道無形文化財第6号」に指定されており、醮祭壇は、1986年2月8日に「天然記念物第375号」に指定された暖帯林地帯の「錦山公園」の内に設置されている。祭場は、常緑樹がこんもりとした公園の真ん中に石を築き造っており、祭場の回りは自然石で城のように石垣を築きあげている。祭場の広さは、東西8メートル、南北15メートルであり、「西神壇」と「土神壇」は北向きの正面に、「醮祭壇」は東向きに置かれている。西神壇の左側には望燎位があり、土神壇と醮神壇の右側には直六面体の石が置かれている。若者が祭式を忘れないために、3人の献官の拝位の場所にはブロック大の石を用意し、その石に初・巫・終と掘って設置している。祭場の南側には祭祀の際、祭官達が物忌みする場所である祭庁の建物がある。

納邑里の醮祭は、済州島のなかでもその伝統性や原形が一番よく保存されていると言わ

れているが、文献にはいつから村で酹祭が行われていたのか、ということについての記録はない。ただ郷土史（金行玉編 1984）によれば、1684年（肅宗 10年）村に凶年となり、牛馬などの家畜の伝染病が広がった。そこで錦山の中央に祭壇を設け、春秋に山川神祭を行ったとされている。ところが、1702年（肅宗 28年）から1706年（肅宗 32年）の間、濟州島の地方牧使によって巫俗祭儀が迷信とされ禁じられることになり、納邑里の山川神祭は行うことができなかつた。しかし、1719年（肅宗 32年）飢餓や疫病の発生が村に続いてきたために、村民の願いが中央の朝廷の管理者に伝えられ、祭儀は復活されることになったと記録されている。

村の人々は現在、納邑里ではかつてから「酹祭」のみ行われてきたと述べているが、かつてという時間的観念が曖昧であり、むしろ時代の変遷に伴い、山川神祭が儒教の影響で儒教式の酹祭へ変わってきたのではないかとと思われる。

酹祭の祭儀対象となる神は村によって異なるが、納邑里では西神・土神・酹神の三つの神様が祀られている。「西神之位」は麻疹神であるが、かつて恐ろしい麻疹が村に流行した際、村民が病気にかからないように祈願した神で、現在では祀られていない。「土神之位」は村落守護神であり、「酹神之位」は各神として人物災害之神である。土神と酹神は、主に村の豊饒や安全や繁栄を祈り祀られている神様であり、一般にこの神は濟州島の他村でも祀られている。

納邑里では、従来年2回の酹祭、すなわち春祭と秋祭が行なわれていた。春祭は旧暦正月の上丁日、秋祭は旧暦7月上丁日に行われてきたが、1970年代から村の人々の決議によって秋祭は廃止され、毎年春祭のみ現在まで行われている。ところが、村内で上丁日に不浄なことがある際には祭儀を行わず、別の日の亥日に行なっており、いわゆるこれを「或丁或亥」という。祭儀の挙行時間は、夜の子時である。

祭儀の管理は、村の男性によってなされている。酹祭に関わる諸事項、例えば祭官の選出や祭儀の予算など、祭儀を行うことと関わるすべてのことは、村の総会である「郷会」で決められ執行される。かつて郷会は郷長によって開かれてきたが、1910年以後郷長制がなくなってからは里長を中心に会議を行われている。郷会は祭儀の10日前ほどの年初に開く。祭儀の費用は村の公金や村の有志の寄付金で当てられているが、現在は一世帯当1000ウォンずつ出している。里長によれば、納邑里の酹祭は無形文化祭と指定されているために、10年前から濟州道庁より支援金（約150万ウォン）が与えられているという。

祭官の選出に関して村人の説明を借りれば、「体がビリン者」は祭官になれない。ビリンという意味は、その年に家族に亡くなった人がいたり、人間や犬など動物の死体を見たり、体に腫れ物があったりすることを指しており、そのようなことで体が汚れていることをい

う。妻が月経中の人にもビリン者とされる。

祭官は初献官、巫献官、終献官など 12 人で構成されており、その役割は次の通りである。

初献官：神に最初に酒盃を献ずる役。

巫献官：神に二度目に酒盃を献ずる役。

終献官：神に三度目に酒盃を献ずる役。

執礼：笏記の奏上、祭儀の執行や司会を担当する。

大祝：祝文を奏上する。

賛者：執礼を補佐する司会役。

謁者：執礼の笏記の通り祭官を案内する役。

奉香：焼香する役。

奉炉：香炉を捧げる役。

司樽：酒盃に酒を注ぐ役。

奉酌：酒盃を受けて献官に渡す役。

奠酌：献官から酒盃を受けて祭卓に置く役。

それ以外に、典司官がいるが、その役割は供物の準備などの管理を担当する。

祭官としては学識や徳望のある年輩者の中から献官に選ばれていたが、最近では里長が初献官の役割を果たしている。執礼は祭儀の手順に上手な人、また大祝は祝文（注 1）を告げることに上手な人が選ばれている。納邑里では、献官、執礼、大祝、賛者、謁者の祭官は 50～60 代の年輩者達が担当しており、それ以外の祭官は 30～40 代の若年者が担当し、年輩者と若者が共に参加し村の様々なことについて話し合っている。

さらに祭官に選ばれた人々は、祭日の 3 日前祭庁に入り合宿して齋戒する。これを「三日精誠」という。祭儀を行う前後に不浄なこと、村人の説明によれば、死体を見たり、馬、犬の肉を食べたりすることなどがないように、祭官は勿論、村民のすべてが心をこめて精誠をしなければならぬ。以前は祭儀を行う際の礼服や儒巾を各自準備したが、現在は一括して用意している。

次は供物についてみる。供物は、祭日の前日に用意して置き、子時の少し前に供え、子時に祭儀を執り行う。供物は、稲・梁・黍・稷の四種類のご飯、黒い雄の豚（犠牲）、幣帛、果物、祭酒、海魚、野菜類などである。ご飯は、稲・梁・黍・稷の四種類のご飯を一器ずつ供えてきたが、生産されないものがあつたために、梁の代わりに稲飯二器、黍・稷の代わりに粟飯二器を供えている。現在は、稲飯と粟飯一器ずつ供えている。犠牲の豚は、西神・土神・酏神の三つの祭壇に一頭ずつ供えてきたが、現在は西神壇では祭儀を行わない

ので、土神壇と酏神壇のみ供えている。犠牲は内蔵を処理した、生の豚を供えることをいう。幣帛は明紬、白紙を上げる。果物は栗・棗・榎子・橘・梨、祭酒は甘酒を用いる。海魚は脯の代わりに焼き石持一尾を供えており、野菜は青芹を用いる。

祭儀は供物を供えた後、子時になると、執礼の笏記の奏上によって開始する。手順は、奠幣礼、初献礼、読礼、重献礼、終献礼、撤辺豆、望燎位の順で行っており、これは郷校の積奠祭と大同である。一般に他村でもこのような手順によって行われている。しかし、納邑里では三神位が祀られているために、奠幣礼を行ってから、各献官が土神、酏神、西神の順で祭儀を行う。その後、献官 3 人が原位置に戻って四拝する。撤辺豆は飲礼の後、祭官が祭器を下げることであり、望燎位は祝文を焼く場をいう。

祭儀が終わると、祭官と村の人々は犠牲の豚をはじめ、祭物を飲福（直会）しながら村の様々なことについて話し合う。かつては女性は祭儀に参加することができなかったが、約 10 年前から女性も参加して手伝っている。しかし、女性が祭官になることはできない。このような飲福ということを通じて、村落共同体に対する意識を再構築する。さらに村の人々は村の成員としてのアイデンティティを再確認するといえよう。

5. 考察

以上のように、納邑里の村落共同体信仰の酏祭について考察し記述してみた。さらに現在、存続している祭儀の歴史的背景を理解するために、韓国における村落共同体信仰の変遷の過程を探ってみた。

既述したように村落共同体信仰とは、生活基盤をともしする村の人々がその生活を脅かす災害から免れて、何の不安もなく幸福な生活を営むために、一体感を形成し村の共同神に祈願を行う村落の年中行事をいう。これは、村という社会共同体に基づき行われる集団祭儀である。その祭儀が儒教式であれ、巫式であれ、どのような形式にかかわらず、村の人々にとっては毎年欠くことのできない、集団祭儀が執り行われることこそが大事な行為のように考えているのであろう。つまり、村落共同体信仰はその土地の人々が生活の中から案出した生活習慣ともいえるものである。それゆえに祭儀の周期性や連続性というものは、祭儀が行われる村の社会構造のなかで考察すべきであろう。

このようなことを踏まえ、生活や社会という場で行われている納邑里の村落共同体信仰から、若干の点を取り上げて試みたい。

第一は、祭儀の類型の問題である。現在納邑里で行われる村落共同体の祭儀の酏祭は、巫式の祭儀から儒教式の祭儀への変遷したのではないか、ということである。

郷土史（金行玉編 1984：34）によれば、納邑里で村の人々が村の中心に集まり、約 100 戸に達する自然村落を形成したのは、李朝時代の 1600 年代の後半頃である。納邑里では 1684 年、何十回の病苦や凶年が生じ、錦山という畑に祭壇を設けて春と秋に山川神祭という祭儀を行ってきた。

ところが、李朝時代の儒教政策は、巫俗や仏教を抑圧して巫俗祭儀の存在を否定してきた。それゆえ 1700 年代に入り、納邑里で行われていた山川神祭が迷信とされ禁止されてきたが、飢餓や怪疾の発生が絶えず、村の人々の切なる願いによって祭儀を行うことが許容され復活している。

しかし、その時代の儒教思想が日常生活の規範と礼節として位置づけられていた村では、儒教的要素が巫俗祭儀に加えられ、男性が主管する儒教式の祭祀へ変化し、村落共同体の祭儀が行われてきたのではないかとと思われる。なぜならば、この李朝時代には今までの固有の巫俗的集団祭儀が禁じられ、儒教思想の普及とともに男性の主管する儒教式祭祀が普遍的信仰に変わり、新たな儒教式の村落共同体信仰が行なわれていたからである。

第二は、祭儀の空間的・時間的構造の問題である。村落共同体信仰は、歴史的、政治的、社会的、文化的な諸要素を考えたうえで、そのあり方や位置づけが可能であろう。というのは、村落共同体信仰は村落の構造や機能を示すものであるために、村落共同体の祭儀には社会構造の変化が反映されるからである。さらに村落共同体信仰の盛衰の状況によって、村落の社会構造の変化などの様相を把握することができよう。

それゆえ、村落共同体信仰は巫俗祭儀から巫・儒教式祭儀へ変化したという信仰の類型的变化の問題のみに注目し把握するのではなく、その祭儀と関わる人々が生きている社会・文化のなかで、いわゆる生活の場で考察すべきであろう。

納村里の村の人々は儒教思想を何よりも重要とし、その秩序に基づいて村落共同体の生活を営んでいる。村の人々は伝統的儒林村であることを非常に誇りを持っており、そのような儒教的観念は、現在村落共同体の精神の基盤となっている。現在、孝道示範村と指定されていることから、如何に孝と礼の思想を実践する村であるのかが分かる。こうした村落で、儒教式の祭儀が従来の通りその伝統性を保存や維持し行われていることに、祭儀の重要性や価値があるといえよう。

1970 年代、韓国社会に広がったセマウル運動によって、韓国全土で祭儀が禁止され、祭壇や祭堂が破壊された。しかし、村人の説明によれば、済州島納邑里ではこうした政府の政策や地方行政管理者による厳しい取り締まりがあったにもかかわらず、祭儀を中断せず保存し維持してきたという。

儒教式の祭儀は、限られた祭官によって静粛に行われる。祭官の選出の際には、儒教思

想に基づいた位階秩序が見られる。つまり、村落共同体の儒教式祭儀には、その土地の位階秩序が反映されており、それこそが村の生活の秩序である。しかし、納邑里ではこうした祭儀が行われるまでに、村のすべての人々は禁止されている事項を守り、また祭儀を行った後、飲福という行為を通して祭儀に参加している。このようなことから見ると、男女の区別なく村のすべての人々によって行われる共同体の集団祭儀であるといえる。

このような側面を考慮すると、村落共同体信仰は祭儀が行われる生活や社会という場の空間的構造、つまり地域的状况や条件によって、また社会的、文化的、歴史的変動という共時的・通時的構造によって、その現状が明らかに見えてくるのではないか、と思われる。

第三は、祭儀を通してみた中心と周辺の問題である。加地伸行（1994）が述べたように儒教は日本、朝鮮半島、中国、すなわち東アジア地域を結んでいる大文化である。特に韓国の場合、李朝時代以降、儒教は一つの宗教というより、生活規範や慣習のようなものであり、儒教的観念に基づいて社会的秩序や倫理、また人々を支える精神が成り立ってきたのである。

韓国の行政区域でいえば、納邑里は行政の末端組織である。済州島は韓国の周辺社会や文化の一つをなしており、さらに済州島を中心に考えれば、納邑里は済州島の周辺社会や文化を形成する一地域である。

1970年代以降、韓国は高度経済成長によって、産業化・都市化が進み、その影響は農村や漁村まで至り村落共同体の解体の危機を迎えていたのである。また社会変化に伴って、村落共同体信仰が消滅したり、中断したりした傾向が現れている（姜京希 1997）。

しかし、納邑里では外部社会の影響による変動にもかかわらず、儒教思想に基づいた村落共同体の生活を現在まで維持し営んでいる。そのような要素は村落共同体信仰を通してよく現れている。納邑里で行われている村落共同体の酬祭は、済州島無形文化財に指定されており、伝統文化を守ってゆく村として他地域の見本となっている。納邑里の祭儀は、現代社会における村落共同体信仰として新たに評価され認められているといえる。

こうした祭儀を通して成している村落共同体の一体感は、社会変化による村の過疎化や高齢化の現象によって、廃止の危機に直面していた納邑小学校を存続させるために、村の人々の協力のもとに多世帯住宅を建てて無償で小学生のいる家族に提供している。言い換えれば、外部の様々な要素で村の伝統的な生活が解体され、崩壊する危機に置かれた際、村落は酬祭という村の行事を通して、新たな生活の活力源となる求心的力を求めており、村を再構成し統合している。

納邑里のような周辺社会に根を下ろしている祭儀の文化が、済州島の他地域または韓国全体の中心社会に及ぶ影響を考えねばならないのであろう。韓国では、1980年代の後半か

ら伝統文化を見直すという動きによって、迷信とされて禁じられた様々な祭儀についての再検討と再評価が行なわれているからである。例えば、濟州島では 1990 年代に入り、各村落の酺祭壇を再整備し、行政的次元で酺祭の祭儀費用が支援されているような傾向が現れている（姜京希 1997：108）。

こうした状況から考えれば、中央と周辺という枠組は地理的、環境的境界を乗り越えるものであり、周辺社会・文化が中心社会・文化を作り出すような現状をも考えなければならぬのであろう。

どのような文化でも、それが作られ伝承されていくには、その役割や機能があることに注目し、客観的な価値や機能を把握する必要がある。常に社会的、文化的変動が、どの時代にも存在するのは事実である。こうした変動のなかで、現代社会において我々の生活の場と密着している祭儀は、社会表層の一つとしてその堅実なあり方や位置づけを考慮すべきである。

6. おわりに

濟州島納邑里の酺祭の事例を中心に、村落共同体信仰の変化と持続について考察してみた。今回の「環東中国海における二つの周辺文化に関する研究—沖縄と濟州の‘間地方’人類学の試み」という題目のプロジェクトによって行われた濟州島納邑里における現地調査では、韓国、日本、中国の儒教文化圏という大きな枠組のなかで、周辺社会や文化を考えて見たかった。そこで納邑里の村落共同体信仰の一つの手がかりとして、環東中国海に囲まれている周辺社会や文化を理解し位置づけを試みた。

濟州島納邑里の社会的、歴史的背景を探りながら、その村落共同体の生活の場で行われる祭儀を調査したが、限られた期間の現地調査であったために、村落における民間信仰の様々な様相をすべて把握することはできなかった。しかし、納邑里の人々のお話から、村落共同体信仰は、儒教式の祭儀、つまり酺祭が如何に重要な行事であり、村の人々の精神生活に影響を及ぼしているのかが明らかになった。

納邑里の村落共同体の祭儀を通して、現代社会における祭儀のあり方や位置づけについて次のようなことがいえるだろう。村落の社会構造が変わったり、組織が弱くなったりした際、祭儀は弱化されるか、中止または廃止される。現代社会において祭儀が急速に消滅しているのには、こうした社会変化が反映されているといえる。一方、社会変化によって統合性が弱くなることに対して、村落共同体信仰は新たな勇気や活力源を求め、統合の力を与える機能があることを見逃さないであろう。

今回の調査の成果を踏まえ、儒教以外の仏教や道教、さらにキリスト教のような西欧宗教による村落共同体信仰の現状をはじめ、民間信仰の諸様相や側面を考察し、また環東中国海周辺の多くの他地域との比較研究することを、今後の課題にしたい。

謝辞

今回の調査は、2000年度文部省科学研究費補助金日韓共同研究(研究代表者:津波高志)の一環として行われたもので、私は研究協力者として参加させて頂いた。

濟州島納邑里の調査にあたって、納邑里金運玉里長をはじめ、金彰根老人会会長、文熙相開発委員長、並びに多くの方々のご協力を頂き、お礼を申し上げたい。特に金仁昌前老人会会長からは、村の案内や説明、また様々なお話を聞かせて頂いた。この場をかりて皆様に深く感謝を申し上げたい。

注

注1. 醮祭祀

維歲次云云 幼学姓名 敢昭告干

醮神之靈 伏惟醮神 除灾降福 保我人民 報賽無斃

土神之靈 保良社神 惠我恩德 願賜物豊 長養寿域

西神之靈 降臨西神 善養兒輩 以賜紅疫 全然無頃

謹以犧幣 醮齋粢盛 庶品式陳 祇薦干神 尚饗

(『濟州島部落誌』(II)、濟州大学耽羅文化研究所 1990:81)

参考文献

(著者名は、アルファベット順になっている。)

濟州大学博物館

1998 『北濟州郡の文化遺跡(II) 一民俗一』(韓国語), 北濟州郡。

濟州大学耽羅文化研究所

1990 「北濟州郡涯月邑納邑里」『濟州島部落誌』(II)(韓国語), 濟州:濟州大学耽羅文化研究所, pp. 18 - 103.

涯月邑

1997 「納邑里」『邑誌』(韓国語), 涯月邑誌編纂推進委員会, pp. 277 - 303.

韓国文化広報部文化財管理局

1992 竹田且・任東権訳『韓国の民俗大系—韓国民俗総合調査報告書』第5巻, 濟州道篇, 東京: 国書刊行会.

張寿根

1975 『韓国の民間信仰』論考篇, 東京: 金花舎.

加地伸行

1994 『沈黙の宗教—儒教』, 東京: 筑摩書房.

姜京希

1997 「濟州島漁村の近代化と宗教変化: 加波里の事例を中心に」『濟州島研究』第14集 (韓国語), 濟州学会, pp. 81 - 156.

金行玉編著

1984 増補『納邑郷史—濟州道沿革』(韓国語), 北濟州郡涯月邑納邑里, ソウル: 平凡社.

高麗大学校民族文化研究所

1982 『韓国民俗大観』第3巻 <民間信仰・宗教> (韓国語), ソウル: 高大民族文化研究所出版部.

李杜鉉・張寿根・李光奎共著

1991 『韓国民俗学概説』新橋版 (韓国語), ソウル: 一潮閣.

村山智順

1937 『部落祭』朝鮮総督府.

納邑里

1990a 『納邑消息』創刊号 (韓国語), 納邑里.

1990b 『納邑消息』第2号 (韓国語), 納邑里.

1991 『納邑消息』第3号 (韓国語), 納邑里.

1993 『納邑消息』第4号 (韓国語), 納邑里.

1995 『納邑消息』第5号 (韓国語), 納邑里.

1997 『納邑消息』第6号 (韓国語), 納邑里.

朴桂弘

1982 『韓国の村祭り』東京: 国書刊行会.

環東中国海における二つの周辺文化に関する研究
— 沖縄と済州の「間地方」人類学の試み —

平成 10～12 年度科学研究費補助金
基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書
課題番号 10044011

平成 13 年 3 月 31 日 発行

研究代表者 津波高志
(琉球大学法文学部教授)

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地
琉球大学法文学部
TEL 098 (895) 2221 (代)

印刷 (資) 中央製版印刷
〒901-2201 沖縄県宜野湾市新城 1 丁目 7 - 5